

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第178集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成3年度分)

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成3年度分)

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

序

岩手県は、埋蔵文化財の宝庫だといわれています。この先人が遺した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。一方、幹線道路網の整備など、社会資本の充実も重要な施策であります。そして保護と開発の調和ということもまた今日的な課題であります。こうした見地から、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターでは、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、道路建設などに関連して、止むを得ず消滅していく遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。今年度は30遺跡、141,937㎡の調査を実施しましたが、調査された遺跡は県内の3市6町3村、また道路建設関連では19遺跡が調査されました。

調査しました遺跡の年代は、旧石器時代から中世の館跡にまでわたっており、当センターとしては初めての旧石器時代遺跡の調査も実施しました。また、全国的に注目を集めている柳之御所跡からは青銅製松鶴鏡が出土し、遺跡の年代決定資料になるものと考えられます。

発掘調査略報は、調査報告書の刊行に先だって、今年度に調査した30遺跡の調査結果の概要を収録したものであります。研究者のみならず、多くの方がたに活用され、埋蔵文化財への理解を一層深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を進めるにあたり、ご援助とご協力を賜りました委託者をはじめ、地元教育委員会やご教示を賜りました関係各位に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成3年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 工藤 巖

目 次

I. 日本道路公園関係

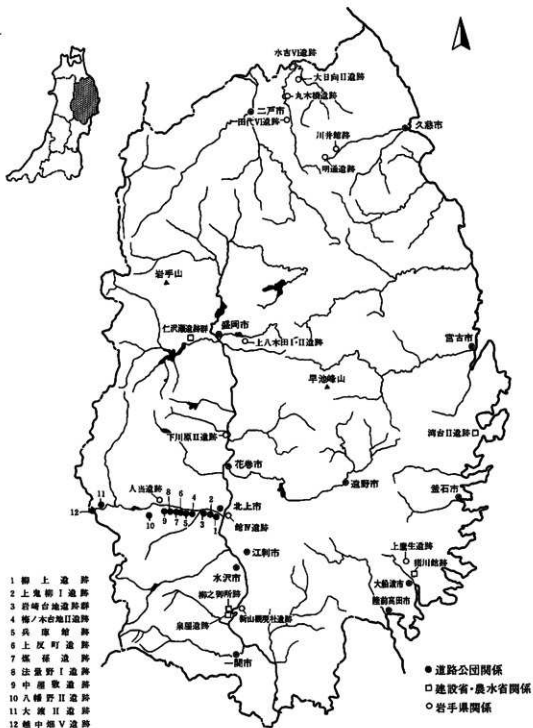
- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| (1) 柳上遺跡(北上市) …… 3 | (7) 煤孫遺跡(北上市) …… 37 |
| (2) 上鬼柳I遺跡(北上市) …… 9 | (8) 法量野I遺跡(北上市) …… 43 |
| (3) 岩崎台地遺跡群(北上市) …… 15 | (9) 中屋敷遺跡(北上市) …… 47 |
| (4) 梅ノ木台地II遺跡(北上市) …… 21 | (10) 八幡野II遺跡(北上市) …… 53 |
| (5) 兵庫館跡(北上市) …… 27 | (11) 大渡II遺跡(湯田町) …… 57 |
| (6) 上反町遺跡(北上市) …… 33 | (12) 越中畑V遺跡(湯田町) …… 61 |

II. 建設省・農水省関係

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| (1) 柳之御所跡(平泉町) …… 67 | (4) 猪川館跡(大船渡市) …… 93 |
| (2) 泉屋遺跡(平泉町) …… 81 | (5) 湾台II遺跡(山田町) ……101 |
| (3) 仁沢瀬遺跡群(滝沢村) …… 87 | (6) 水吉VI遺跡(軽米町) ……105 |

III. 岩手県関係

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| (1) 館IV遺跡(北上市) ……113 | (7) 下川原II遺跡(紫波町) ……141 |
| (2) 新山権現社遺跡(平泉町) ……117 | (8) 人当I遺跡(北上市) ……147 |
| (3) 大日向II遺跡(軽米町) ……123 | (9) 田代IV遺跡(九戸村) ……151 |
| (4) 丸木橋遺跡(九戸村) ……129 | (10) 上鷹生遺跡(大船渡市) ……155 |
| (5) 川井館跡(山形村) ……133 | (11) 上八木田I遺跡(盛岡市) ……161 |
| (6) 明通遺跡(山形村) ……137 | (12) 上八木田II遺跡(盛岡市) ……167 |



平成3年度調査遺跡位置図

I. 日本道路公団關係

(1) 柳^{よう}上^{しやう}遺跡

所在地 北上市鬼柳町上鬼柳第2地割28-1ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局
発掘調査期間 平成3年4月12日～11月22日
調査対象面積 3,400㎡
発掘調査面積 3,400㎡
遺跡番号・略号 ME65-2191・YS-91
調査担当者 小原眞一・工藤利幸・遠藤 修・佐々木信一・村上 修
酒井宗孝・鎌田精造・安藤邦彦・星 雅之・引屋敷 学
新倉信一郎
協力機関 北上市・花巻市教育委員会



1 : 50,000 北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

柳上遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線北上駅の西南西約4.2kmに位置する。和賀川右岸の河岸段丘上に立地し、標高は89～90m、和賀川との比高は約20mである。

現況は山林である。遺跡の西側には沢を挟んで上鬼柳IV遺跡が隣接し、さらに上鬼柳III・II遺跡が続いている。崖下には多数の湧水が見られる。

2. 調査の概要

本遺跡の調査面積は4,930㎡であるが、一昨年度90㎡、昨年度1,440㎡終了しているので、今年度は残りの3,400㎡の調査である。検出された遺構は縄文時代の住居跡98棟、掘立柱建物跡10棟、フラスコ状土坑14基、土坑64基、柱穴状土坑700基、配石遺構10基、平安時代の住居跡4棟である。調査区北東部には近世以降の基城があり、古い遺構を攪乱している。出土した遺物は縄文土器を中心に、土師器、須恵器、石器、石製品、土製品などである。

〈竪穴住居跡〉

縄文時代の住居跡98棟のうち27棟は炉と柱穴だけの検出で平面形は確認できなかったが、71棟の形状は長方形、円形、楕円形、不整の多角形で、規模別には4 m未満30棟、4～6 m未満29棟、6～8 m未満5棟、8 m以上7棟である。炉は土器埋設炉、土器埋設石囲炉、石囲炉、複式炉である。複式炉には埋設土器と長方形の土坑の組合せだけのものもあるが、西端部の住居跡の炉のように多数の円礫を組んでいるものもある。炉の構築される壁は東、西、南、北、南東、北東、南西と、特に構築される方位に偏りは見られない。また住居跡は同一地点で重複しているものが多く、M33住居跡のように数回の拡張が行われているものがある。

平安時代の住居跡は全て西端部に分布し、一辺が2～3 mの長方形か正方形の平面形を示す。カマドの位置は東壁2棟、北壁1棟、不明1棟であり、北壁に構築されている住居跡の埋土中には灰白色の火山灰が含まれている。

〈掘立柱建物跡〉

掘立柱建物跡は調査区全域に分布する。柱穴の配列から、4基の土坑が正方形か長方形の配列を示すものと、8基の土坑が六角形に配列するものの2種類に分けられる。前者は短辺長2.4～3.0m、長辺長3.5～4.0mで、後者は短辺長3～4 m、長辺長4～6 mの規模で、それぞれの土坑は長径0.7～1 m、深さ0.6～0.95mで、直径0.3m位の柱痕跡が確認されている。

〈フラスコ状土坑〉

フラスコ状土坑は調査範囲の西端部に2基、中央部5基、東端部7基と散在している。規模は長径1.5～1.8m、深さ0.7～1.6mである。中央部と東端部の4基は人為的に埋めた後、その

上部に炉が構築されている。

〈土坑〉

検出された64基は形状から、長方形7基、楕円形57基に分けられる。前者は0.5～1.4×1.0～1.8mで、後者は長径0.7～2.0m、どちらも深さは0.2～0.4mで断面形は浅皿状を示す。

〈柱穴状土坑〉

主に中央部から東端部に分布している。規模から長径0.25～0.5m、深さ0.15～0.4m程度のもとの、長径0.5～1m、深さ0.7～1mのものに2分される。小型のものは円形に並びそうなものもあることから、住居跡の柱穴の可能性はある。大型のものの中には直径30cm位の柱痕跡の確認されたものもあるので、掘立柱建物跡か住居の柱穴になると思われる。

〈配石遺構〉

配石遺構は西端部と東端部に多く分布している。そのうち西端部には長さ30～55cmの細長い石が4個、東端部には45～80cmの細長い石を16個を立てているものがある。その他のものは径5～30cm程度の円礫が0.5～2mの範囲に集中している。

〈出土遺物〉

土器は、縄文土器、土師器、須恵器で、大半は縄文時代中期末葉から後期初頭のものが中心である。土器片は磨滅しているものが多く、胎土に砂が多く含まれているためか脆くくずれやすい。土師器、須恵器は主に遺構内及びその周辺から出土している。

石器は、石鎌、石匙、石篋、石錐、石斧、石棒、石剣、磨石、石皿、凹石と多様である。そのほかに耳栓、土偶、首飾りと思われる石製品、管玉が出土している。

3. まとめ

一昨年から調査で、検出された遺構の総数は竪穴住居跡107棟、掘立柱建物跡10棟、プラスチック土坑16基、土坑68基、柱穴状土坑750基、配石遺構12基などとなっている。

3年間の調査の結果、柳上遺跡は縄文時代と平安時代の複合遺跡であることが判明した。特に遺跡の主体となる縄文時代中期末葉から後期初頭の住居跡が多数検出されたことから、その時期に大規模な集落を形成していたと考えられる。また集落の範囲は同時期のプラスチック土坑が数多く検出されている上鬼柳IV遺跡まで及ぶものと推測され、住居地区と貯蔵穴地区を分離するという集落の構造を探る好資料を得ることができた。



縄文時代の住居跡



縄文時代の住居跡



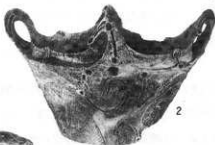
複式炉



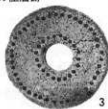
平安時代の住居跡



1



2



3



5



6



7



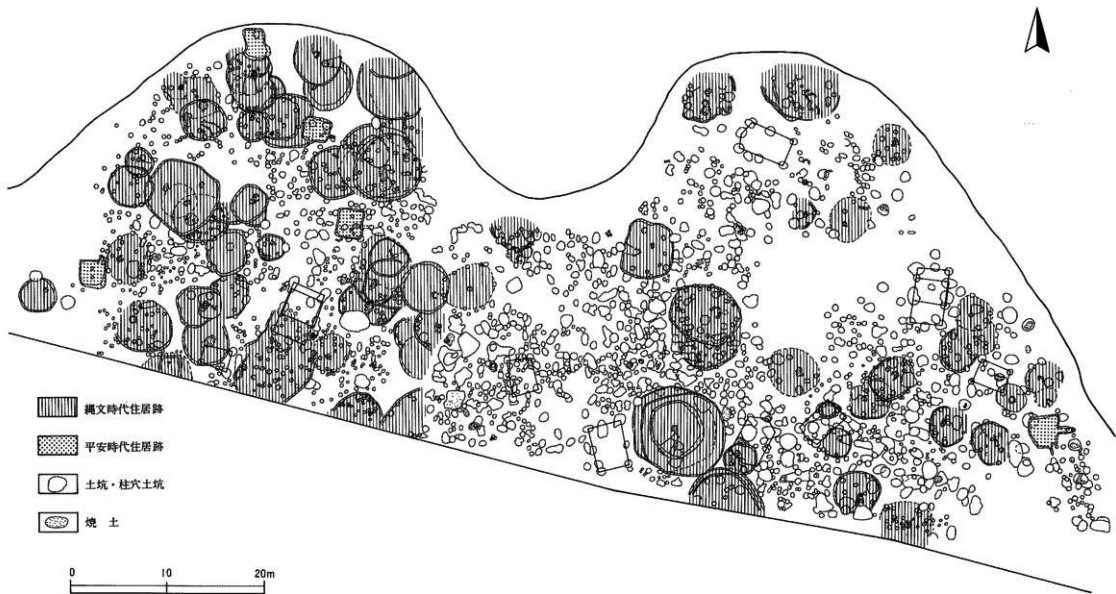
4



8

- 1・2 英瓦土器
3・4 耳 栓
5・6 有孔石製品
7 土 俵
8 菅 玉

柳上遺跡 検出遺構・出土遺物



柳上遺跡遺構配置図

(2) ^{かみ おに ちなぎ}上鬼柳 I 遺跡

所在地 北上市鬼柳町上鬼柳第2地割214ほか

委託者 日本道路公園仙台建設局

発掘調査期間 平成3年4月12日～5月23日

調査対象面積 1,300㎡

発掘調査面積 1,300㎡

遺跡番号・略号 ME64-2042・KOI-91

調査担当者 佐々木信一・鎌田精造

協力機関 北上市教育委員会



遺跡位置図

1. 遺跡の立地

上鬼柳Ⅰ遺跡は、東日本旅客鉄道江釣子駅の南南西約2.3km付近に位置し、和賀川右岸の河岸段丘上に立地する。標高は91～93m、和賀川との比高は21～23mである。遺跡の現況は、水田・畑地・山林である。

本遺跡の西側は市道を挟んで岩崎台地遺跡群、東側は深い沢を挟んで上鬼柳Ⅱ遺跡に接する。

2. 調査の概要

昨年度からの継続調査で、本年度は調査区域南西部の一部と北西部が対象である。検出された遺構は、弥生時代の住居跡3棟、墓墳1基、土坑8基、陥し穴状遺構3基、炉跡1基、溝跡2条である。出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器である。

〈弥生時代の住居跡〉

3棟のうち1棟は調査区域西側から、2棟は東側から検出された。そのうち、平面形を確認できたのは1棟であり、直径約3.7mの円形である。中央部に炉が設けられている。炉は礎20数個を円形に配した石囲炉で、一部2列に配されている所もある。径は約85cmであり、内部には最大12cmの厚さに焼土層が形成されている。また、壁に沿って幅15～25cm、深さ11～23cmの周溝が巡っている。2棟は炉と柱穴を検出しただけであり、炉はともに地床炉である。時期は出土遺物から弥生時代初頭と思われる。

〈墓 墳〉

土墳墓が1基検出されている。平面形は径60×90cmの楕円形をなし、深さは6～12cmで北西側ほど深い。中央やや北西寄りに径25×35cm、深さ約10cmの掘り込みをもっている。埋土中から甕の底部が斜めに伏せた状態で出土している。出土遺物から弥生時代初頭のものと思われる。

〈土 坑〉

8基検出されている。調査区域西端に2基、北西端に3基、東側に3基である。西端の2基は平面形が円形と楕円形で、断面形はどちらもフラスコ状である。北西端の3基のうち2基は平面形が円形をなし、断面形は浅いピーカー状である。残り1基は平面形が0.85×1mの長方形をなし、深さ20～25cm、長軸方向はほぼ南北である。東側の3基のうち2基は他の土坑に比べ規模が小さく、埋土中に炭化材が混入している。残り1基は平面形が65×80cmの楕円形をなし、深さは16～25cmである。

〈陥し穴状遺構〉

溝状の陥し穴状遺構が3基検出されている。最大のものは、開口部径0.55×2.95m、底部径0.2×2.75m、深さは最深部で95cmである。3基とも長軸方向は北東―南西である。

〈炉 跡〉

調査区域西側に1基検出されている。40×45cmの不整形に広がる焼土の中央部付近に、底部を欠いた土器が正立した状態で埋設されている。焼土の厚さは最大で10cmである。炉跡に伴う柱穴や周溝等は確認されなかった。時期は埋設土器から弥生時代初頭と思われる。

〈溝 跡〉

昨年度検出した2条の溝跡の続きと、今年度新たに2条の溝跡が検出されている。そのうち、1条は調査区域内を曲折しながら、ほぼ北北西—南南東に走っている。もう1条は、その溝の途中から分かれているものである。断面形はU字状や浅皿状である。いずれも時期は不明である。

〈出土遺物〉

出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器で、大半は調査区域東側から出土している。縄文土器は後・晩期のもので、特に晩期が多く、器種は甕、深鉢である。弥生土器は浅鉢、甕が出土しており、時期別に2分される。石器は石鏃、凹石、磨石などであり、黒曜石の剥片も1点出土している。土師器は内黒の坏が、須恵器は坏や甕が出土しているが、いずれも細片で少量である。

3. まとめ

昨年度からの調査で、本遺跡は縄文時代の狩場跡と弥生時代の集落跡であることが明らかになった。また、今年度は検出されなかったが、昨年度の調査で古代の墓墳が検出されていることから、同時代の墓域の可能性も考えられる。



遺跡近景(南東から)



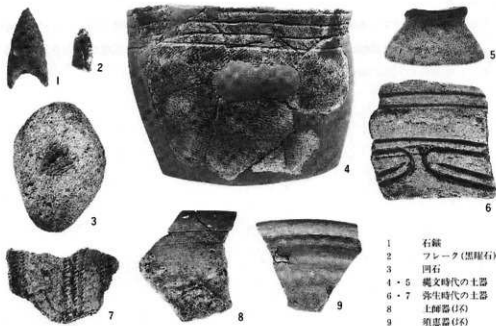
弥生時代の住居跡



弥生時代の土坑墓(土器出土状況)

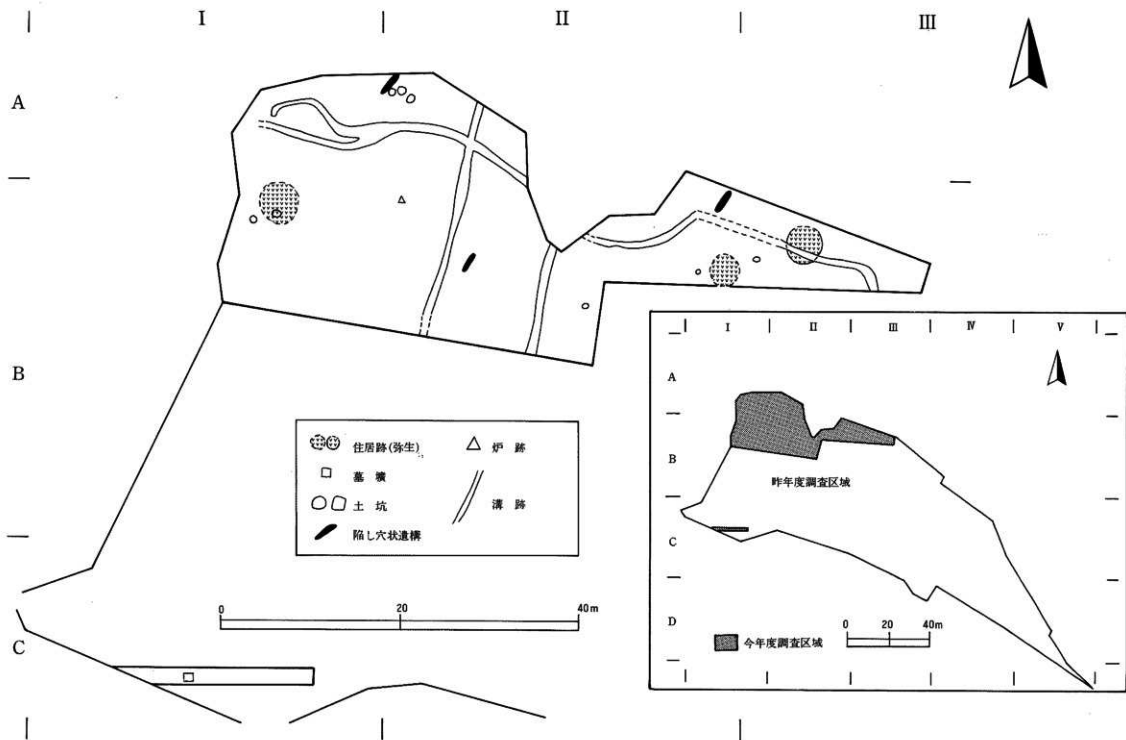


炉跡断面



- 1 石鏃
- 2 フレーク(黒曜石)
- 3 四石
- 4・5 縄文時代の土器
- 6・7 弥生時代の土器
- 8 土師器(片)
- 9 須恵器(片)

上鬼柳Ⅰ遺跡 検出遺構・出土遺物



上鬼柳 I 遺跡遺構配置図

(3) いわきまだいち 岩崎台地遺跡群

所在地 北上市和賀町岩崎第12地割197地

委託者 日本道路公団仙台建設局

発掘調査期間 平成3年4月15日～8月10日

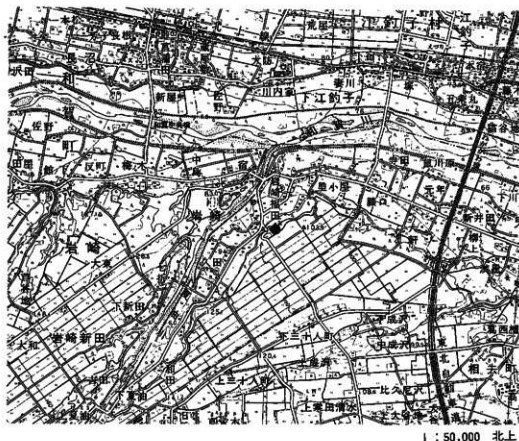
調査対象面積 3,700㎡

発掘調査面積 3,700㎡

遺跡番号・略号 ME64-228・ISD-91K

調査担当者 高橋與右衛門・新倉信一郎

協力機関 北上市教育委員会



遺跡位置図

1. 遺跡の立地

北上市役所の西6km、東日本旅客鉄道北上線藤根駅の南東3.5km付近に位置し、夏油川が形成した河岸段丘状をなす夏油扇状地の扇端部崖沿いに立地する。標高は100m前後である。

夏油川は、本遺跡の北西1.5kmで和賀川と合流し、和賀川は遺跡の北方1.3kmを東流する。和賀川右岸の沖積面とは20～25mの比高があり、調査地点の現況は畑と道路や林である。

2. 調査の概要

当遺跡群には東から欠の下台地・伍大坂Ⅱ・伍大坂Ⅰ・高田坂・久田Ⅱの各地区があり、今年度は久田Ⅱ地区の調査を実施し、本遺跡群に対する発掘調査は本年度で全て終了した。

今年度の調査によって竪穴住居跡19棟、掘立柱建物跡2棟、土坑15基、陥し穴状遺構35基、井戸跡1基、溝跡18条、古墳3基の遺構が発見され、これらの遺構に伴う土師器と須恵器を主とする各種の遺物が出土した。

〈竪穴住居跡〉

今年度新たに17棟発見された。西寄りの分布密度が若干高いものの、範囲全域に散在する。

規模は、最大5.8×6.6m、最少2.5×2.7mと差が大きく、8棟が3.5～4.5mに該当し、平面形はほぼ隅丸方形をしめす。壁高は5～48cmと差が大きく、西端部寄りに位置する住居跡ほど高い傾向がある。カマドの設置方向には、北東壁～東壁12棟、南東壁7棟があり、左右どちらかの隅に若干寄る。袖部にシルトを積み上げる3棟の他は袖部や焚口部に礎を埋設し、その両側や外側にシルトを貼り付けている。煙道部は割り貫き式5棟、掘り込み式11棟、不明3棟になる。9棟で3～5本の柱穴が検出され、対角線や壁際に全体を寄せて配置する。

共伴遺物は、クワク使用成形による土師器の坏と甕を主体に、須恵器の坏と甕や若干の鉄製品を含む。以上の遺物から、検出された住居跡はいずれも平安時代に属する。

〈掘立柱建物跡〉

2棟は西端部南側に約10mの距離で位置する。規模は、西の1棟が桁行3.6m（2間）、梁行3.2m（2間）で、桁行が北に対し63°東偏する。東の1棟は、東西を示す4.7m（2間）の柱列一条の検出であり、南側の調査区域外に延びる。柱穴掘り方は径40～50cmの円形や楕円形をなし、深さは30～40cmである。

遺物の出土がなく断定出来ないが、埋土や重複から2棟とも平安時代と推定される。

〈土坑〉

18基はほぼ全域に散在するが、西部寄りの密度が高い。規模は、径が最少55×60cm、最大190×200cmと差が大きいものの、長径1m台に11基が該当する。平面形は円形や楕円形が主体をな

し、若干の方形気味や長方形を含む。深さは10～100cmの範囲であるが、50cm未満の例が主体を占め、断面形は皿形、浅皿形他僅かのピーカー形とフラスコ形がある。

共伴遺物が少なく時期の特定は困難であるが、埋土の状況から大方は平安時代であろう。

〈井戸跡〉

最西端部から1基検出されている。開口部径350×370cm、底部径40×45cm、深さ190cmの規模で、断面形が摺鉢形を示す地山井筒の素掘井戸である。

埋土内に十和田a降下火山灰が堆積することや、出土遺物等から平安時代の井戸跡である。

〈陥し穴状遺構〉

35基はほぼ全域に散在するが、西端部寄りの分布が多く、これらは平面形によって円形型28基、長方形型5基、溝状型2基に大別される。規模は、円形型は開口部径75～230cm、深さ69～160cmであり、16基では底面に1～3本の副穴を持つ。長方形型は長軸100～190cm、短軸70～110cm、深さ45～130cmの規模を持つ。溝状型は、長軸3m前後、短軸40cm前後、深さ90～100cmの規模があり、底面の長軸が400cm前後と両端の壁が大きく扶られる。

共伴遺物がなく時期不明であるが、住居跡との重複関係から平安時代以前の遺構である。

〈古墳〉

現在までに発見された7基は段丘崖沿いの平坦面に散在し、重複や接する例はない。規模は、内径で4～5.4mの円形や楕円形を示し、墳丘は未確認である。周濠は、巾0.4～1.6m、深さ0.1～0.45mと差があり、一部が途切れる馬蹄形をなす。主体部は長軸1.7～2.4m、短軸0.7～1m、深さ0.1～0.72mの長方形や長楕円形を示し、主軸方位には各方向がある。また、主体部底面の壁際に溝を巡らす例が多い。

出土遺物は、土師器の壺・鉄製の鎌・鏟子・直刀・刀子、黒曜石製の拇指状ラウンドスクレパー等があり、これらは7世紀代の遺物と推定され、当古墳群も7世紀代に属しよう。

3. まとめ

調査が全て終了し、今後の整理で当遺跡群の全体像が明らかとなろう。特に、遺構と遺物の検討による集落の時期区分、古墳と北海道統縄文期に共伴する黒曜石製遺物の関係や、中央部で検出された大規模な掘立柱建物跡の時期と性格等が、今後に残された大きな課題である。



調査後全景(西から空中写真)



D III Q17古墳



1



4



5



2



3

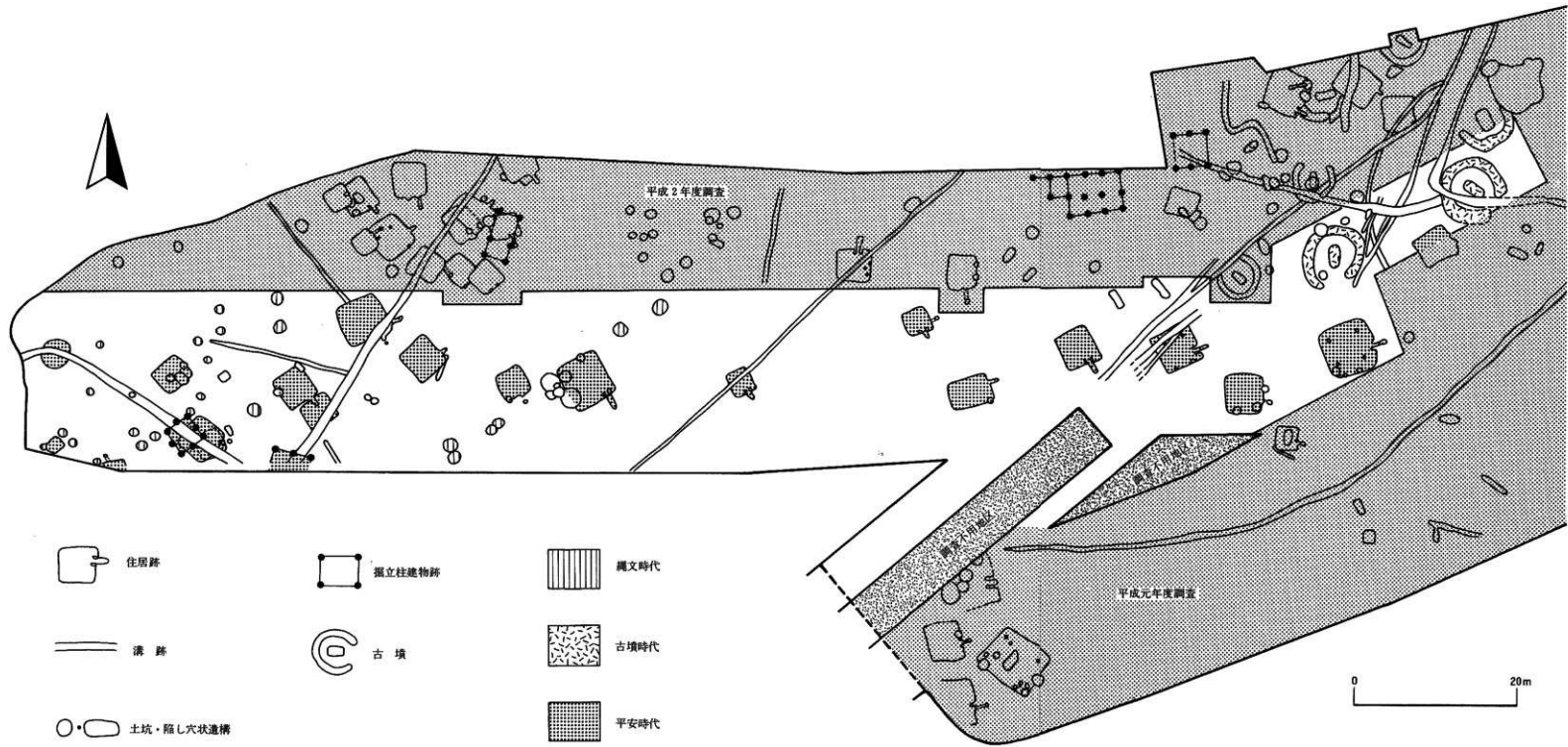


6

1 土師器
2-5 鉄器
6 鉄製鏃

D III Q17古墳出土遺物

岩崎台地遺跡群 検出遺構・出土遺物



岩崎台地遺跡群遺構配置図

(4) 梅ノ木台地II遺跡

所在地 北上市和賀町岩崎20地割24-1ほか

委託者 日本道路公団仙台建設局

発掘調査期間 平成3年7月15日～11月8日

調査対象面積 3,890㎡

発掘調査面積 3,890㎡

遺跡番号・略号 ME64-2112・UMII-91

調査担当者 川村 均・藤村 隆

協力機関 北上市教育委員会



1 : 50,000 北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

本遺跡は、東日本旅客鉄道北上線藤根駅の南南西約2.4km付近に位置する。奥羽山脈から東流する和賀川の右岸に発達した洪積世低位段丘上に立地し、和賀川とその支流夏油川の合流地点からは西へ約2kmである。東側には梅ノ木台地Ⅰ遺跡、岩崎城西遺跡、岩崎城跡があり、西側には兵庫館跡、上反町遺跡、煤孫遺跡などがある。調査区域の標高は122～123m、和賀川の沖積面との比高は37～40mである。現況は山林である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、次のとおりである。土器埋設遺構1基、竪穴住居跡3棟、焼土遺構11基、土坑6基、溝跡1条である。出土した遺物は縄文土器、弥生前期・中期・後期の土器、土師器、須恵器などである。

〈土器埋設遺構〉

調査区ほぼ中央部で弥生土器の壺を埋めた土器埋設遺構が1基検出された。掘り込みは、黒褐色土から地山に及んでいる。壺の大きさは胴部径35cm、高さ38cmほどである。口縁部が割れているがほぼ完形である。

〈竪穴住居跡〉

平安時代の竪穴住居跡は3棟検出されている。1棟は調査区北西端の調査区域外にかかり、検出できたのは、全体の約半分である。南東の隅にカマドをもち、カマドおよび煙道部は自然礫を使用し構築している。大きさは東西が約4mである。埋土に灰白色の火山灰が堆積している。もう1棟は調査区中央部の南で検出された。調査前から周囲の地形より凹地となっており大きな礫が地表に現れている状況であった。これは改築があり一回り大きく拡張されている。平面形はどちらも長方形を呈する。古い住居跡の規模は4.5×4m、カマドは東向き、新しい住居跡の規模は7×5.4m、カマドは南向きである。埋土下部に灰白色の火山灰がみられる。

〈土坑〉

土坑は6基調査区西側で検出されている。形状は、皿状の浅い掘り込みのものが4基、ピーカー状1基、方形状1基で、フラスコ状の土坑は検出されなかった。時期は平安1基で、他については新しいものと思われるが詳細は不明である。

〈焼土〉

焼土遺構は調査区で11基検出されている。とくに、西側沢沿いでは5基と集中している。ほとんど、Ⅱ層中で検出され、焼土の厚さは数cmほどである。1基はその上部から弥生土器が一括して出土している。また、検出面から、弥生土器片、土師器片や黒曜石剥片が出土している

ものもあるが、墓墳のような掘り込みはみられない。時期、性格については今後の整理を進める中で検討したい。

〈溝 跡〉

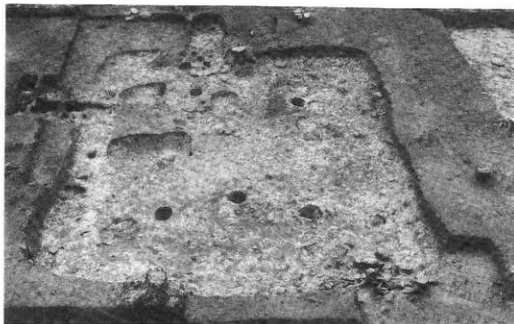
溝跡はII層中で検出され、中央部を東西に走る。長さ80m 幅30～50cm、深さ10～50cm、断面形はU字状である。地山まで掘り込んではいなく、おそらく東の沢まで続いていたものと推定される。地境溝と思われるが時期は特定できない。

〈出土遺物〉

土器類は遺物収納大コンテナで3箱、石器は石鏃、石斧、石棒、敲石、不定形石器、凹石、砥石など約80点、黒曜石のラウンドスクレーパー3点および多数の黒曜石剥片が出土している。土器は縄文後期が若干、晩期、弥生前期、後期が中心である。弥生土器は天王山式に併行する土器片が広範囲にわたりみられた。土師器、須恵器は住居跡を中心にその周囲から少量、また、破片ではあるが、7世紀代と思われる段のある坏が数点、頸部に段のある甕が出土している。ほかに土製の紡錘車（撚糸文施文）が1点出土している。

3. まとめ

今回の発掘の結果、平安時代の竪穴住居跡が3棟発見されたことから、古代の人々の生活舞台であることが確認された。岩崎台地遺跡群のように竪穴住居跡の棟数は多くはないが、段丘崖に近い場所に散村のように点在しているものと思われる。さらに、縄文、弥生の竪穴住居跡は検出されなかったが、縄文土器・弥生土器・石器などが少量みつまっていることから、当時の人々の生活の場であったことが窺われる。おそらく、周辺に集落が存在するものと思われる。また、遺構外出土の黒曜石のラウンドスクレーパーについては、同様の形態のものが岩崎台地遺跡群の古墳からでており、時期・性格について比較検討に値する貴重な資料と思われる。



整穴住居跡



弥生土器



弥生土器



石器



石器



紡錘車



石器



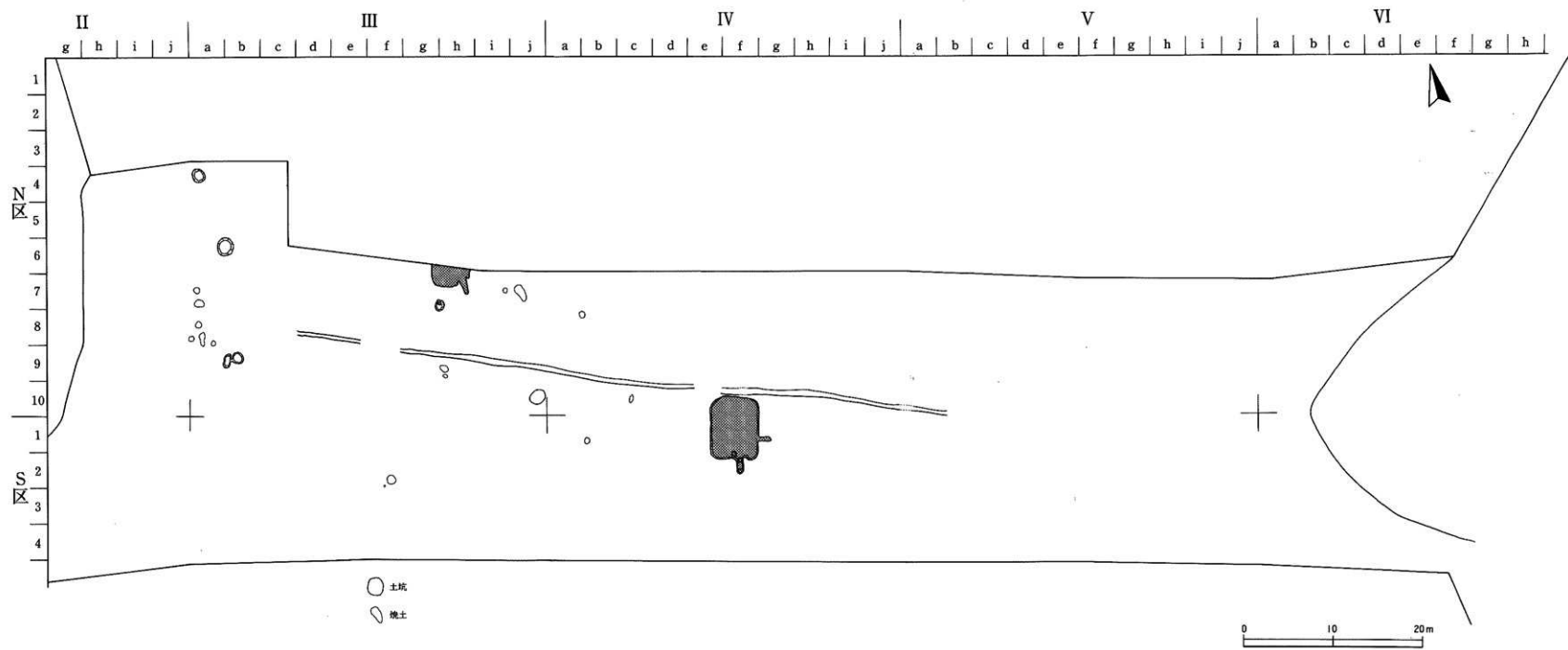
弥生土器



須恵器



梅ノ木台地Ⅱ遺跡 検出遺構・出土遺物



梅ノ木台地Ⅰ遺跡遺構配置図

(5) 兵 庫 館 跡

所 在 地 北上市和賀町煤孫6地割64-6ほか

委 託 者 日本道路公団仙台建設局

発掘調査期間 平成3年4月15日～8月22日

調査対象面積 2,150㎡

発掘調査面積 2,150㎡

遺跡番号・略号 ME64-2019・HGD-91

調査担当者 川村 均・藤村 隆

協力機関 北上市教育委員会



1 : 50,000 北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

本遺跡は、東日本旅客鉄道北上線藤根駅の南々西約2.4km付近に位置する。奥羽山脈から東流する和賀川の右岸に発達した洪積世低位段丘上に立地し、和賀川とその支流夏油川の合流地点からは西へ約2kmである。東側には梅ノ木台地Ⅱ遺跡、岩崎城跡などがあり、西側には上反町遺跡、煤孫遺跡などがある。調査区域の標高は122～123m、和賀川の沖積面との比高は37～40mである。現況は山林である。

2. 調査の概要

検出された遺構は次のとおりである。弥生時代の墓墳1基、土器埋設遺構3基、配石1基、平安時代の竪穴住居跡1棟、また中世の館跡に伴う遺構としては堀跡1条、土塁3条(郭内1、郭外2)、柵列(溝状)2条、柵列に伴う柱穴列4列、門跡、土塁に伴う溝跡2条が検出された。時期不明の遺構としては土坑2基、掘立柱建物跡、焼土2カ所があり、ほかに近現代の炭窯跡1基がある。

〈墓 墳〉

調査区北側(館郭内)で1基検出された。Ⅱ層黒褐色土上面から検出され明瞭なプランは確認できなかったが径120×70cm、深さ約50cmの規模と推定される。その中に3個体の土器が極めて近接して埋設されている。そのうちの中央の4号土器(遺構配置図参照)は口縁部は欠けているが、肩部から体部にかけて3本の沈線が3段に施文され、2段目から3段目にかけて縦に3本の沈線が引かれている遠賀川系土器の大型の壺である。また、北側の3号土器は完形で口唇部に刻みがあり、口径が広いわりに器高が低い鉢形土器である。2個体ともに底部穿孔土器である。また、5号土器は合わせ口土器棺である。壺に鉢形土器を被せた状態で検出されている。3～5号土器はいずれもほぼ正立に埋設されており完形または完形に近い状態である。

〈土器埋設遺構〉

墓墳より西へ1mほどの所に壺が斜位が埋設されている。調査区南側でも2基の埋設土器が検出されている。1号土器は体部全面に横位に縄文が施文される底部を欠く甕で、正立に埋設されている。この中には赤彩された小型の壺が倒立状態で埋納されている。2号土器は無文の壺で上部に河川礫とフレークが配置されている。

〈配石遺構〉

2号土器の西約1.5mに石核を伴った円形状の配石が検出されている。径50×35cm、深さ50cm程の規模であり、丸い敲石を含め10数個の河川礫が使用されている。

〈竪穴住居跡〉

調査区北側郭内で1棟が検出された。平面形は方形で規模は2×2.4m、壁高50cm、カマドの位置は北東、煙道部は摺り込み式とみられる。埋土に灰白色火山灰がみられる。床面からクロ使用成形の坏が5点出土しており、そのうち2点には墨書がみられる。

〈中世の館跡に伴う遺構〉

郭は方形に突出する段丘の基部を空堀で切断して構築されている。堀跡は東西約32m、上幅5～6m、深さ2.5～3mの葉研堀である。郭の外には堀跡と段丘崖に接して2条の土塁がある。規模は、長さ約23mと10mである。

さらに郭内にも堀に沿い高さ0.6m程の自然礫を積み上げたものがみられる。郭内に検出された堀列(溝状)は堀に平行し、門跡付近から東と西に直線状に延びる。東側全長13.5m、上幅は50～90cm、深さ70cm、西側は全長8.5m、上幅50～60cm、深さ70cmである。堀列に伴う柱穴列は入り口を起点に東と西に各2列東西方向に並ぶ。柱穴の形状は円形で径40～50cm、深さ50～100cmである。門跡については数組みられる。

〈土坑、掘立柱建物跡、焼土〉

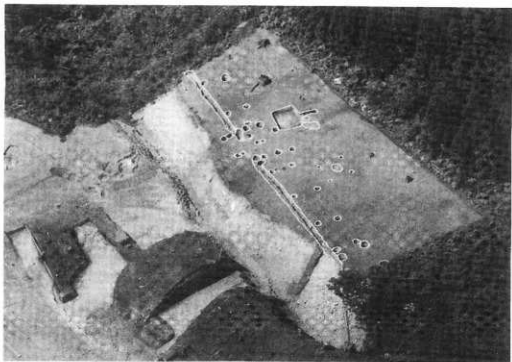
土坑は郭内に1基(径70×90cm、深さ20cm)、調査区南側に1基(径90×130cm、深さ20cm)である。焼土は郭内に2カ所(径30cmの円形、25cmの三角形、厚さ10cmほど)みられる。掘立柱建物跡は郭内で検出され4本柱で柱間2mほどである。柱穴の大きさはいずれも径20cm前後で深さは25～40cmである。中央には土坑2があり共伴関係にあるように思われる。これらの土坑、焼土、掘立柱建物跡の時期、性格については不明である。

〈出土遺物〉

土器類は遺物収納大コンテナで3箱、また、9個体の埋設土器と共伴する土器を含む。石器は石鏃11点、石斧4点、石棒2点、敲石1点、不定形石器100点余り、砥石2点、剥片多数である。土器の大半は弥生時代のもので、その他縄文時代の土器、土師器、須恵器が少量出土している。また、堀の埋土より銅鏡の破片、寛永通寶各1点が出土しているが、館跡に伴う陶器類は出土していない。弥生土器は前器・中期のものが多く、器種は甕・浅鉢・壺・蓋・高坏である。遠賀川系土器の出土は北上川流域においては今のところ初めてである。

3. まとめ

今回の調査により館跡の存在が明らかとなった。一部の発掘のため全体像はとらえられないが、郭の入り口施設、堀の構造、規模などを解明するため良好な成果が得られた。また、弥生時代や古代の遺構も発見され、複合遺跡であることも明らかとなった。特に、埋設土器や墓塚から出土した土器群は残存状態が良く、当地方の弥生時代の葬制を考える上で極めて貴重な資料になると思われる。

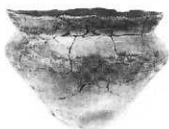


館全景

弥生土器



4号土器



3号土器

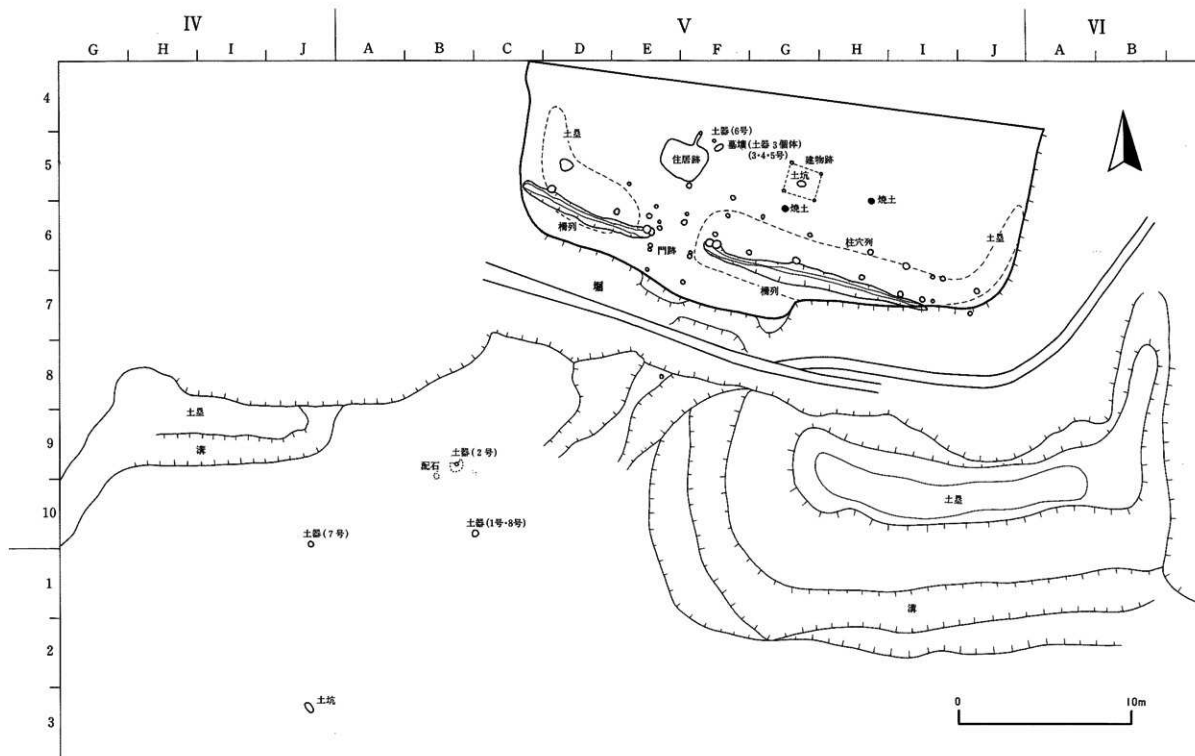


7号土器



8号土器

兵庫館跡 全景・出土遺物



兵庫館跡遺構配置図

(6) ^{かみ}上 ^{そり}反 ^{まち}町 遺跡

所在地 北上市和賀町煤孫第6地割60-2

委託者 日本道路公団仙台建設局

調査期間 平成3年8月7日～10月29日

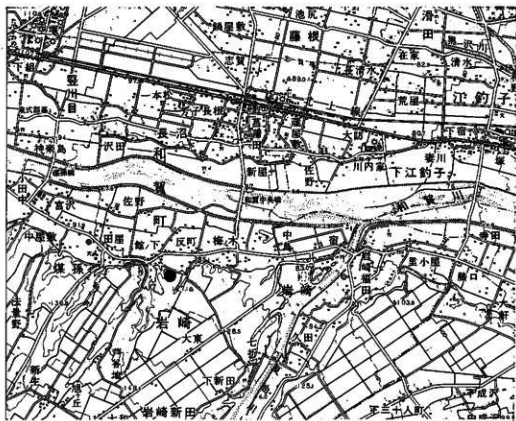
調査対象面積 1,620㎡

発掘調査面積 1,620㎡

遺跡番号・略号 ME64-2025・KS91

調査担当者 伊東 格・新倉信一郎

協力機関 北上市教育委員会



1 : 50,000 川尻・北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

上反町遺跡は、東日本旅客鉄道北上線藤根駅の南々西約2km付近に位置し、和賀川の右岸に発達した洪積世低位段丘上に立地する。今年度の調査区は和賀川の沖積面に舌状に突出した部分で、標高は122～123m、和賀川の沖積面との比高は37～40mである。調査区の現況は山林である。

2. 調査の概要

陥し穴状遺構1基、中世の館跡に伴う堀跡1条、時期不明の集石遺構1基が検出された。

〈陥し穴状遺構〉

調査区北端の西寄りに位置し、遺構の北端は調査区外へ続く。平面形は細長い溝形を呈し、短軸の断面形はU字形である。出土遺物はない。

〈中世の館跡に伴う堀跡〉

段丘の東西を横断して構築されている。北側の調査区外にはもう2条の堀跡が認められる。規模は東西の長さ48m、上幅9～10m、深さは最大1.6mである。堀の両側は、地山起源の黄褐色土を盛り上げて土塁としている。柵列、門跡に類するものは認められない。堀跡の北側に面する土塁の裾に幅約2mに石を断続的に葺いている。

〈集石遺構〉

調査区の北西に位置し、堀跡の土塁の北にある。多数の礫を積み重ねて構築されている。平面形は楕円形である。掘り込みはなく、埋土も単層である。

〈出土遺物〉

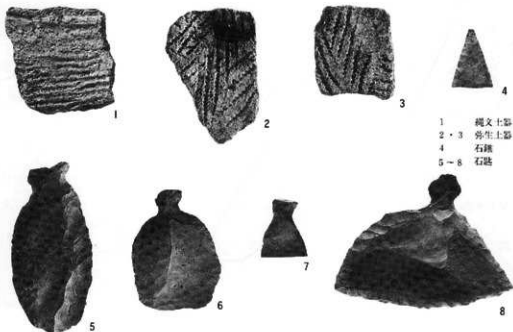
土器片3点、石器5点が出土しているが、遺構に伴う遺物ではない。

3. まとめ

本遺跡は縄文時代と中世の複合遺跡である。縄文時代の遺構は、陥し穴状遺構1基であり、縄文時代には狩り場として使用されていたことがわかる。中世の遺構は館跡に伴う堀跡1条であり、北側の調査区外には2条の堀跡が認められることから、調査した堀跡の北側が郭部にあたる。本遺跡の東側には兵庫館跡、西側には観音館跡が位置することから、本遺跡はこれらの中世の館跡と一連のつながりを持つものと考えられる。

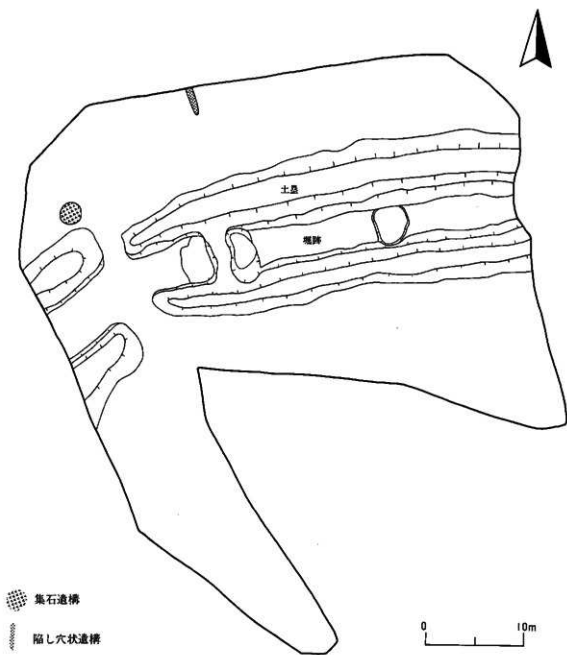


中世の竈跡に伴う堀跡



- 1 縄文土器
2・3 弥生土器
4 石鏃
5~8 石鉢

上反町遺跡 検出遺構・出土遺物



上反町遺跡 遺構配置図

(7) 煤 孫 遺 跡

所在地 北上市和賀町煤孫5地割49-6ほか

委託者 日本道路公団仙台建設局

発掘調査期間 平成3年4月15日～9月2日

調査対象面積 3,600㎡

発掘調査面積 3,600㎡

遺跡番号・略号 ME63-2318・SM-91

調査担当者 東海林隆幹・熊谷博由

協力機関 北上市教育委員会



1 : 50,000 川尻・北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

煤孫遺跡は、東日本旅客鉄道北上線藤根駅の南西約3kmに位置し、和賀川右岸の河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は123～127mで、東から西にかけて低位となる。河岸低地との比高は約30mである。現状は南側が水田、北側が畑地・山林であり、道路を挟んで東に観音館跡、沢を挟んで西に法量野I遺跡が続いている。

2. 調査の概要

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡5棟、平安時代の竪穴住居跡3棟、土坑268基、(柱穴状ピットを含む)、陥し穴状遺構3基である。出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、板状土偶、石器、石製品等である。

〈縄文時代の竪穴住居跡〉

検出された5棟は、調査区を東西に横切る農道の北側の傾斜変換点付近に集中し、全て重複する。全容を検出できたのは1棟のみであり、平面形は径5mの円形で、中央に深さ15cm程の落ち込みを有する。

他は重複がはげしく、それぞれの平面形が正確に把握できないが、柱穴の配置等から推定すると径6～8mの円形又は楕円形の住居跡と考えられる。炉は、石囲炉を持つものが1棟で残りは地床炉である。

時期は、出土遺物から縄文時代前期末葉と思われる。

〈平安時代の竪穴住居跡〉

検出された3棟のうち1棟は縄文時代の住居跡と重複しており、カマドの位置は不明であるが検出された北側と東側のプランから推定すると、一辺が6m前後の隅丸方形をなす住居跡と考えられる。

他の2棟は一辺が4mほどの隅丸方形を示す住居跡で、カマドの位置は西側の1棟が東向き、大型土坑に隣接した1棟が南東向きである。後者の住居跡からは、まとまった量の炭化材が出土しており、焼失家屋と考えられる。

〈土 坑〉

検出された268基のうち、大型の土坑が14基、小型の土坑が81基、柱穴状ピットが173基である。

開口部が2mを超える大型のものは、縄文時代の住居跡の北側から西側にかけて集中しており、そのうちの一部は北東から南西にかけて列状に並んでいる。平面形は、楕円形や隅丸長方形のものが多く、その殆どが底部に副穴を有している。時期は、出土遺物から縄文時代の住居

跡とほぼ同時期であると考えられる。

小型の土坑や柱穴状ピットは、大型土坑の西側から調査区西端にまで分布しており、西端に近い所ほどその密度が高い。西側の土坑の中には、扁平な礫や石棒状の礫を意識的に立てて埋めたと考えられるものや、底部に礫が入るものが数基検出されている。また、柱穴状ピットの中には柱痕跡の周りを粘土で固めたものや、底部に粘土を敷いたものなどがいくつか見られる。

〈陥し穴状遺構〉

3基とも開口部が長軸2mを超える楕円形で、底部が長方形を呈しており、深さはいずれも150cm以上である。調査区内ではそれぞれ単独に分布している。

〈出土遺物〉

縄文土器は、住居跡や大型土坑を中心に大コンテナで30数箱出土しており、その殆どが前期末葉に位置づけられるものである。中にはフラスコ型の土坑の底部から、ほぼ宍形の土器がふせた状態で出土している例もある。また、調査区北端の土坑1基から晩期末の壺と高坏と思われる破片が出土している。土師器と須恵器は、平安時代の竪穴住居跡を中心に数箱出土している。また、縄文時代の竪穴住居跡から上半身が残存している板状土偶が1点出土している。

石器は総数1,000点ほどで、その4分の3が遺構内から出土している。器種別に見ると、昨年同様石錘が最も多く300点を数え、以下スクレーパー類155点、断面が逆三角形の特殊磨石95点、磨石80点、石鎌50点、石笥40点、石匙35点と続いている。そのほか石製品は、石剣の破損品と思われるものや、垂飾など数点出土している程度である。

3. まとめ

縄文時代の住居跡の西側に貯蔵穴と思われる大型土坑群が広がり、さらにその西側に墓塚と思われる礫の入った土坑がいくつか検出された事から、目的に応じた意図的な遺構の配置がなされていたことが予想される。

また、縄文時代前期末葉の土器が多量に出土したことにより、当該時期の土器編年上貴重な資料が得られた。



切り合い住層と土坑群(北から)



礫が入る小型の土坑



並ぶ大型土坑群



粘土をしいた柱穴状ビット



1



2



3



4



5



7



8



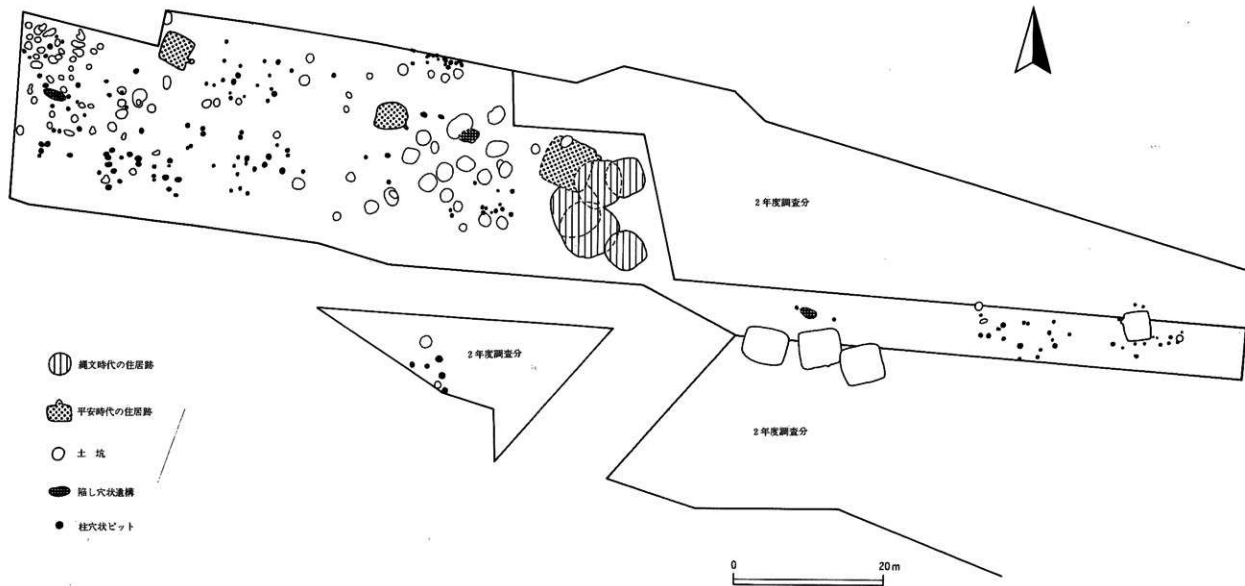
9



6

- 1・2・3 縄文土器
4 土師器
5・6 石 器
7 アメリカ式石鏃
8・9 垂 飾

煤孫遺跡 検出遺構・出土遺物



煤孫遺跡遺構配置図

1. 遺跡の立地

法量野 I 遺跡は、東日本旅客鉄道北上線堅川目駅の南南東約3.1kmに位置し、和賀川右岸の河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は127mであり、和賀川との比高は37mである。遺跡の東側は市道田屋・法量野線と宮沢に区切られ煤孫遺跡に続き、西側は小沢に区切られ中屋敷遺跡に続いている。調査区の現状は山林である。

2. 調査の概要

昨年度からの継続調査で、本年度は精査のみである。検出された遺構は、土坑4基、陥し穴状遺構20基、溝跡3条、炭窯1基、焼土遺構3カ所である。

〈土 坑〉

東側に3基、西側に1基検出された。平面形はいずれも円形ないし楕円形であり、規模は開口部径90～180cm、深さ45～90cmである。出土遺物はなく、時期不明である。

〈陥し穴状遺構〉

検出された20基は、形状によって円形5基、長方形9基、溝状6基の3形態に分けられる。円形を示す5基は中央部に位置し、ほぼ南北に列をなして分布している。その他のものには規則性は認められず広範囲に点在する。規模は、円形のもの開口部径105～195cm、深さ105～135cmであり、いずれも底部中央に副穴1個をもつ。長方形のものは開口部で長軸方向が175～245cm、短軸方向が85～225cm、深さ60～160cmで、底部に3～4個の副穴をもつものが3基、副穴のないものが6基である。溝状のものは長さ310～410cm、深さ40～130cmである。遺物は出土しなかった。

〈溝 跡〉

東端に位置する溝跡は東西に延び、長さ8m、幅30～85cm、深さ最大18cmで東端は調査区外に続いている。東側と中央に位置する溝跡は北西―南東に延び、両端は消失している。東側のものは長さ26m、幅25～50cm、深さ最大18cmで、中央の溝跡は長さ13m、幅17～35cm、深さ最大7cmである。いずれも出土遺物はなく、時期は不明である。

〈焼 土〉

3カ所の焼土遺構は、調査区西側に位置し、最大で東西20m、南北27mの範囲に黒褐色～暗褐色土混じりので不整に広がるもので、層厚は最大で15cmである。現地性焼土は検出されなかった。

〈炭 窯〉

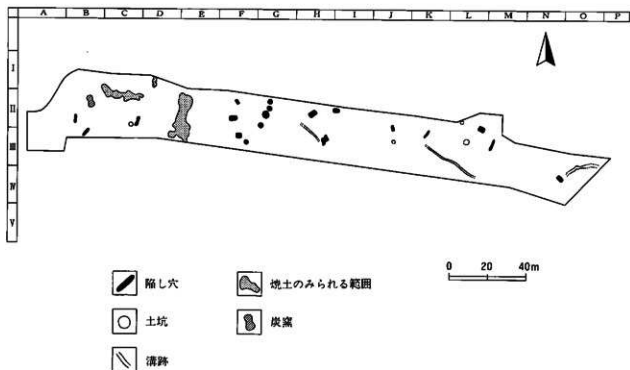
作業場を伴うもので、現代の炭窯である。規模は、全長7.8m、最大幅3.6m、深さ90cmである。

〈出土遺物〉

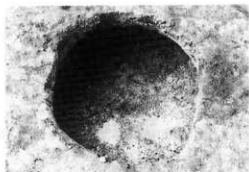
出土遺物の主なものは縄文時代晩期の土器である。その他に前期と中期および弥生土器が少量出土している。石器は少量の石鏃、磨石と剝片である。

3. まとめ

本遺跡は狩り場跡であった。また、縄文時代から弥生時代にかけて人々がこの地を活動の場としていたことが明かになった。



法量野Ⅰ遺跡 遺構配置図



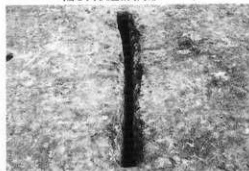
土坑



陥し穴状遺構(円形タイプ)



陥し穴状遺構(長方形タイプ)



陥し穴状遺構(溝状タイプ)



1-3 縄文土器
4 磨石
5 石鏡

法量野 I 遺跡 検出遺構・出土遺物

(9) 中^{なか}屋^{やしき}敷^{しき}遺跡

所在地 北上市和賀町煤孫4地割59ほか

委託者 日本道路公団仙台建設局

発掘調査期間 平成3年6月1日～10月16日

調査対象面積 6,080㎡

発掘調査面積 6,080㎡

遺跡番号・略号 ME63-2301・NY-91

調査担当者 小田野哲憲・村上修

協力機関 北上市教育委員会



1 : 50,000 川尻・北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

中歴敷遺跡は、東日本旅客鉄道北上線登川目駅の南南東約3.1km付近に位置する。遺跡は奥羽山脈から東流する和賀川右岸の河岸段丘上にあり、西側は町道大宮森線と沢に区切られ、東側は小さな沢に区切られ法量野遺跡に続いている。調査区域はこの台地の先端部近くにあたり、標高は124～128m、和賀川との比高は約37mである。調査区の現況は山林である。

2. 調査の概要

検出された遺構はフラスコ形ピット19基、土壇16基、陥穴状遺構5基、焼土1基、溝跡5条である。遺構の占地は、調査区の西端部と段丘の外縁付近にフラスコ形ピットや土壇が集中し、中央部には陥し穴状遺構と性格不明の土壇が散在する。東側では遺物は少量出土したが、遺構は全く検出されなかった。

〈フラスコ形ピット〉

19基は台地の外縁部に沿うように2～3重のゆるやかな弧を描くように検出された。規模は開口部径130～220cm、底径130～150cm、深さ70～130cmであり、極端に底面の広がる例は少ない。埋土は自然堆積の様相を示している例が多いが、2基は人為的な埋戻しがなされている。埋土中からの明瞭な植物遺存体は検出されなかった。遺物は埋土上・中層に縄文、弥生土器片の混在例があるが、2基の底面からは弥生時代初頭の変形土器が、1基の埋土中層から同時期の高坏が出土している。ほかに床面中央に数個の自然礫を配しているものが1基ある。19基は形態、規模とも共通することが多く、出土遺物から判断して弥生時代初頭に属するものと考えられる。総じて、和賀川流域の縄文時代のものと比較すると小規模である。

〈土壇〉

西側に位置する13基の平面形はいずれも円形もしくは楕円形である。規模は開口部70～120cm、深さ20～50cmほどで、断面は筒形あるいは皿形状である。土器が出土した土壇はないが、底面に礫を配する例、埋土中に切片を含む例が数基ある。フラスコ形ピットと載合うもの1基のみある。時期決定する遺物の出土はないが、フラスコ群と同一面に在ること、周辺からは弥生土器が多いこと、遺構の掘込面が縄文土器包含層の上であること、などから判断するとフラスコ形ピットと同様、弥生時代に属する遺構と考えられるが、性格を決定づける資料は乏しい。調査区中央寄りに大型の土壇2基検出されたが、プランは不規則で遺物もなく、時期、性格は不明である。

〈陥し穴状遺構〉

5基のうち2基が溝状、1基が円形、2基が楕円形で、配置にまとまりはなく散在している。

西側にある溝状の1基を除いて、いずれも調査区の北側と南側で検出されており、それぞれ調査区外に遺構が広がる可能性は高い。5基とも埋土中からの遺物の出土は全く無かったが、東側では周辺から数点の縄文土器片が出土している。時期を決定する資料に乏しいが、周辺の遺跡の数例から判断すると、縄文時代に含まれる可能性が高い。

〈焼土〉

フラスコ形ピット群の間に径60cm、層高5～10cmの1基を検出。フラスコ形ピットの掘込面と同一層での検出であり、同時期のもと考えられる。遺物はない。

〈溝〉

いずれも現地表面から掘込まれており、近現代に属する。図省略。

〈出土遺物〉

90%以上の遺物が西側に集中しており、中央部および東側では縄文時代中・後期の土器、石器片が少量出土しているのみである。西側の遺物のほとんどは弥生時代初頭の土器であり、器種は壺、高坏、壺、鉢で蓋は見当らない。完形品はフラスコ形ピットから出土したのみである。包含層から遠賀川土器の壺とおもわれる破片、および萩瓦痕付きと推定される山形口縁の壺の破片が出土している。他には縄文時代晩期、胎土に繊維を含む早～前期の土器片がそれぞれ10数点出土している。石器は剥片まで含めて約200点出土している。石ペラ、擦石が主体を占め、石鏃、石匙、石斧類は少ない。

3. まとめ

中屋敷遺跡の調査対象区は弥生時代初頭のフラスコ形ピット群、土壌群が主体を占めた。これらの遺構には当然、集落の存在が考えられる。東側には存在せず、北側は和賀川に向かって傾斜しており、立地条件からすると南側に可能性が求められる。県内では弥生時代のフラスコ形ピットの検出例は少なく、かつ土器から判断すると一時期に集中している遺構でもあり、該期の遺構の在り方を検討する上で貴重な資料が得られた。また、遠賀川系土器、萩瓦痕と思われる土器の存在は、和賀川・北上川流域の弥生文化を知る上で、併せて貴重な資料となろう。



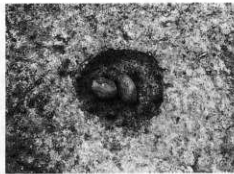
フラスコビット・土壌群



弥生時代のフラスコビットと壺形土器



フラスコビットの高坏と擦石

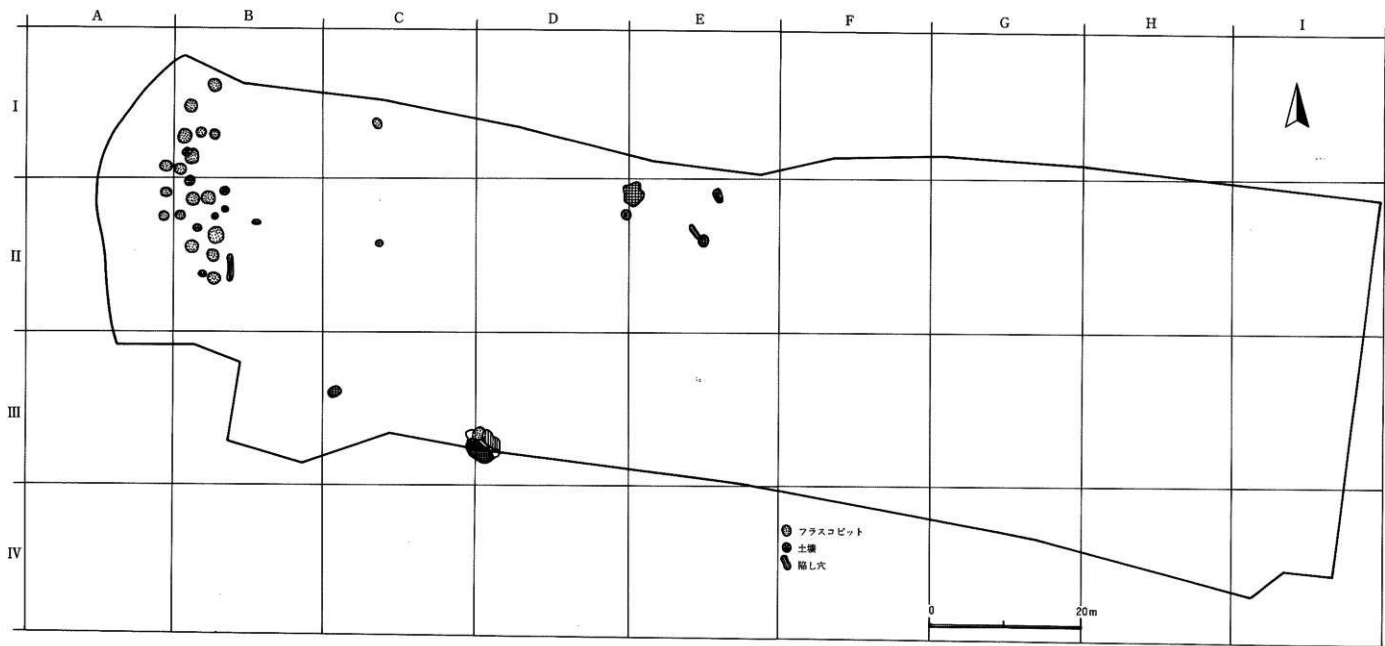


礫を伴う弥生時代の土坑



- 1～3 フラスコビット埋土
出土の高坏と擦石
4・5 フラスコビット底面
出土の壺形土器

中屋敷遺跡 検出遺構・出土遺物



中屋敷遺跡遺構配置図

(10) はちまんの 八幡野 II 遺跡

所在地 北上市和賀町字山口40地割
委託者 日本道路公団仙台建設局
発掘調査期間 平成3年4月16日～6月29日
調査対象面積 11,940㎡
発掘調査面積 11,940㎡
遺跡番号・略号 ME63-0181・HMII-91
調査担当者 工藤利幸・安藤邦彦
協力機関 北上市教育委員会



1 : 50,000 川原・北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

八幡野II遺跡は、東日本旅客鉄道北上線横川目駅の南々東2.2km付近に位置し、奥羽脊梁山脈に源を発し北上市和賀町地域をほぼ東する和賀川の右岸に発達した更新世低位段丘上に立地している。遺跡の標高は127～132mであり、和賀川との比高は27～32mである。

遺跡の西側には田中館跡が、東側には八幡館跡や月館跡が隣接している。調査区域の現況は、山林であるが、山林の一部は昭和40年代前半まで畑地として利用されている。

2. 調査の概要

調査は、平成元年度からの継続調査である。本年度の調査区域は東西300m、南北60mほどの範囲にあり、全体的には田中館跡寄りの西側に位置している。調査区域の土層堆積状態は、かつての土地利用状況や段丘構成層の起伏との関係から地点によって若干異なるが、段丘構成層の上位は大別3層に区分される。これらの堆積物はどれも黒色～暗褐色の腐植土層である。また、倒木跡や住居跡などの凹地部では完新世の降下火山灰も認められる。

発見された遺構は、平安時代の竪穴住居跡5棟、平安時代以降の土坑9基、近代の工房跡1基であるが、土坑のうち6基は住居跡に伴うものである。

〈竪穴住居跡〉

5棟の住居跡は、どれも平面形が方形を基調としたものであるが、1棟は倒木根と他住居跡の重複により一部が不明である。これら住居跡のうち2棟では埋土の一部として灰白色～浅黄色の火山灰が堆積している。

平面形・規模は、正方形～隅丸方形のものが3棟で、その規模は2.4×2.6mから4.2×4.2m、カマドの位置は南辺から東辺に造りかえたもの1棟、東辺のもの2棟である。長方形のものは2棟で、長軸方向が概ね東西にあるものと南北にあるものとであり、前者は長軸長4.4m、短軸長3.2mでカマド南東隅に設けられている。後者は一部不明であるが長軸長4.6m、短軸長3.3m、カマドの位置は東辺の南側に設けられている。何れの住居跡でも柱穴は確認されず、カマド周辺に貯蔵穴と考えられる小型の土坑をもっている。出土遺物は、ロクロ使用で内外面あるいは内面だけを黒色処理したものや非黒色処理の土師器坏、ロクロ使用および不使用の土師器・須恵器の壺・甕などである。

〈土 坑〉

土坑は9基を確認・調査しているが、住居跡の土坑は3基である。このうち1基は方形(2.1×2.0m)で床面の一部に火山灰が堆積しており、他の2基は楕円形および小判形で土師器片が出土しているが、火山灰の堆積は認められない。

〈工房跡〉

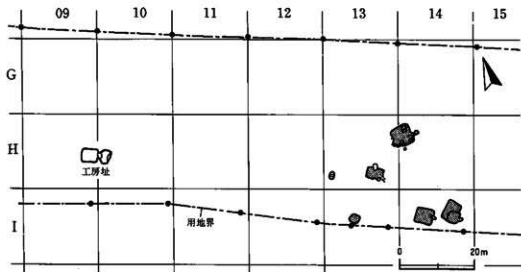
工房跡は、主体部の平面は4.6×3.3mの長方形で、前庭部平面は3.3×3.2mの不整形台形をなし、前庭部から階段状の構造となって主体部へ入る。何れも竪穴式で前庭部の深さ70～80cm、主体部の深さ110cm前後である。主体部には壁に沿って14本の柱穴が規則的に配置され、ほぼ中央に小形の炉をもっている。出土遺物としては、摺鉢・洋丸釘・寛永通寶などがある。

〈出土遺物〉

遺構内、遺構外からの出土遺物総量はコンテナで5箱ほどである。種類としては、縄文時代前・後期の土器片や石器、平安時代の土師器、須恵器・砥石、そして近代の陶器破片、鉄製品である。土師器・須恵器の大部分は住居跡からの出土である。

3. まとめ

3カ年の調査により、平安時代の住居跡9棟、縄文時代の陥し穴状遺構21基、平安時代の土坑等27基、近代の工房跡2棟を確認・調査した。これらのことから八幡野II遺跡は縄文時代の狩場として、また平安時代の散村的集落として利用されていたことが判明した。更に、地形や土壌の変質、そして工房跡の存在などから不連続ではあるが近代・現代まで何らかの活動の場として利用されていたことも明らかである。



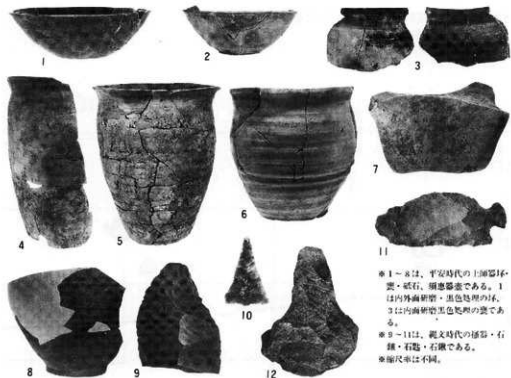
八幡野II遺跡 遺構配置図



平安時代の竪穴式住居跡と土坑



近代の工房跡



※1～8は、平安時代の土師器・灰・磁石、須恵器である。1は内外面刷磨・黒色地肌の子。3は内面刷磨・黒色地肌の子である。
 ※9～11は、戦国時代の磁器・石類・石胎・石胎である。
 ※縮尺率は不同。

八幡野II遺跡 遺構・遺物

(11) ^{おお} ^{わた} ^り 大渡 II 遺跡

所在地 和賀郡湯田町第57地割 5-1、126~140、42-12・16ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局
発掘調査期間 平成3年5月10日~10月30日
調査対象面積 59,300㎡
発掘調査面積 20,000㎡
遺跡番号・略号 MD58-2032・OWII-91
調査担当者 中川重紀・千葉 悟
協力機関 湯田町教育委員会



1 : 50,000 横手・川尻

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

遺跡は湯田町役場の西2.8km、東日本旅客鉄道北上線湯田原駅の北東1.6kmに位置する。本遺跡の東側20mを北流する和賀川支流の鬼ヶ瀬川によって形成された洪積段丘上に立地し、標高263.20m前後である。鬼ヶ瀬川とは約10mの比高がある。遺跡の現状は水田、畑地、牧草地である。

2. 調査の概要

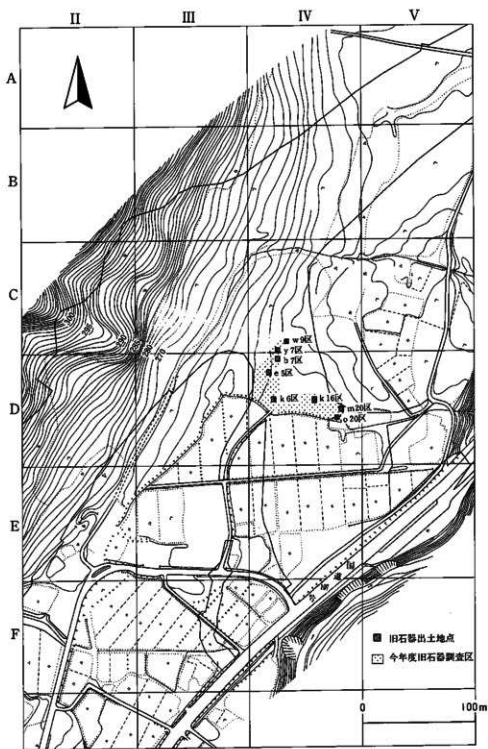
今回の調査では、15,000㎡の調査対象区の内、約3,000㎡の畑地部分から約1,235点の旧石器時代および縄文時代の土器片や石器が出土している。そのうち旧石器時代の遺物は約753点の石器や剥片等で耕作土(I層)やII a・b層にかけて発見された。出土遺物の中でI層出土のものは現位置を保っておらず、II層出土のものは木根等によって多少移動しているものもあると考えられるが、概ね原位置を保っていると考えられる。II層出土の石器は現在の所、1ないし2点の出土やチップだけの出土地点も含めて、一地区を4m四方の範囲で見ると9カ所で出土している。これらの遺物は約20cmのレベル差をもって出土し、9カ所の各石器群の中で、II a層出土のものと、II b層出土のものに分けられる。

〈出土遺物〉

出土遺物には、I層中から縄文時代前期・後期・晩期の土器片と石器類が少量と、I層からII層中にかけて旧石器時代の石器類が出土している。ここでは旧石器時代の遺物について述べる。石器種としては荒屋形彫器(1)・ナイフ形石器(1)・ナイフと思われるもの(9)、彫刻刀形石器(4)・エンドスクレーパー(3)・石核(2)・剥片(146)・碎片(587)である。これらの石器は、縦長剥片を素材としたもので、基部の両側辺と先端部の一側辺に調整が見られるナイフ形石器、縦長剥片を折り取り、折断面を打面とした調整が見られる彫刻刀形石器、急角度の刃部をもつエンドスクレーパーなどである。石材は未同定であるが頁岩と黒曜石であり、頁岩が圧倒的に多い。これらの素材となった剥片生産技術について、今後検討を加えるものであるが、現段階で言えることは連続的な縦長剥片剥離技術によるものである。

3. まとめ

今回は大渡II遺跡の一部分の調査であり、しかも旧石器が出土すると思われる畑地区の約半分を精査したに過ぎず、全体的なことは今後の調査で明らかにされるものと思われる。今回、得られた資料は後期旧石器時代後半期のものであり、出土層位・遺物から数時期に分けられるものと考えられる。



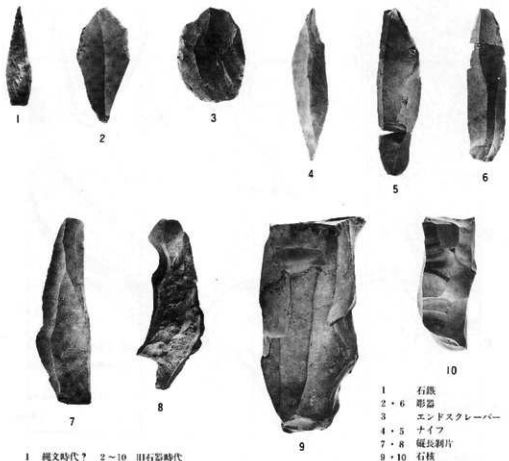
大渡Ⅱ遺跡 周辺地形・遺物出土地点



旧石器出土状況



旧石器出土状況



1 縄文時代? 2~10 旧石器時代

- 1 石鉄
- 2・6 形器
- 3 エンドスクレーパー
- 4・5 ナイフ
- 7・8 縦長剥片
- 9・10 石核

大渡Ⅱ遺跡 遺物出土状況・出土遺物

(12) 越^{えっ}中^{ちゅう}畑^{はた} V 遺跡

所在地 和賀郡湯田町越中畑64-133-16・28・37

委託者 日本道路公団仙台建設局

調査期間 平成3年8月21日～10月16日

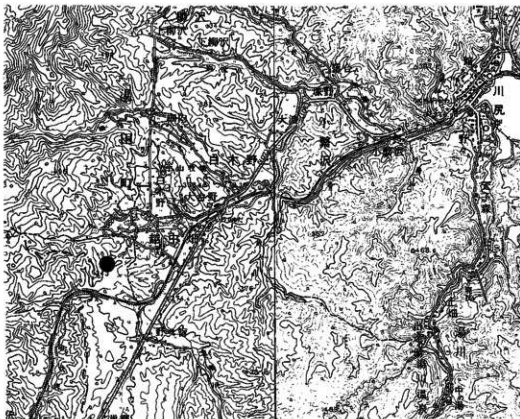
調査対象面積 2,000㎡

発掘調査面積 2,000㎡

遺跡番号・略号 MD67-2384・ECV-91

調査担当者 遠藤修・引屋敦学

協力機関 湯田町教育委員会



1 : 50,000 川尻

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

越中畑V遺跡は湯田町役場の西約6.0km、東日本旅客鉄道北上線湯田高原駅の西約1.8kmに位置している。遺跡は奥羽山脈とその支脈に囲まれた沢内盆地の中央付近にあり、和賀川支流の鬼ヶ瀬川によって形成された洪積段丘に立地する。標高約300mである。本遺跡の東側を北流する鬼ヶ瀬川とは約50mの比高がある。遺跡の現況は山林である。

2. 遺跡の概要

検出された遺構は、時期不明の焼土遺構2基である。

〈焼土〉

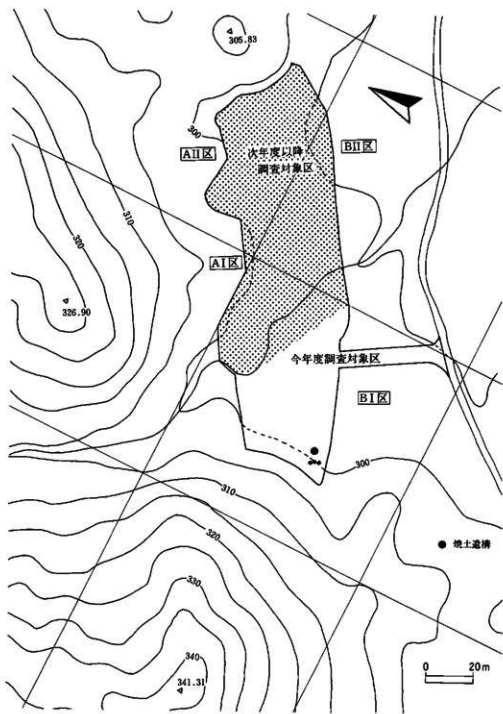
遺構は調査区西側の傾斜面で、表土を除去した段階で検出された。焼土遺構の平面形は不整形であり、規模は、径1～6m、厚さ10cmである。遺構からの出土遺物は、石器数点である。

〈出土遺物〉

遺物は縄文時代の前期～中期の土器少量と石鏃、スクレイパー等の石器である。遺物の出土は、調査区西北隅の沢に傾斜している面に集中している。

3. まとめ

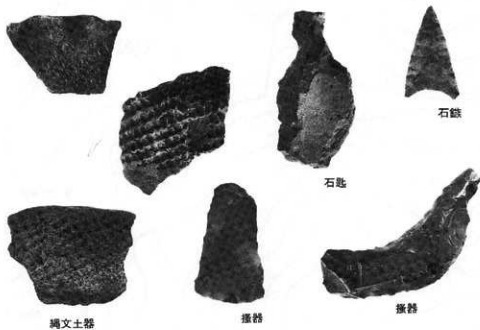
今回の調査で検出された焼土遺構からは、時期を特定することができなかった。しかし、沢に傾斜する面から出土した遺物から縄文時代前～中期の遺構は、調査区北西側の調査区域外に存在するものと推定される。



越中畑V遺跡 遺構配置図



調査区全景(南から)



石鏃

石匙

搔器

縄文土器

搔器

越中畑Ⅴ遺跡 調査区・出土遺物

II. 建設省・農水省関係

(1) 柳之御所跡

所在地 岩手県西磐井郡平泉町字柳之御所130-5ほか
委託者 建設省東北地方建設局 岩手工事事務所
発掘調査期間 平成3年4月10日～12月5日
調査対象面積 4,000m²
発掘調査面積 3,500m²
遺跡番号・略号 NE76-0088・YG91-31
調査担当者 三浦謙一・松本建速・阿部勝則・斎藤邦雄
協力機関 平泉町教育委員会



1 : 50,000 一関・水沢

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

遺跡は平泉町の市街地に近く、東日本旅客鉄道東北本線平泉駅の北約600mにその南端がある。北上川の西岸に接した低位河岸段丘に立地し、北は高館と呼ばれる丘陵、西は伽羅之御所跡や無量光院跡との境になる低地である猫間ガ淵、南と東は北上川とその沖積低地に囲まれている。北西から南東に細長く、最大長・最大幅はそれぞれ725m・212m、残存面積は約10万㎡である。調査区の標高は22～27m、北上川の現河床との比高は10～15m、沖積低地との比高は2～7mである。現状の土地利用は宅地と水田・畑地で、今次の調査区は宅地であったところが大部分である。

2. 調査の概要

掘立柱建物跡・井戸跡・堀跡・溝跡・園池跡・土壇など、12世紀に属する遺構が検出され、それらに伴する土器や木製品などの多くの遺物が出土している。

〈建物跡〉

9棟の掘立柱建物は、軸方向から5群に分類できる。N-90°-EWの31SB3と31SB7・31SB9、N-45°-WからN-50°-Wの31SB1と31SB2、N-68°-W前後の31SB5と31SB6、N-85°-Eの31SB4、ほぼN-Sに軸をもつ31SB8であり、おおむね東西棟である。占地からは園池南部の2棟と園池北西部から北部に分布する7棟の2群に分けることができる。

規模は、桁行4間・梁行1間の31SB4（桁行8.0×梁行2.2m、以下同じ）と31SB5（9.5×4.1m）、桁行4間・梁行2間の31SB1（5.4×4.3m）と31SB6（10.1×6.2m）である。桁行1間・梁行1間の31SB2（2.4×2.0m）は削剝を受けて一部が残存するだけである。31SB1は削剝を受けているために一部の柱穴を欠き、桁行2間・梁行2間の31SB3（4.6×4.4m）も東側を削剝されていることが考えられる。

建物同士の重複は、31SB4と31SB5に見られ、新旧関係は不明である。他の遺構との重複は、31SB5が井戸31SE4と井戸31SE5を切っているが、井戸31SE3には切られている。

31SB5と31SE6は東側柱筋をおおむね揃えており、関連する建物であると考えられるが、31SB5は柱痕跡が明瞭であるのに対し、31SB6は柱の抜取り痕を残している。なお、2棟と同じ軸方向になる井戸は31ES2である。また、12世紀以降と推定できる柱穴が園池の南から南西にかけての区域に多数検出されている。

〈井戸跡・井戸状遺構〉

現段階では井戸として仮分類している遺構が8基、それらと形態は似るものの、深度や埋土・出土遺物の点から機能が異なることも考えられるために便宜的に井戸状遺構としている遺構3基が検出された。

井戸はすべて素掘りの状態でみつきり、井桁や井戸側は遺物としても残っていない。規模や深度はバラツキがあるが、開口部下位から低面までの平面形が隅丸方形であることが特徴の一つである。埋土上部は自然堆積のものと人為的な堆積の層相を示すものがあり、多くの遺物がその下位に投棄されている例がある。かわらけを大量に出土するのは31SE3と31SE7の2基で、上部に破片を主体にした層があり、その下位からは完形品が多く出土する。逆に、かわらけの非常に少ないのは31SE1と31SE4・31SE8・31SE11である。かわらけ以外では、火を受けた多量の壁土が31SE6と31SE7、原石を含む琥珀が31SE3と31SE6、破風板や屋根材を含む建築部材多数や松鶴鏡は31SE2、一括の糸巻の杵木や横木は31SE8から出土した。

建物との重複では、31SE4と31SE5が31SB5に切られており、31SE3が31SB5を切っている。また、31SE2は軸方向が31SB5と31SB6と同じであり、位置関係からも、両者が関連することが考えられる。

〈園池跡〉

第23次で、削削されて低くなった水田部分の北西隅に平面形の一部を検出し、第28次から今次に継続調査した遺構(23SG1)である。

検出段階の平面形は馬蹄形状で、最大長は南北46m、最大幅は東西36m、面積は680㎡である。しかし、その形は3期の複合の結果のものである。第28次調査では新旧3期の変遷を推定した。古期から新期へI期・II期・III期とし、III期を中心に、II期の一部を調査した。I期は第23次調査のトレンチで確認されたもので、II期に大幅に作り替えられている。板材を側板とする排水溝を西側に伴う。II期・III期は“流れ”を意匠とする曲水の範疇で捉えられるものであり、II期には西へ大きく蛇行しながら流れ、南端は猫間が淵へ向かっている。III期はその一部を塞いで滞水性の園池にしていると推定した。第28次調査、II期あるいはIII期に伴う排水溝と推定していた溝跡31SD2は同時存在が考えられる溝31SD1とともに園池との直接の関連性は見いだせなかった。

園池の北側には導水溝がある。大部分は第28次で調査し、今次は北端を調査した。北西から南東へ短く伸びたあと、大きく屈曲し、北々東から南々西へ緩やかで小さな蛇行を繰り返しながら園池の北池汀線に重なる。全長53m、最大幅・最大深度がそれぞれ0.7m・0.4m、北端と南端の比高差1.4mである。礫がまったく使われていない素掘りの溝で、両端を除いては、底面に

堆積した層厚3cm±の砂層の上を地山起源の粘土が覆い、かわらけの破片を含む灰黄褐色系のシルトがその上位に堆積している。粘土層が人為堆積物であると推定し、2時期にわたって機能していると考えたが、粘土層は自然堆積物の可能性があり、必ずしもその推定が正しいとはいえないことが判明した。

〈堀 跡〉

31SA2が園池の南に検出され、東辺と南辺の2辺が確認できる。軸方向は北から44°~55°東西に偏っていて、東辺と南辺が作る角度は99°である。東西長23m、南北長12.4mで、園池側を囲むようなあり方になる。残存状況からは上部を大幅に削剥されていることが推定できる。布掘りの痕跡が一部に認められるが、ほかは隣接して連続する柱穴が見られ、柱穴は直径・深度とも小さい。

〈柱 列 跡〉

5列が検出された。31SA1(11.4m)と31SA5(9.0m)が4間で、軸方向はそれぞれがN-49°-WとN-3°-Wである。31SA3(4.6m)と31SA4(4.6m)は2間で、軸方向がN-45°-Wになり、2列は平行している。31SA6は東西4間である。なお31SA1は掘立柱建物31SB1の桁方行と平行している。

〈土 壇〉

88基が検出された。開口部の形状では、円形と方形に分類でき、前者が70基、後者が18基である。前者の断面形態には円筒形のものとその他のものがある。調査区全域に散在しているが、園池の南や31SB5周辺にやや分布密度が濃い。大部分は12世紀に属する。出土遺物は、多量のかわらけ片を含むものやウリ科の種子を出土するものが少数あり、31SK80からは2,000本を超える数のチュウ木状木製品が出土した。

〈溝 跡〉

西あるいは南西方向へ下がる緩斜面を調査区に含むため、58条という多くの溝・溝状遺構が検出された。12世紀に確実に属すると推定される溝で、形態的にも人工のものとして推定できる31SD1、それとの同時存在が考えられる31SD2の2条などのほかは、かわらけ片をはじめとする遺物を大量に出土するものがあるものの、形態や埋土からは必ずしも12世紀の遺構とは言えないものが多く、現代の溝も多数含まれている。

31SD1は園池東側池尻と推定される付近のやや南から始まり、大きな弧を描きながら南下した後、直線的に伸びて調査区域境へ達している。やはり園池の南側から弧を描いて南東へ伸びた31SD2と途中で合流している。

〈その他の遺構〉

大型の柱穴5個が調査区の北西端の部分に検出された。31S X 1は北々西—南々東に並ぶ3個、31S X 2は同方向で並ぶ2個によって構成される。2基は直接の切り合いがあり、新期は31S X 1である。主軸方向はともにN—25°—Eである。掘り方は柱を据えるための細長い傾斜を東側に作り出している。31S X 1の3個のうち、2個が明瞭な柱痕跡を残して礎板を底部に伴っているのに対し、1個は柱の抜き取りの痕跡を示している。なお、この遺構の南には整地層の広がりが見られ、2基はその整地層を切って構築されている。

〈出土遺物〉

先の2次の調査同様、多種多様な遺物が数多く出土している。今年度出土した遺物を中心に、これまでの分も一部合わせて記載する。これまでの3次の出土品リストに新たに加わったものは、かわらけを用いた漆液容器や陶碗・転用碗・壁土・破風板・屋根板・格子・円鏡・琥珀原石などである。

土器

かわらけは数量で他の遺物を圧倒する。概算で10トンを超える量がこれまでに出土し、その60%近くは堀からの出土である。

今次の調査でもかわらけは調査区全域から出土し、概算で1.5トンほどの量になる。完形品は井戸と置池西側池底面に集中し、他には井戸状遺構や土坑の一部から出土する。

国産陶器

国産陶器は第21次・第23次の2次の調査に比べて出土量が少ないことが第28次調査において指摘できたが、今次の調査はそれよりもさらに少なく、復元できる個体はない。渥美と常滑が主体を占めるほか、在地産の須恵器系陶器がある。須恵器系陶器は複数の産地が推定できるものの、窯跡が不明である。渥美には唐草文や草花文ほかの刻画文をもつ壺の破片があり、それらは「11世紀の藤原時代から12世紀の院政期にかけての貴族・富裕階層に享受されたもの」¹¹⁾とされているものである。紅葉文をもつ破片は大アラコ6号窯跡のものとして推定できる。

中国陶磁器

中国陶磁器は遺構内外から出土し、過去3次の調査では、遺構内292点、遺構外44点、合計336点がある。ほとんどが破片で、器形の全体を知ることができるものは碗と皿に数点があるにすぎない。出土地点・遺構別では堀からの出土がもっとも多く、次いで井戸ほかの遺構・遺構外の順になる。白磁・青白磁の322点に対し青磁は14点と少なく、その比は23：1になる。白磁・青白磁の器種には四耳壺・碗・皿・水注・合子・梅瓶、青磁は碗がある。そのほかには黄釉褐彩四耳壺が堀から、緑釉陶器や白地鉄絵の壺と盤の破片が第28次調査区を中心に出土している。今次の出土点数は過去3次の調査に比べると少ない。

瓦

絶対量は少ないが、今次の調査区では、31SD1から平泉町教委第13次調査区にかけての範囲に分布密度が濃くみられる。大量の瓦が廃棄された井戸1基が第13次調査で検出されていることと関連するものであろう。ただし、建物との関連は不明である。

ほとんどが破片であり、軒丸瓦には複弁八葉蓮華文・三巴文・剣巴文・宝相華文、軒平瓦には剣巴文・剣頭文の文様がある。軒平瓦は平安京周辺で作られた瓦にみられる折り曲げ技法で製作されている。

木製品類

これまでも、大量の木製品類が堀と井戸を中心に名種土坑から出土し、1. 工具、2. 紡織具、3. 漁猟具、4. 武器、5. 服飾具、6. 容器、7. 籠篋物、8. 食事具、9. 遊戯具、10. 祭祀具・仏具、11. 文房具、12. 雑具、13. 部材、14. 用途不明品・その他、のように分類してきた。

今回は井戸と土坑の一部から出土したが、器種・数量とも第28次調査区の井戸と比較すると少ない。ただし、建築部材が井戸に一括廃棄されている点は新たな事例になる。漆器碗は第28次調査と同様少数である。

その他

松鶴鏡や壁土・琥珀原石・陶硯・転用硯などがある。

3. まとめ

(1)平泉藤原氏の初代清衡は11世紀末から12世紀初めにかけての時期に平泉に進出し、本拠とした。それ以降、四代泰衡が源頼朝によって滅ぼされる文治5年(1189)までの90年から100年を前後する時間が藤原氏の平泉における時代である。柳之御所跡は初代清衡・二代基衡の居館跡と言い伝えられるとともに、『吾妻鏡』に現れる平泉館に相当し、政庁として機能していたことが推定される遺跡である。

(2)今次の調査区は、南端は塀23SA1の外側と推定される区域になるものの、大部分は塀23SA1内部と推定される区域である。ただし、23SA1の南辺は、第23次で調査した西が削剝を受けているなどの理由によって把握できていないことは今度も変わっていない。仮に、北辺が検出できない場合は、中心部の遺構の位置づけに大幅な修正を加える必要が生じるが、北辺周辺と推定している区域の調査は今後に予定されている。

県道および第23次調査区に接した南端の部分は削剝を受けて遺構の残存状況が良くない。しかし、そのことを割り引いても、今次の調査区に遺構・遺物が少ないのは園池と一体になると

推定される中心建物群が導水溝の西へ分布域を広げないことと関連し、堀内部における“場の使い分け”を反映するものである。ただし、北西部では、第28次調査で検出されたものと同一群を形成する井戸7基が西へ分布域を広げ、そのうちの1基は建物と関連をもっている。また場を使い分けているとしても、その時間的な前後関係が問題である。今次の建物群が相互にどのような関係にあるのかということ、および園池と一体のものとして推定され、今次の調査で中心建物になる可能性がより明らかになった第28次調査区の建物群との関係の検討が課題である。

(3)園池は、西へ伸びるⅡ期の遺構を掘り上げるとともにⅢ期との関係を追求した。Ⅱ期と考えた遺構の埋土は自然堆積層であり、Ⅲ期に一部を塞ぐように改修を加えたと仮定すると、少なくともその時点では一部分が開いた状態で残って後に埋没したということになり、3基とする説明が難しくなる。

(4)井戸に分類した8基のうち、園池の南に位置する1基を除いた7基は園池の西から北西にかけての範囲に存在する。主に、開口部下位から隅丸方形になって底部に達する形態は第28次調査で検出された井戸群14基と一群を構成するものとみることができる。大量で、しかも多様な遺物が廃棄されていることも第28次で検出された井戸と共通する点である。

(5)31S X 1と31S X 2は毛越寺の第7次の発掘調査²⁴⁾で検山された5基の柱穴に形態が類似するが、個別の規模は毛越寺例が圧倒的に大きい。毛越寺例は主軸方向にバラツキがあり、本遺跡のように規則性を持つものではない。報告書は「5本の柱根は宝樹」や「落慶法要における幢、あるいは相輪塔や笠塔婆の一種」と思われるとしている。2基の遺構は無量光院跡に面した位置にあり、西が町道であること、さらにその西には南北に伸びる堀が存在することからこれ以上は調査できないが、現状で完結する遺構と推定でき、掘立柱建物の可能性はないものとする。また部分的に整地層を伴っている。以上のような点から、儀式に関連する遺構ではないかと推定した。

(6)今年度も質・量とも豊富な遺物が出土し、柳之御所跡の研究がさらに多方面から行われることを可能にしている。

井戸31S E 2からは破風板や屋根板などの多くの建築部材が出土し、31S E 6と31S E 7の2基の井戸からは白壁土塗り²⁵⁾を含む多くの壁土や建具と推定される格子が見つかっている。柳之御所跡に実際に建っていた建物の構造を推定する手がかりになるであろう。

原石を含む琥珀が井戸31S E 10から出土したことは、第28次調査で、「人々給綱日記」の表題を持つ文字史料と裁縫尺・糸巻が共伴していたことや溶解した金が付着した際、金が内面に付着した国産陶器のこね鉢の破片・自然銅・フィゴの羽口・氈滓が出土していることとあわせて、中心建物周辺で繰り広げられた生産活動を推定させる資料になる。

(7)遺跡の年代

今次の調査では12世紀第4四半期に編年できる松鶴鏡が31SE2のほぼ底面から出土した⁸⁴⁾。年輪年代測定からは複数の試料から結果が得られ、第28次調査区の井戸28SE2から出土した墨画と墨書折敷は1101年と1141年、井戸28SEから出土した2点の墨書折敷は1138年と1158年という年代を示すことが明らかになった⁸⁵⁾。1141年と1158年の試料は刃材部を残す試料で、伐採年に比較的近いものである。

一方、国産陶器や中国陶磁器・瓦からは12世紀中葉以降、特に第3四半期の遺物が主体を占めていることが推定できたものの、11世紀末から12世紀の前半代と位置づけられる白磁四耳壺や白磁碗が少なからず存在していることと遺物の上からは13世紀を空白期と推定できることから、11世紀末から12世紀末の時間幅に機能していた遺跡であるという年代観をこれまでとはとらえずもっていた。

かわらけは、一部に搬入品がある可能性は想定できるものの、基本は在地生産にあり、かつ大量に出土する。京都系土師器皿の東国における出現が「12世紀後半から13世紀」⁸⁶⁾とされるように、手づくねのかわらけ(Ⅱ類)は京都系土師器皿との比較が可能であり、おおむね12世紀中葉から末の年代観を与えることができる⁸⁷⁾。Ⅱ類とほぼ同量出土するクロク使用のかわらけ(Ⅰ類)はⅡ類の影響の下に形態を変化させている。現段階では12世紀前半代のかわらけの抽出が困難である。

以上のように、かわらけ・国産陶器・中国陶磁器・瓦・和鏡・年輪年代測定法のいずれもが12世紀後半代、そのなかでも第3四半期に遺跡のピークがあることを示している。

(8)遺跡の位置づけ

12世紀の平泉藤原氏に関連する居館跡であることが昨年度までの調査で明らかになっている。北上川に近い低位段丘の縁辺部に居館を構えていること、居住域になる主要面よりも3～5m低い面に幅約10mの堀を巡らせていること、掘立柱建物を中心に、井戸や各種の土塀・溝・塀・園池などさまざまな施設を居住域に構築することが構造上の特徴である。堀に架かる橋が南と東に検出され、実際の出入口を想定できるが、堀との関連で問題になる土塁は痕跡としても残っていない。

しかしながら、ここで注意したいのは、構造上は通常の居館と類似する点があるもの、中樞部と推定される第28次と今次の調査区域に限って言えば、きわめて非日常性の強い空間であった可能性が推定できることである。それは、仮設建物をも含む可能性がある掘立柱建物の建て替えや重複、柱に見られる抜き取りの痕跡、井戸として分類した遺構、大量に出土するかわらけなどに特に強く反映されているものと考えられる。

明らかになった次のようないくつかの点、第1に、堀の内と外という区画があり、その内外で遺構や遺物のあり方が大きく異なること⁸⁾、第2に、堀内部の中心部は柵で区画され、園池を伴う中心建物がその内部に存在する可能性が強いこと、第3に、堀に区画された範囲の面積が約6万1千㎡と広大であり、推定される12世紀の「都市平泉」の都市域面積に対する占有率が高いこと、第4に、質量とも豊富な遺物群の存在、といったことは居館主を藤原氏の中でも当主クラスに限定して考える必要があることを示している。上述のように、中樞部の遺構が機能していた中心年代が12世紀中葉以降ということがいちおう推定できたが、その年代は二代基衡の晩年から三代秀衡・四代泰衡の時代におおよそ重なり合うものであり、言い伝えられている清衡・基衡の居館説の時代に相当する12世紀前半代の遺構や遺物の存在あるいは実態は現在のところ不明と言ってよい。とくに秀衡の時代ということになれば、『吾妻鏡』文治5年7月17日条の「一、館事⁹⁾」の記事との関連が目される。その記載のように、伽羅御所と平泉館が併存していて、しかも伽羅御所が擬定地になっている現在の場所に存在したと仮定すれば、柳之御所跡が平泉館に相当する可能性は大きくなる。今年行われた伽羅之御所跡第5次調査で出土した「山水飛雁鏡」やかわらけの年代観は12世紀中葉以降に同遺跡が機能していたことを示すもので、本遺跡と時間的に重なり合うことが指摘できる。ただし、伽羅之御所跡の内容や性格はその一端が明らかになっているにすぎず、詳細は今後の発掘調査を待たなければならないであろう。

注)

- 1) 橋岡彰一(1988):中世陶器にみる刻文の系譜とその展開、『日本陶磁絵巻—やきものに刻まれた絵画』、184—191、愛知県陶磁資料館・五島美術館。
- 2) 平泉町教育委員会(1986):『毛越寺庭園発掘調査報告書—第7次調査—』、岩手県平泉町文化財調査報告書第7集。
- 3) 岩手県立博物館による分析の結果、漆喰ではなく白土が塗られていることが判明。
- 4) 杉山 洋氏(奈良国立文化財研究所)のご教示による。
- 5) 光谷拓実氏(奈良国立文化財研究所)ご教示による。
- 6) 百瀬正恒・橋本久和(1988):中世平安京の土器様相と各地への展開、考古学ジャーナル、№299、15—25。
- 7) 宇野隆夫氏(富山大学)にご教示を受けている。
- 8) 平泉町教育委員会が1989年から調査している同じ路線内の北部区域は推定される堀の外側になる。調査次数は第24次・第25次・第27次・第29次・第30次である。

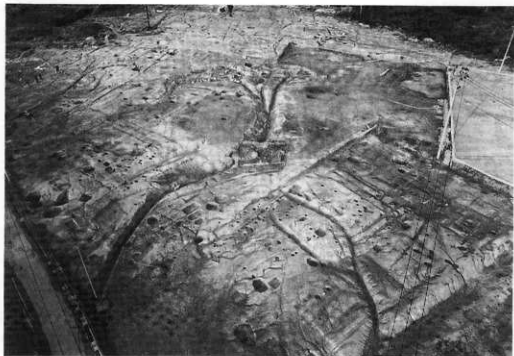


遺跡遠景(東から) (矢印間が本遺跡)



第31次調査区遠景

柳之御所跡 空中写真



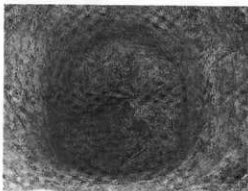
空中写真(近景)



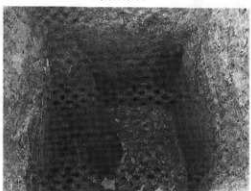
儀式関連遺構



園池景石



糸巻出土状況

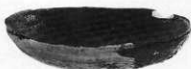


建築部材出土状況

柳之御所跡 遺構



松鶴鏡



漆液容器



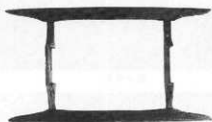
漆器椀



壁土



下駄



糸巻き



琥珀

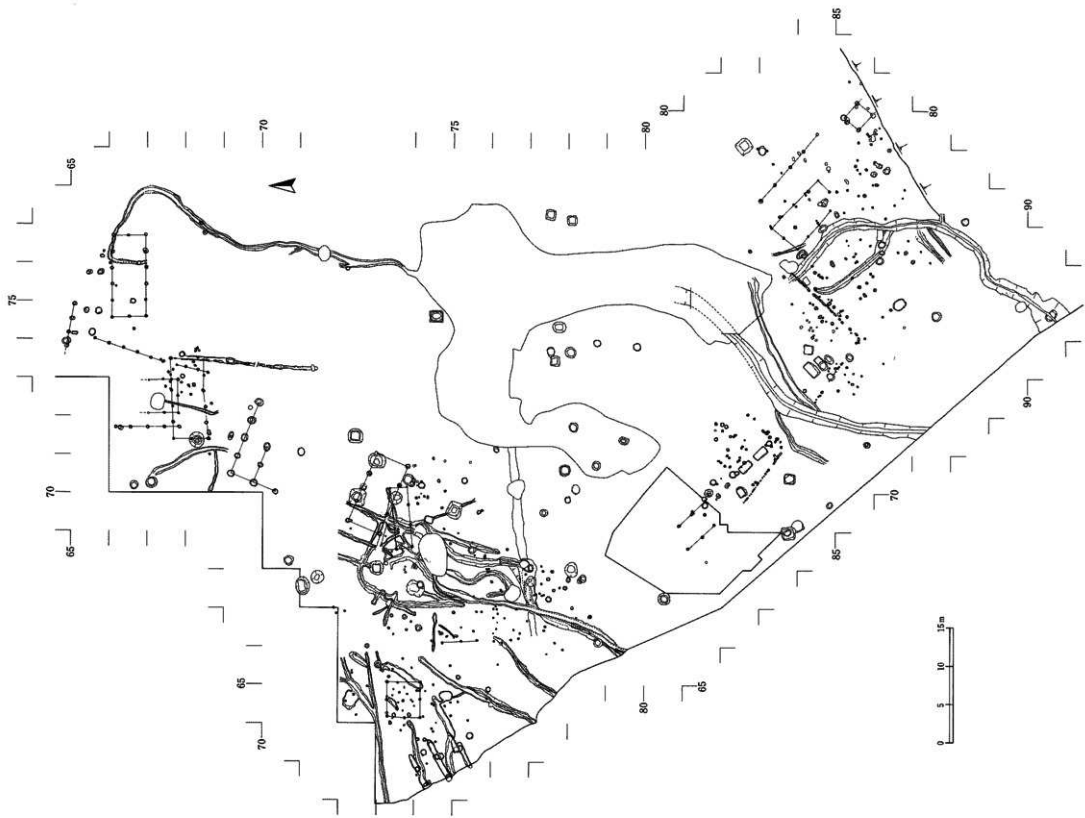


チュウ木状木製品



格子

柳之御所跡 出土遺物



柳之御所跡遺構配置図

(2) 泉屋遺跡

所在地 西磐井郡平泉町平泉字泉屋28-1ほか
委託者 建設省東北地方建設局 岩手工事事務所
発掘調査期間 平成3年5月7日～6月21日
調査対象面積 2,000㎡
発掘調査面積 2,000㎡
遺跡番号・略号 NE76-1079・IY-91
調査担当者 神 敏明・佐々木 務
協力機関 平泉町教育委員会



1 : 50,000 一開

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

泉屋遺跡は、東日本旅客鉄道平泉駅の南約250m付近に位置し、北上川の支流で平泉町内をほぼ東流する太田川左岸の低位河岸段丘上に立地している。調査区は、東日本旅客鉄道の線路によって東西に分けられる。遺跡の標高は22mほどで、太田川との比高は4～6mである。調査区の現況は水田・畑地・原野である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、溝1条、土坑54基、焼土遺構4基、井戸跡1基である。

〈掘立柱建物跡〉

掘立柱建物跡は調査区のほぼ中央に位置している。規模は、桁行5間(9.7m)×梁行1間(4.2m)の東西棟と推定されるが、西側の2基の柱穴の規模が他の柱穴に比べ小さいことから、桁行4間(8.0m)×梁行1間(4.2m)で西側に庇がつく建物である可能性もある。

柱穴の掘り方はほぼ円形で径30～50cm、深さは18～60cmを測る。柱痕は確認されなかった。桁行の柱間寸法は西から1.80m—2.05m—2.00m—1.90m—2.00mを測る。遺物を伴わず時期は不明である。

〈溝跡〉

調査区中央で掘立柱建物跡の西側に位置し、北北西—南南東方向にのびている。検出規模は長さ10m、上幅25～40cm、深さ4～13cmを測る。南側はトレンチによって切られているが、調査区域外に続いている。

〈土坑〉

土坑は開口部径が25cm程度の小規模なものから、3mを越える規模の大きいものまで検出されている。ほとんどは柱穴状を呈し、柱痕が確認されたものもある。また、桶を埋設したもの、底部の四隅に石を置くものなど形状も様々である。時期を確認できたものは、近世以降のものと思われる2基と縄文後期と推定される1基のみである。

〈焼土〉

検出された4基の焼土遺構は、いずれも平面形が環状で、断面形が円弧状を呈し、焚口部をもつ。規模は70×70cmほどで30cm程度掘り込まれている。焼土の厚さは約5cmである。

〈井戸跡〉

調査区北西部で検出された。開口部は4.3×2.9mの不整楕円形を呈し、深さ80cmのところから1.9×1.8mの隅丸方形となる。全体の深さは2.45mである。地山井筒の素掘りの井戸である。

埋土の状況から人為的に埋め戻されたものと思われる。

〈出土遺物〉

調査区東側の黒色土層から縄文後期から晩期前葉にかけての土器がまとまって出土している。また、平安時代のものと思われる土師器・かわらけ・陶磁器が、細片で少量出土している。

石器では石鏃・石匙・磨石・砥石・石皿・石臼・石篋が、石製品では岩版・有孔石製品が出土した。

木製品としては井戸跡の埋土から漆塗りの椀が1点出土している。

3. まとめ

今回の調査の結果、本遺跡は縄文時代・平安時代に生活の場として利用されていたことが明らかとなった。予想された12世紀奥州藤原氏時代の遺構と特定できるものは検出されなかったが、遺物から付近に存在するものと推定される。また、柱穴に関しては広範囲な調査を行えば建物跡の一部であることが判明する可能性がある。



調査区近景



井戸跡



掘立柱建物跡



溝跡



1



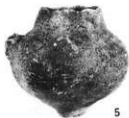
2



3



4



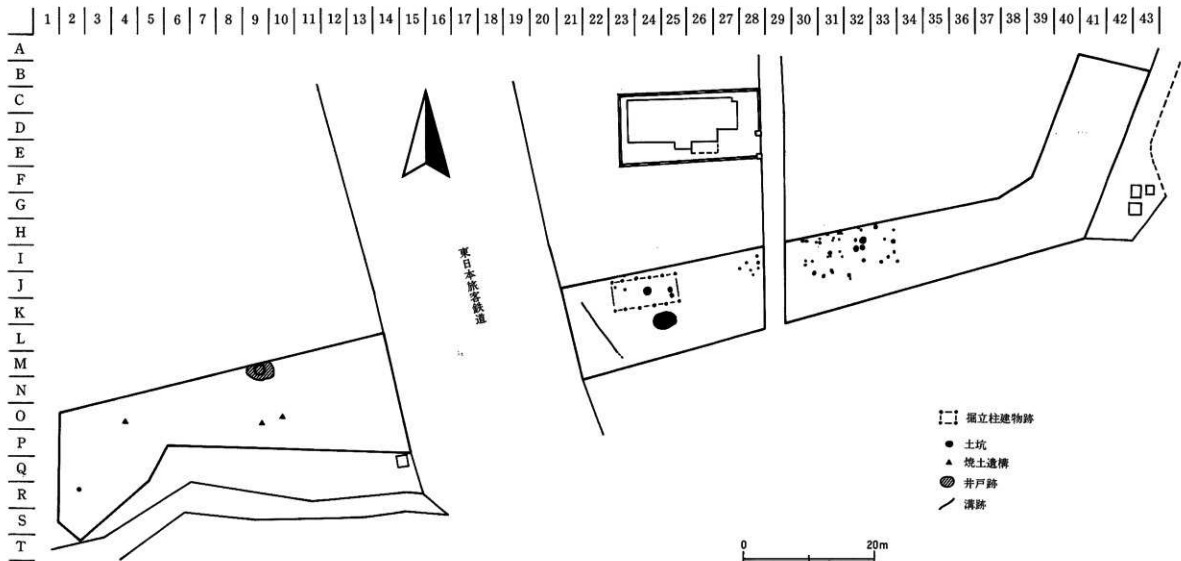
5



6

- 1 石鏃
- 2 石鏃
- 3 石器
- 4 石板
- 5 注口土器
- 6 椀

泉屋遺跡 検出遺構・出土遺物



泉屋遺跡遺構配置図

(3) 仁沢瀬遺跡群

- 所在地 盛岡市繁字山根211ほか (板橋Ⅱ遺跡)
岩手郡滝沢村大釜字仁沢瀬2ほか (仁沢瀬Ⅰ遺跡)
岩手郡平石町第24地割字仁佐瀬6ほか (仁沢瀬Ⅱ遺跡)
岩手郡滝沢村大釜字吉水104ほか (中道Ⅱ遺跡)
- 委託者 建設省東北地方建設局 岩手工事事務所
- 発掘調査期間 平成3年5月8日～7月31日
- 調査対象面積 5,300㎡
- 発掘調査面積 5,300㎡
- 遺跡番号・略号 LE14-0127・NS91
- 調査担当者 斎藤 實・藤村敏男
- 協力機関 滝沢村教育委員会



1 : 50,000 盛岡

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

仁沢瀬遺跡群は、東日本旅客鉄道田沢湖線小岩井駅の南東約1.2～3.2kmの範囲、国道46号沿いに位置し、雫石川北岸の高位段丘上に立地する。標高は、I区(板橋II)が210～212m、II区(仁沢瀬I)が191～193m、III区(仁沢瀬II)が175～179m、IV区(中道II)が151～153mであり、雫石川との比高は10～50mである。調査区の現況は宅地と畑地である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1棟、陥し穴状遺構22基、古墳時代の土壇13基、時期不明の焼土遺構5基である。

〈竪穴住居跡〉

竪穴住居跡は、調査区III C区西端部の南斜面で検出された。遺構の南半部は流失しており、北壁と床面の一部を残すのみである。残存状況から、平面形が不整の円形、推定規模が径3.4mである。壁は緩やかに内湾して立ち上がり、壁高は北東壁で16cmである。地床炉で約70×80cmの範囲に焼土が広がる。柱穴は検出されていない。

〈陥し穴状遺構〉

陥し穴状遺構は、調査区I区で6基、II区で12基、III区で4基検出されている。平面形が溝状、断面形が削平されているものを含めてY字状を呈する。I区の遺構は、開口部が削平されている。規模は、開口部50×330～30×440cm、底部10×350～15×430cm、深さ30～70cmである。長軸方向の壁はほぼ垂直に立ち上がる。底部の平面形は長方形を呈する。II区の遺構は、遺構間が極めて狭く、並行して構築されている。規模は、開口部85×175～90×380cm、底部20×165～90×380cm、深さ70～145cmである。底部は長軸方向に抉り込んでいる。III区の遺構は、南斜面縁辺部に構築されている。規模は、開口部60×195～100×370cm、底部30×180～10×380cm、深さ80～120cmである。底部は長軸方向に抉り込んでいる。

〈土壇〉

土壇は、調査区III C区の南東方向に馬背状の舌状に張り出す段丘上から検出された。遺構の形状は、平面形が不整の楕円形のもの5基、円形のもの8基である。断面形はU字状及びややフラスコ状を呈する。規模は、楕円形のもの開口部95×100～100×140cm、底部70×110～90×130cm、深さ15～25cm、円形のもの開口部径100～135cm、底部径95～115cm、深さ10～35cmである。

調査区南東側から検出されたIII C 4 h土壇は、平面形が不整の楕円形、規模が開口部90×135cm、底部70×125cm、深さ20cmである。遺構の南東壁際の径20×25cmの掘り込み部分に、土師器の坏

と壺が合わせ口状に組み合わせて埋納された状態で出土した。

また、ⅢC 4 g-1 土壌は、埋土上位に20×25cmの範囲に焼土を含み、平面形は不整の楕円形を呈する。規模は開口部1×1.3m、底部80×120cm、深さ25cmである。遺構の時期は、出土土器から古墳時代中期（6世紀）と推定される。

〈出土遺物〉

縄文時代の出土遺物は、縄文時代早期・前期の土器、石鏃・石匙・磨石などである。

土壌から出土した坏は内面が赤彩されている。器形は、底部が丸底であり、体部は丸味をもちながら外傾して立ち上がり、口縁部でややくの字に外反し、内面が口縁部と体部の間に僅かな稜を有する。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデ、底部がヘラケズリである。内面の調整は、口縁部から体部上半が横位のヘラミガキ、体部下半から底部がナデである。法量は口径17cm、器高9cmである。壺は内外面とも黒色である。口縁部に最大径をもち、体部は球形状に張りをもち底部に向かってすぼまる。頸部は体部との間に浅い沈線による段をもって立ち上がり、口縁部との境でくの字状に屈曲して外反する。法量は口径15cm、器高16cmである。器面調整は、口縁部がハケメ、体部がヘラケズリである。

古墳時代の土壌が検出されたⅢC区の西側を中心に、黒曜石製拇指状ラウンドスクレーパーや剥片、後北式土器1片、須恵器の高坏か蓋の口縁部片と甕の体部破片などが出土している。

3. まとめ

調査の結果、調査区Ⅰ～Ⅲ区からは陥し穴状遺構が検出され、縄文時代には狩り場として利用されたことが確認された。

調査区ⅢC区からは、古墳時代中期の土壌群が検出され、埋葬形態祭祀に関係する場であったことが確認された。遺構の周辺から黒曜石製拇指状ラウンドスクレーパーが出土し、遺構内の長軸方向に合わせ口状の坏と壺が埋設されるなど、北東北地方の古墳時代の葬制を研究する上で貴重な資料が発見された。また、坏と壺が東北地方南部の特色をもち、一方では北海道と共通する埋葬形態や後北式土器片や黒曜石製拇指状ラウンドスクレイパーが出土するなど、南と北の文化の接点として注目される。住居跡などの集落跡としての資料を得るまでには至らなかったが、これらの遺構と関連をもつ集落が近郊に存在していると思われる。



Ⅱ 区全景



土壌全景



Ⅱ 区陥し穴状遺構群



Ⅱ 区陥し穴状遺構群



1

後北式土器



2

須恵器



3

土師器坏



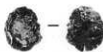
4

土師器壺



5

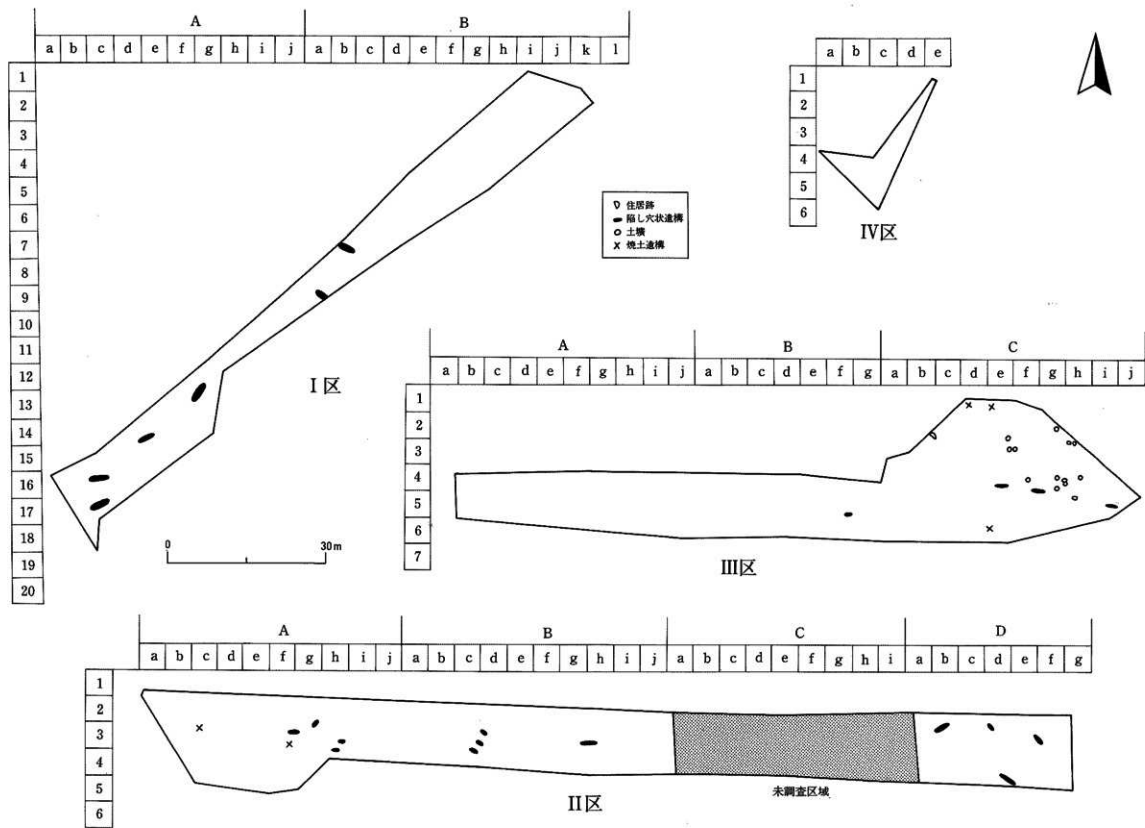
樽指状円形椀器



6

樽指状円形椀器

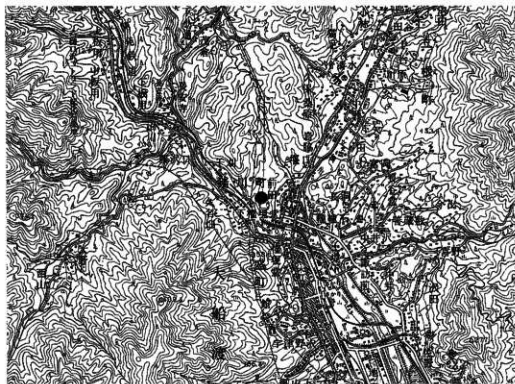
仁沢瀬遺跡群 検出遺構・出土遺物



仁沢瀬遺跡群遺構配置図

(4) 猪川館跡

所在地 大船渡市猪川町字した権現堂70-4ほか
委託者 建設省東北地方建設局 三陸国道工事事務所
発掘調査期間 平成3年4月10日～11月22日
調査対象面積 11,500㎡
発掘調査面積 5,750㎡
遺跡番号・略号 NF38-1324・I K91
調査担当者 斎藤博司・東海林隆幹・鈴木知己・熊谷博由
協力機関 大船渡市教育委員会



1 : 50,000 盛

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

猪川館跡は、東日本旅客鉄道大船渡線盛駅の北西約1.4km、国道45号線の西側に位置し、東流する盛川左岸の丘陵に立地している。遺跡の標高は約67mで、河岸低地との比高は約60mである。調査区の現況は山林である。

2. 調査の概要

調査区は天照御祖神社境内の平場B西側に隣接し、丘陵を南北に縦断する。今年度は南区と探掘跡のそれぞれ西側一帯と、北区の尾根の東側緩斜面を調査した。検出された遺構は、館跡と金探掘跡に関連するもの及び平安期に属するものとに大別できる。館跡に関連する遺構は平場6カ所、平場造成跡3カ所、段築9基、堀2条、土塁2基、掘立柱建物跡14棟、柵列7条、柱穴列14条、門跡2基、柱穴1062個、土坑69基、溝及び溝状遺構11条、集石1条、焼土遺構10基である。金探掘跡に関連する遺構は探掘跡16基、組石6基、溝状遺構13条、焼土遺構1基である。また、平安期に属する遺構は竪穴住居跡2棟、住居状遺構1棟が確認された。

(1) 館跡に関連する遺構

〈平場〉南区に2カ所及び2号段築の東側に造成された3カ所、北区に4カ所が存在する。平場Aは、東西に走る溝によって区画された4段の小平場が南北に並んで形成されている。南側の2段は調査区外であるが、北側の2段には径1m前後の柱穴を伴う掘立柱建物跡が認められ、周囲の堀、土塁、柵列等によって防御される位置関係にある。平場A'は探掘跡に大きく切り入れ、2号土塁より古い。5間×5間の掘立柱建物跡が1棟、その南斜面中腹の2カ所に切り合いの著しい掘立柱建物跡がそれぞれ4棟と3棟が認められる。出土遺物の中で、青磁は平場A'とその南斜面に限られる。2号段築の平場造成跡は切り合い関係から3時期に渡り、いずれも館に関連する遺構の中で最も新しい。

〈段築〉南区に2基、北区に7基が存在する。南区の並行する2基は平場Bから館の南側を回って西側の断崖で切れる。両者の段差は4.5mで、盛土の厚さは最大1.3mである。遺物は船載陶磁器、国産陶磁器、金属製品、永楽通寶、寛永通寶等である。特に船載陶磁器は出土する陶磁器の半数を越える。時期は防御施設の中で最も新しい。

〈堀跡〉南区の平場Aと平場A'の間に1条、館の北端に1条が位置する。前者は上幅3～4m、深さ0.5～1mで、1号土塁、1号柵列と並行して北西から南東へ約40m延びる。3者は同時期と推定され、一連の防御施設として考えられる。遺物は染付、白磁、石製品、金属製品等が出土する。後者は未調査であるが、上幅3～5mの規模のもので、東西に切る天然の沢を利用し土盛を施して構築したことが現況から窺える。

〈土 塁〉平場 A' を挟んで南北に 1 基ずつ位置し、旧表土に盛土されたものである。南側の土塁は長さ 20m 以上、幅約 3.8m、高さが旧表土から最大 0.7m である。遺物は金属製品と石製品が出土する。北側の土塁は長さ 15m 以上、幅約 4.7m、高さが旧表土から最大 0.63m である。直下には平場 A' の掘立柱建物跡の一部柱穴や櫓列及びすり鉢状の探掘跡が検出され、平場 A' を切る金探掘の痕跡が認められる。両者は位置や方向、規模や盛土の様子から同時期と推定される。

〈櫓 列〉平場 A を囲む南斜面に 6 条、平場 A' 西端に 1 条が位置し、いずれも底部に柱穴痕跡が認められる。平場 A の 6 条の櫓列は長さが異なるが、幅や深さは類似し、それぞれが門跡及び土坑と直結する。これら 6 条は平場 A の防衛施設の性格をもつものであり同時期と推定され、段築より古い。出土遺物には金属製品がある。平場 A' の櫓列は北側の土塁直下に位置し、北端は探掘跡に切られ、南端で 90 度西へ方向を変える。長さは 11m 以上で、上幅、深さ、柱穴痕等、規模の面で他の 6 条と異なる。

〈掘立柱建物跡〉平場 A' に 1 棟、その南斜面に 7 棟、平場 A に 3 棟、その東斜面に 3 棟が位置する。平場 A の 2 棟は主柱穴が径 1 m 前後、深さ 1 m 強で岩盤を掘り込んでおり、南北両辺に径 50~60cm の庇柱穴痕を伴う。この東斜面の 3 棟のうち 2 棟は重複している。時期差は不明であるが、北側の 1 棟は段築構築後のものである。これら 13 棟は位置、館の施設との関連及び探掘跡との切り合い関係から 3~4 期に細分できる。遺物は舶載陶磁器、国産陶磁器、土器、金属製品、鉄滓、永楽通寶、柱痕、種子等で、時期は 16 世紀と推定される。

〈柱 穴 列〉平場 A 東斜面に 8 条、1 号段築に 1 条、2 号段築に 2 条、平場 A' に 1 条、その南斜面に 2 条が位置する。東斜面の 5 条は平場の下端に沿って並び、径 23~50cm、深さ 22~69cm の柱穴である。平場 A' の 1 条は径 22~40cm、深さ 13~42cm でほぼ等間 (2.4m) である。南斜面の 2 条は 4 号櫓列とほぼ同一コンタ上にあり、1 条は堀の南端から東へ延び、径 16~34cm、深さ 10~32cm で等間性を欠く。一方は径 10~19cm、深さ 10~37cm でほぼ等間 (1 m) である。他の柱穴列は深さが 10~20cm と浅い。

〈門 跡〉平場 A の東斜面に薬医門と棟門あるいは冠木門の 2 基があり、いずれも櫓列の端部と直結している。主郭への入口で、幅は両者共約 2 m、薬医門を通ると平行する 2 条の櫓列に突き当たり直接内部に入れない仕組みになっている。

〈溝 跡〉平場 A に 5 条、その東斜面に 2 条、南斜面に 2 条、1 号段築法面下に 1 条、平場 D 南法面下に 1 条が位置する。平場 A の 5 条は調査区外に延び、各小平場を区画する。段築法面下の溝は幅 1 m、深さ 1.3m、長さ 34m 以上で調査区外に延びる。東斜面と南斜面の 4 条は比較的浅く、長さが 3~9 m で、柱穴列と重複あるいは平行する場合が多い。

(2) 金採掘跡に関連する遺構

〈探掘跡〉館の中央部に位置し、南北125m、東西80m以上の範囲である。90%以上が露天掘りで、基本層序第Ⅶ層まで掘り込まれている。廃棄された丸みを帯びた花崗岩や角張った頁岩はズリ同様小高く積まれ、現況から窺えた。これらの隙は採掘跡内にも認められ、縦・横断面から隙を再三移動する作業行程が窺える。時期は平場A'の掘立柱建物跡や柵列を切って新しく、2号土塁構築の時期より古い。他にすり鉢状が13基、坑道式が2基、掘り割式が1基と単独の採掘跡がある。採掘跡の北東に位置する坑道式採掘跡1基は、入り口の高さが約6mで、内部は未調査のため不明である。

〈溝状遺構と組石〉溝状遺構は13条である。平場A'法面下の1条は両側を石で組み幅1m、深さ0.9m、長さ20mで、その両側の1条と共に採掘跡への通路と推定される。北区尾根に位置する1条は、幅0.8m、深さ0.5m、長さ2.8m以上で両端が切られる。他の10条は25×40cmの花崗岩を主体とする組石を伴うものと組石を伴わないものとに大別される。いずれも雨天時には長期に渡って雨水が溜り、金精錬のための作業場として使用されたヤナ場跡と推定される。

(3) 平安期に属する遺構

竪穴住居跡2棟、住居状遺構1棟が北区尾根の東側緩斜面に位置する。東側の1棟は、平面形が1辺4.5～4.6mの隅丸方形を呈する。壁は床面から直立気味に立ち上がり、東壁6cm、南壁25cm、西壁45cm、北壁40cmである。床面は平坦で南壁と西壁の下端に周溝が回る。カマドは西壁中央南寄りに位置し、燃焼部は幅70cmで、40×40cmの範囲に焼成をうけ、袖部には芯材として使用したと思われる隙が組まれる。煙道部は長さ約1mの割り貫き式で、煙出しは径44cmの円形を呈し、深さは45cmである。南西隅には平面形が120×60cmの楕円形を呈し、深さが最大18cmのピットを伴う。埋土には多量の土器や焼土粒が含まれる。西壁北寄りにも平面形が60×40cmの楕円形を呈し、深さが最大12cmのピットを伴う。埋土はほとんど焼土粒で土器やクルミが含まれる。南壁には2.1×0.7mの範囲で張り出し部を伴い、埋土が非常に堅く締まり、入口と推定される。西側の竪穴住居跡は築石直下に存在し、東側約半分が削平されている。平面形は1辺が4mの隅丸を呈する。壁高は西壁19cm、南壁4cm、北壁11cmである。床面には焼土痕が多く、焼失廃棄されたものと推定される。埋土が浅くカマドは認められない。

(4) その他の遺構

〈集石〉2号平場の南端に位置し、館との関連は不明である。径10～20cmの花崗岩を主体とする。東西14m、南北3.8mの範囲で旧表土上に盛られている。時期は特定できないが、西端直下には平安時代の竪穴住居跡があり、中世以降である。

(5) 出土遺物

出土遺物はコンテナ3箱である。大部分が中世末期から近世前半と平安時代の遺物である。中・近世の遺物は染付・白磁・青磁・赤絵等の舶載陶磁器、瀬戸・美濃系や肥前系、地元窯で焼成された国産陶磁器、金属製品、鉄砲玉、石製品、銭貨（永楽通寶の他に寛永通寶・銅銭が数点）がある。陶磁器は舶載品が国産品と比較して約6割を占め、皿類が多い。また、舶載品では染付・白磁が多く150点を越え、青磁は数点である。国産陶磁器では灰釉陶器や肥前系陶磁器がほとんどで鉄軸陶器も数点ある。平安時代の遺物は磨耗が著しく、大半が土師器の坏と甕で、須恵器は甕4個体である。土師器の坏はすべてロクロ成形で、一部に再調整が施されている。内面は黒色処理が施されたものとそうでないものがほぼ同数である。甕はロクロ使用が大半で大小同率である。その他、縄文時代、弥生時代の土器片が小コンテナ1箱程度出土している。

3. まとめ

調査の結果、猪川館跡は堀、土塁、柵列、段築等基本的な防御施設を伴う中世の館跡であることが判明した。遠野街道と釜石街道の要所を押さえた山城で、大船渡市10域の中で規模も最大級であり、葛西家土新沼長門・同左近の居城跡と推定される。

平場Aは天然の要塞に堀、土塁、柵列を防御施設として備えた堅固なもので、検出された柱穴の形状や出土した柱痕から、館の一時期における主郭を形成したものと推定される。時期は出土遺物から16世紀前半から近世初頭である。館構築の時期区分は、最低3期に大別される。

1期は平場A'を中心とした掘立柱建物跡と柵列の時期。2期は平場Aを中心とした堀、土塁、柵列構築の時期。3期は段築構築の時期である。

採掘跡は1町歩以上が露天掘り、ほとんどが基本層序第VII層の岩盤まで掘り込まれる。平場A'と北区の尾根を結ぶ面が旧地形面と推測され、旧扇状地状地形に堆積した第V層及び第VI層の土砂利から土金を採取したものと推定される。廃棄された土石を採掘跡内で再三移動する作業方法や相当量の採掘土量、また採掘跡から出土する遺物が極めて少ないことから、厳しい統制の下で長期に渡って金採掘が為されていたことが窺える。

平場A'を切る採掘跡とその上に堆積する2号土塁の断面から、平場A'—金採掘—平場Aと時期の変遷が認められる。平場Aの時期は出土遺物からほぼ16世紀後半と特定でき、金採掘が中世末期には行われていたことになる。

今後の調査の課題は、北区館跡と南区及び金採掘跡との関連の究明にある。



主郭を囲心堀・櫛列と門跡



主郭の掘立柱建物跡と柱穴列



坑道式の採掘跡入口

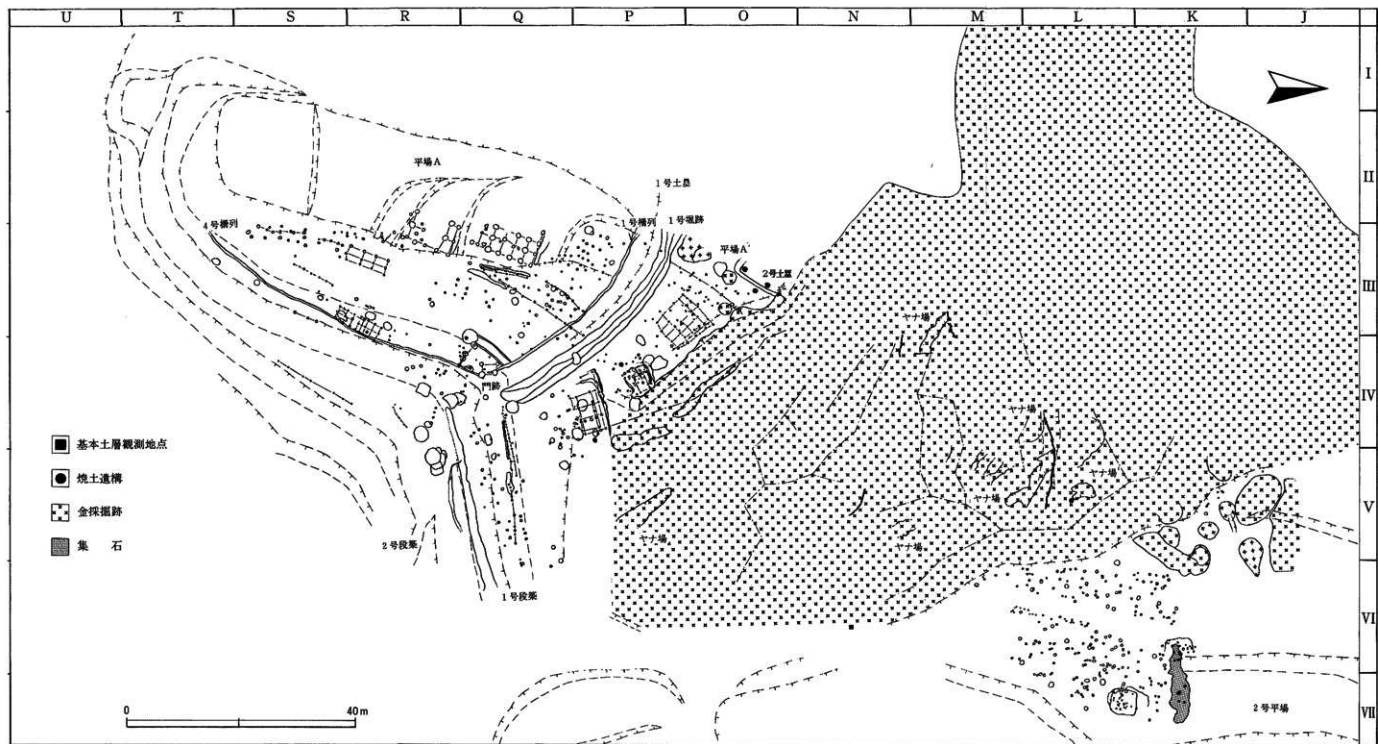


平安時代の竪穴住居跡



- | | |
|---------|--------------|
| 1 埴 付 | 8 鉄砲玉 |
| 2 白磁 | 9 鉄 鍋 |
| 3 赤 衾 | 10 石 臼 |
| 4 青磁 | 11-12 土師器(坏) |
| 5 瀬戸・美濃 | 13 土師器(甕) |
| 6 寛永通寶 | |
| 7 永樂通寶 | |

猪川館跡 検出遺構・出土遺物



猪川館跡遺構配置図

(5) 湾台 II 遺跡

所在地 下閉伊郡山田町船越第5地割4-2、10-3・4、14-3

委託者 建設省東北地方建設局 三陸国道工事事務所

発掘調査期間 平成3年4月10日～7月23日

調査対象面積 3,700㎡

発掘調査面積 3,700㎡

遺跡番号・略号 MG14-0204・WD II-91

調査担当者 鈴木貞行・川村 聡

協力機関 山田町教育委員会



1 : 50,000 大縮

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

沓台Ⅱ遺跡は、東日本旅客鉄道山田線岩手船越駅の西方約0.3km付近に位置し、船越低地西側、鯨山山地の山麓地斜面に立地している。標高は調査区中央部で48m前後である。遺跡の現状は山林と一部畑地である。

本遺跡の北側には昨年度調査した、沓台Ⅲ遺跡が隣接する。

2. 調査の概要

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1棟、土坑7基、焼土遺構3基、集石遺構1カ所である。

〈竪穴住居跡〉

住居跡は調査区北側、南向き緩斜面で検出された。南側半分を木材搬出用道路によって削平されてしまっているが、平面形はほぼ円形、規模は径約4.8mと推定される。炉跡の形態は複式炉である。時期は出土遺物から縄文時代中期である。

〈土 坑〉

土坑は、平面形が楕円形と推定されるものが3基、不整形のものが4基である。楕円形と推定される土坑は、調査区北端の高台で道路で削平された法面で検出された。規模は開口部長軸1.1～2.4m、深さ0.3～0.7mで、これらの内1基の埋土底部から磨石が出土している。不整形の土坑3基は、調査区の西北端縁斜面で検出された。いずれも、IV層（基盤層）を掘りこんでいる。1基の埋土上部より羽口と鉄滓が出土していることから、鍛冶・製鉄に関連する遺構の可能性はある。

〈焼 土〉

焼土遺構3基は調査区北側、南向き斜面で検出された。これらの周辺部で弥生土器の破片が出土していることから、時期は弥生時代の可能性はある。

〈集石遺構〉

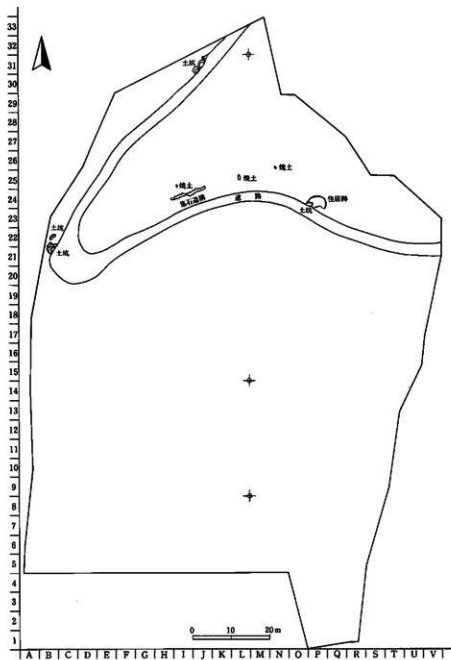
集石遺構1カ所は東西方向に長さ約9m、幅約1mで径5cm～45cmの礫が斜面の縁に沿って密集して検出された。時期は不明である。

〈出土遺物〉

出土した遺物は縄文土器・弥生土器・石器・羽口・鉄滓である。縄文土器は調査区中央部の限られた範囲、II層（黒色土）中からと、住居跡からの出土である。これらの大部分は縄文時代中期の土器である。弥生土器は、焼土遺構周辺部で少量出土した。石器は石鎌、石匙、磨製石斧、磨石等が少量出土している。

3. まとめ

今回の調査で、縄文時代の住居跡が検出されたことにより本遺跡は、縄文時代に生活が営まれていた場所であったことが明らかになった。遺構は調査区外に及んでいると思われる。羽口や鉄滓が出土していることから、製鉄に関連する施設が周辺に存在するものと推測される。



湾台Ⅱ遺跡遺構配置図



調査区全景(雑物除去後)



縄文時代の竪穴住居跡



土坑(断面)



土器出土状況



1



2



3



4



5



6



9



7



8

- 1~4 縄文土器
5~7 弥生土器
8 羽 皿
9 鉄 滓

湾台Ⅱ遺跡 検出遺構・出土遺物

(6) 水吉 VI 遺跡

所在地 九戸郡軽米町大字軽米第24地割字水吉28ほか
委託者 農水省東北農政局 八戸平原開拓建設事務所
発掘調査期間 平成3年7月16日～11月21日
調査対象面積 5,000㎡
発掘調査面積 5,000㎡
遺跡番号・略号 I F63-0361・MYVI-91
調査担当者 濱田 宏・鈴木貞行・川村 聡
協力機関 軽米町教育委員会



1 : 50,000 三戸

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

水吉VI遺跡は、八戸自動車道軽米インターチェンジの北北東約5.5km付近に位置し、雪谷川左岸の河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は98～103mで、ほぼ南北方向に緩やかに傾斜している。河岸低地との比高は約15mで、遺跡の現況は山林と畑地である。川の対岸は青森県南郷村である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡2棟、土坑13基、陥し穴状遺構2基、焼土1基、炭窯跡1基である。

〈竪穴住居跡〉

竪穴住居跡2棟は、出土した土器の特徴から縄文時代中期初頭の遺構と考えられる。平面形はいずれも楕円形状を呈し、規模は4.7×3.9mと4.5×3.9mである。うち1棟は、周溝が住居壁面のかなり内側に円形にあり、建替え拡張された住居跡である可能性が高い。炉はいずれも地床炉を2カ所に持ち、柱穴は壁に沿って数個ずつ配置されている。

〈土 坑〉

検出された13基のうち、縄文時代に属すると思われるものが10基、時期不明のものが3基である。縄文時代のフラスコ状土坑は4基確認されたが、うち1期は開口部径が1.8m、底部径が2mを超えるもので、住居跡とほぼ同時期と考えられる深鉢型土器が埋土上部から出土している。縄文時代の土坑は貯蔵用と考えられるものが多い。

〈陥し穴状遺構〉

2基とも縄文時代に属するもので、平面形は円形を呈し、底面には1個と3個の杭穴を有する。規模は開口部径が1.3mと1.7m、深さはともに約1.2mである。

〈焼 土〉

時期不明の焼土であるが、現地性のものである。85×50cmの不整形で、焼土の厚さは最大で15cmである。

〈炭 窯〉

ごく最近まで使用されていたと思われる炭窯で、直径3.6mの円形を呈する。斜面下方が入口で、上方には煙出口が検出された。

〈出土遺物〉

出土土器のすべてが縄文時代のものであり、中でも前期末葉から中期初頭にかけての時期のものが多い。その他に、後期の土器片が少量出土している。いずれも深鉢が主体である。総量

はコンテナ8箱である。復元個体は60点、破片の拓本を採ったものは200点に及ぶ。

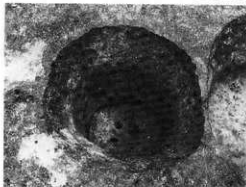
石器は、総数で約150点である。石鏃・石匙などの剥片石器のほか、磨石・凹石・有孔砥石などの礫石器が出土している。石製品としては、直径4～5cmの円盤状石製品が20点ほど出土しているが、用途は不明である。

3. まとめ

今年度の調査範囲は、遺跡全体の約10分の1ほどの面積であったが、縄文時代の住居跡とその周辺に貯蔵穴や陥し穴状遺構が検出され、この地域が縄文時代の生活の場として利用されていたことが明らかとなった。地形環境・遺構の分布状況から、集落は来年度以降の調査区となる東側に延びていることが推測できる。今後の調査で、集落構造の全容が解明されることが期待される。



縄文時代の墜穴住居跡



陥し穴状遺構



フラスコ状土坑



1



2



3



4



5



6



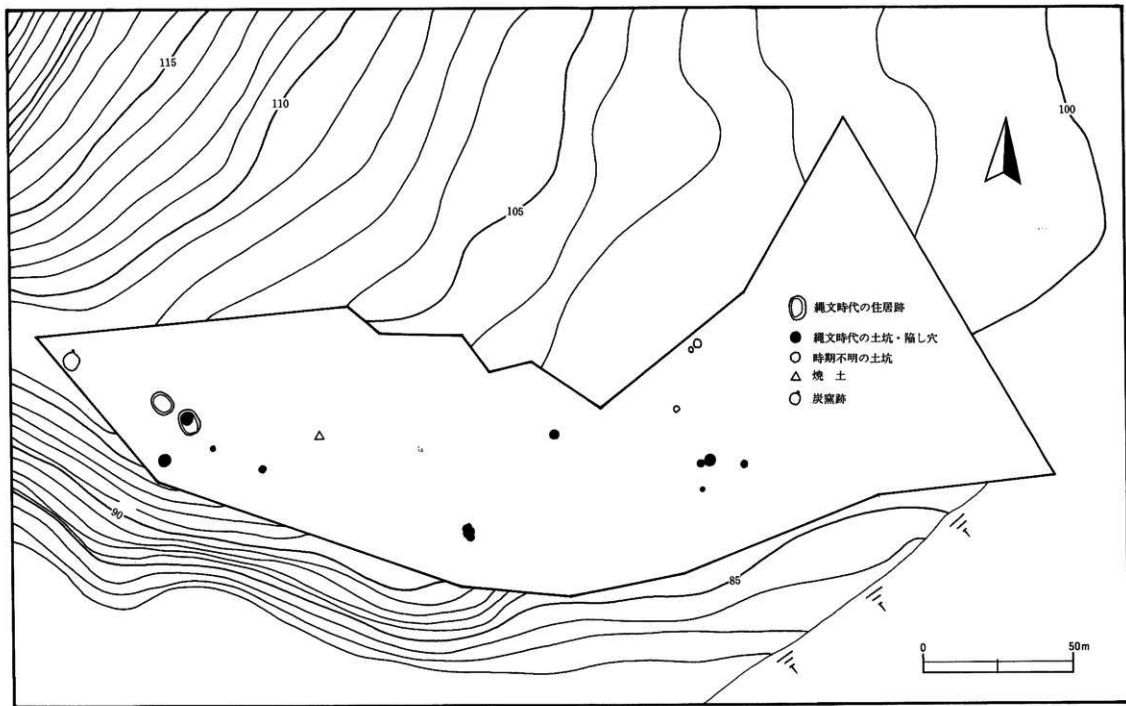
7



8

- 1-3 石器各種
4・5 円盤状石製品
6-8 縄文土器(中期)

水吉Ⅶ遺跡 検出遺構・出土遺物



水吉Ⅴ遺跡遺構配置図

Ⅲ. 岩手県関係

(1) ^{たて}館 IV 遺跡

所在地 北上市黒沢尻町字立花第3地割39-1ほか

委託者 岩手県土木部 北上工事事務所

発掘調査期間 平成3年4月9日～5月2日

調査対象面積 252㎡

発掘調査面積 252㎡

遺跡番号・路号 ME66-1267・TTIV-91

調査担当者 佐々木 弘・佐々木 務

協力機関 北上市教育委員会



1 : 50,000 北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

館IV遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線北上駅の東北東約2kmに位置し、標高58～59mの河岸低地に立地している。遺跡の北西約50mには北上川が北東から南西方向に流れており、遺跡の面より3～4m低い。発掘前の現況は水田・畑地・宅地である。周辺の遺跡には、八天遺跡、牡丹畑遺跡、上川岸II遺跡などがある。

2. 調査の概要

検出された遺構は、時期不明の土坑3基、柱穴状土坑5個であるが、調査範囲が幅0.8～1.5mの溝状に限定されているため全体の形状を明確にできたものはない。出土遺物は縄文時代の土器、石器、平安時代の土師器等である。

〈土 坑〉

土坑3基は調査区中央部で検出されている。平面形・規模は推定で、開口部径90cm・深さ35cmの楕円状のもの1基、開口部径183cm・49cmの不整形のもの1基、開口部径123cm・深さ98cmの円形のもの1基である。時期は不明である。

〈柱穴状土坑〉

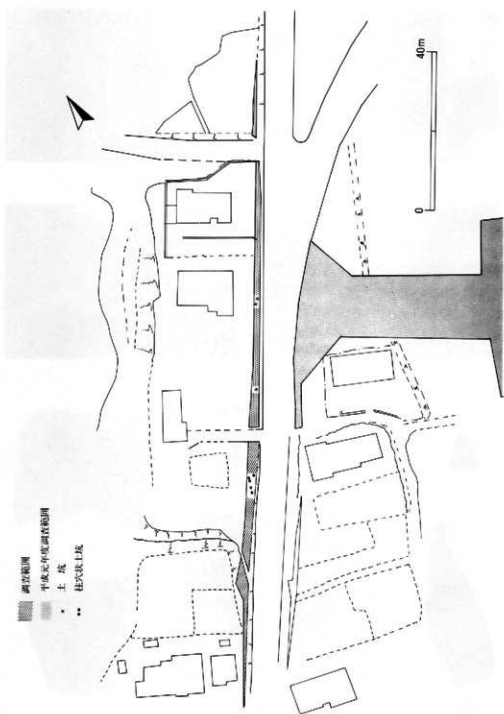
調査区中央南側で5個検出されている。平面形は円形で、規模は径20～30cm、深さ30～40cmと小さい。直線的に並ぶようにも観察されるが、調査範囲が狭く建物跡になるかどうかは不明である。また、時期も不明である。

〈出土遺物〉

縄文時代の遺物は、縄文土器、石鏃、石匙、石筈、磨製石斧等である。土器は中期のものが大半で、前期のものが1点出土している。復元可能なものは少ない。他に、平安時代の土師器片、寛永通寶2点が出土している。

3. まとめ

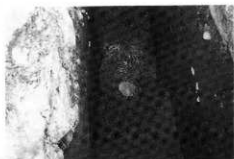
本年度の調査区域は、縄文時代中期の集落が確認された平成元年度の調査区域のすぐ西側にあたるものの、その広がりを明確にすることはできなかった。地形的には元年度の調査区域より一段低い位置にあたり(1～2m)、今回出土した当該期の遺物も東側からの流れ込みと思われる。



館Ⅳ遺跡遺構配置図



土坑



土坑



土坑



作業風景



石鏃



縄文土器



石匙



石筈



磨製石斧



館IV遺跡 検出遺構・出土遺物

しんざんごんげんしゃ
(2) 新山権現社遺跡

所在地 西磐井郡平泉町長島字月館79-3 ほか

委託者 岩手県土木部 一関土木事務所

発掘調査期間 平成3年4月10日～8月9日

調査対象面積 1,300㎡

発掘調査面積 1,300㎡

遺跡番号・略号 NE66-1255・NYG-91

調査担当者 金子昭彦・阿部勝則・引屋敦学

協力機関 平泉町教育委員会



1 : 50,000 水沢・一関

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

新山権現社遺跡は、平泉駅の北東約4kmに位置し、東稻山麓の、沢に向かって落ちる北向き
の緩斜面に立地している。遺跡の標高は40m前後である。今回調査対象になったのは、遺跡の
中心から100mほど東にいった部分にあたるようである。遺跡の現状は畑地と宅地である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡3棟、配石遺構3基、土坑58基である。また、縄文時代後期
と晩期後半の遺物包含層がある。出土遺物は非常に多く、縄文時代の土器、土製品、石器、石
製品、その他がある。

〈竪穴住居跡〉

宅地直下に検出され、攪乱をひどく受けていて全体の形状は不明である。このうち1棟から
は石囲炉が検出された。3棟の住居跡の床は貼床である。時期は、出土遺物などから、何れも
縄文時代晩期と思われる。

〈配石遺構〉

1基が縄文時代後期、2基が縄文時代晩期に属する可能性がある。遺構を構成している石は、
遺物包含層から多量に出土した山石と同じであり、また、特殊な遺物が出土したわけでもなく、
その性格については不明な点が多い。

〈土坑〉

58基のうち1基は墓塚の可能性が高い。縄文時代晩期後葉に属すると思われるもので、骨片
が出土している。晩期後半（大洞C2式新）の遺物包含層中にあり、全体の形状は不明確であ
る。

その他は、いずれも柱穴状の小さなものであるが、柱穴のように並んで建物を構成している
と考えられるものはほとんどない。遺跡の中で数カ所集中する地点がある。時期は、出土遺物
などから縄文時代に属すると思われる。

〈遺物包含層〉

大別して、後期の包含層と晩期後半の包含層がある。いわゆる“捨て場”だと思われる。

後期の包含層は、北東に下る地形にそって形成され西側の調査区では東半分、東側の調査
区では北半分に確認された。層厚は厚いところで1mを越えるが、土層の状態等から考えると、
調査区の残りの部分に見られないのは削平によって消失したためと思われる。

後期の包含層は、間に焼土、炭化物、ロームブロック等を多量に含む層を挟む地点では貝塚
並みに非常に細かく分層できる。そうでない所では1mほどの厚さがあっても上から下までほ

とんど分層できず一様に見える。細かく分層できたところは、土器がほとんど混入なく良好な状態で出土しており、土器編年の検証、細分するのに格好の資料となっている。また土器との共存関係が明確なので、土偶などの他遺物の編年を行うにも格好の資料となろう。さらには、“廃棄単位”とでも言うべきものを掘めるところもあり、縄文時代後期の廃棄の仕方、さらには使用の同時性も垣間見せてくれ、縄文時代後期の生活の復元に大いに役立つことと思われる。なお、分層された層の大部分は十腰内Ⅰ式の範囲に納まるものである。

晩期後半の包含層は、西側の調査区中程の傾斜がきつくなった辺りに確認された。3枚あり、いずれからも大洞C2式の新しい部分の土器が出土している。遺物は、後期の包含層ほど種類・量とも多くはないが、何点かの完形土器、土偶などが出土している。

〈出土遺物〉

狭い範囲からおびただしい量の遺物が出土した。その総量は、土器類がコンテナ243箱、石器類がコンテナ9箱である。

出土土器のうち、全体の8割を縄文時代後期の土器が占め、後の2割のうち1割が晩期後半（大洞C2式新）の土器、残りの1割を前期初頭、晩期前葉の土器などが占める。

後期の土器のうち半分は十腰内Ⅰ式、宮戸Ⅰb式、南境式に比定されるもので、次いで十腰内Ⅱ式（宮戸Ⅱa式）、十腰内Ⅴ式（宮戸Ⅲa、Ⅲb式）の順に多く、十腰内Ⅲ～Ⅳ式（宮戸Ⅱb式、西ノ浜式）に比定されるものはやや少ない。また、異形土器が非常に多く、猪？意匠のついた蓋や類例を見ない形態を持つ土器も出土している。

土製品には、土偶、土鍾、耳飾り、スタンプ形土製品、鐸形土製品、腕輪形土製品、円盤形土製品などがある。土偶の中には巨大な腕を組む土偶の腕部と思われるものも出土している。

石器には、石錐、石鏃、石筥、石匙、搔器・削器等と思われる不定形石器、磨製石斧、磨石、石皿、凹石、砥石、石鍾などがある。石鍾の中には秋田県八木遺跡で出土したのと同様にアスファルトが付着したものがある。また、後期の包含層から10点あまりの石鍾が輪を描くような形に並んで出土した。

石製品には、石棒、石刀・石剣、有孔鏃、異形石器などがある。

その他、炭化材や獣骨が多数出土している。獣骨は火を受けているものが多い。

3. まとめ

調査によって、本遺跡の今回の調査区は、縄文時代後期には大規模な捨て場として利用され、その後、晩期には住居が建てられ、また捨て場として利用されていたことがわかった。そして、捨て場からは貴重な遺物が多量に良好な状態で出土し、これらを細かく層位的に取り上げたことから、土器編年などの遺物研究等に大きく寄与することと思われる。



遺物包含層の調査状況

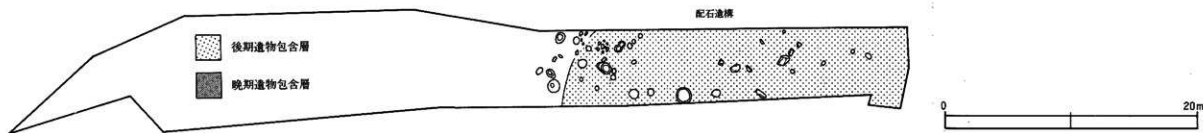
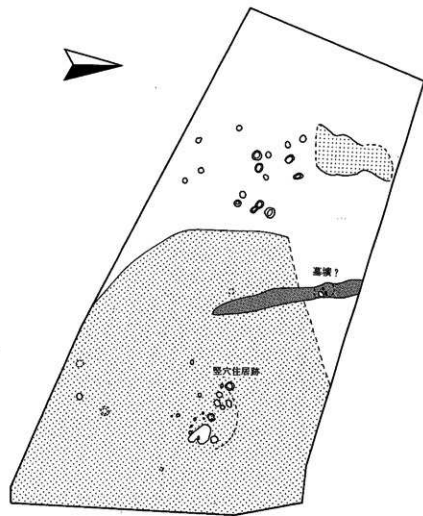


合わせ口土器の出土した墓塚



- | | |
|----------------|---------|
| 1 注口土器 | 6・7 土 偶 |
| 2 片口土器 | 8 石 棒 |
| 3 筒形土器 | 9 有孔環 |
| 4 ろ過付き注口土器(飯鉢) | |
| 5 猪?意匠のついた蓋 | |

新山権現社遺跡 検出遺構・出土遺物



後期遺物包含層

晚期遺物包含層

新山権現社遺跡遺構配置図

(3) 新 戸 向 II 遺 跡

所 在 地 九戸郡軽米町第13地割1-2
委 託 者 岩手県土木部 二戸土木事務所
発掘調査期間 平成3年4月9日～11月8日
調査対象面積 1,385㎡
発掘調査面積 1,385㎡
遺跡番号・略号 I F73-2112・OHII-19
調査担当者 斎藤邦雄・鈴木貞行・八重座のり子
協力機関 軽米町教育委員会



1 : 50,000 一戸・二戸

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

大日向Ⅱ遺跡は八戸自動車道軽米インターチェンジの北側にあり、軽米町中心部から北西約1.3kmの所に位置している。遺跡は東側が暫谷川、西側は瀬月内川の支流である郷坂川によって挟まれた丘陵地から東へ張り出した標高170mの南向きの緩斜面上に立地している。現状は果樹園である。

2. 調査の概要

本年度の調査区は平成元年度に当センターが実施した調査区に隣接する。検出された遺構は縄文時代の竪穴住居跡28棟・焼土遺構12基・埋設土器7基・掘立柱状建物跡・旧可道と弥生時代初頭の遺物集中区である。出土遺物の大半は、木製品を含む縄文時代の遺物と弥生時代の土器である。

〈竪穴住居跡〉

縄文時代の竪穴住居跡は、早期2棟・中期2棟の他に後期中葉から末葉に属するものである。早期の住居跡は、直径2.5mの円形のもの、推定で2×3.5mの楕円形状のものである。両者とも住居跡内からは柱穴や炉の施設は検出されていない。中期の2棟の住居跡は直径が約5mの円形で、6本柱の柱穴配置を示すものである。炉は南東壁に寄って構築されており、複式炉の形態をもつものである。両者は住居跡の構造・炉の形態・出土土器に類似性が認められるが、重複関係にあり時間差がある。検出した竪穴住居跡の大半を占める後期中葉から末葉にかけての住居跡は、重複が著しく全体像を把握できたものは少ない。平面形はすべて円形であるが、直径が4m程度のものから大型のものは6m程度のものである。この時期の竪穴住居跡の多くは、壁際に内心に傾斜する多くの壁柱穴が認められる。炉の形態・重複関係・出土土器から何時期かに分類される。ほぼ同時期と考えられる住居跡のなかでは、小型の住居跡は石囲炉、ややこれより規模の大きい住居跡は地床炉を持つ傾向が見られる。

〈土 墳 墓〉

平成元年度の調査区に隣接した北西区域から、埋葬人骨の残る土墳墓群が検出されている。これらの土墳墓群は平成元年度調査の土墳墓群と一連のものであり、広範囲にわたって墓域が形成されている。今回の調査では5基の土墳墓とその他、人骨と思われる骨片・赤色顔料の付着した骨片を3カ所で確認している。最も残存状況の良好な土墳墓は、深さ40cmで1.75×0.95mの規模をもつ楕円形のもので、遺構確認面のほぼ中央部から破砕された石皿と赤色顔料の塗布された扁平礫が出土している。土墳墓にはヒスイ製の垂飾りを着装した1体分の人骨が埋葬されていた。

〈掘立柱状建物跡〉

平成元年度に引き続き、調査区の北西区域から直径1.2～1.5m、深さ1.5m程度の規模を持つ土坑が6基ほど検出されており、なかには明瞭に柱痕跡を残すものもあり掘立柱状建物跡を構成する一部と考えられる。このような土坑類は、土墳墓と一部重複しているものもあるが墓域の外側に展開する傾向が見られる。

〈縄文時代の河道〉

沢の部分から、縄文時代の河道が検出された。川幅は約5m前後で、西から東方向へ緩やかな傾斜を持っている。礫層及びその間に入る腐植層からは、大量の土器とともに加工痕の認められる木製品・漆塗り製品（土器・木製品）、自然落下のトチ・クルミなどが出土している。

〈弥生時代の遺物集中区〉

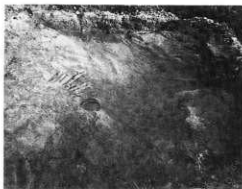
調査区南端の沢に面した地区に、遠賀川系土器を含む弥生時代初期の遺物集中区が検出された。5m四方の区域のなかに、遠賀川系土器を含む在地の弥生土器と土偶・石刀・スプーン状土製品が出土している。

〈出土遺物〉

縄文時代の遺物では、後期後半・晩期前半の土器を中心に、少量の早期後半・前期・中期の土器が出土している。土製品では土偶をはじめ腕輪・スタンプ形土製品・耳栓・土版、石器では石鏃・石匙・石筥・石錐・石皿・磨石・凹石・半円状扁平打製石器・円盤状石製品・軽石製浮子・環状石製品などが見られる。縄文時代の河道からは、自然落下と考えられるクルミ・トチの実をはじめ、加工痕のある部材・杭・篋状木製品・男根形木製品・漆塗り環状土製品・漆塗り木製容器・漆塗り土器（透漆・黒漆・赤漆）・漆保存容器が出土している。弥生時代の遺物としては、遺物集中区から遠賀川系土器の大型壺・在地の弥生時代初期と思われる一群の土器・土偶・石剣・スプーン状土製品、南側斜面の土器捨て場から弥生時代終末期の特殊燃糸文系土器、沢からは後北式土器が出土している。

3. まとめ

今回の調査区は、平成元年度に当センターが実施した地域と隣接した場所である。前回までの調査結果とあわせると、縄文時代早期・中期の集落が営まれ、さらに縄文時代後期後半には住居跡数が増加するとともに集落域も拡大している。土墳墓はあるまとまりを示す傾向にあり、広範囲に墓域を形成しているようで、今回の調査ではこの南限を把握することができた。低湿地の調査は県内では盛岡市科内遺跡に次ぐものであり、縄文時代晩期の漆塗り製品を含む各種の木製品が出土したことは、該期の木製品の研究に貴重な情報を提供するものと思われる。



縄文時代の河道



縄文時代の住居跡



木製品出土状況



土壌墓



- 1 彩文土器
- 2 男型形木製品
- 3~5 縄文土器
- 6 垂飾り
- 7 スタンプ形土製品
- 8 人面付土版

大日向Ⅱ遺跡 検出遺構・出土遺物



(4) 丸木橋遺跡

所在地 九戸郡九戸村第17地割字丸木橋32他

委託者 岩手県土木部 二戸土木事務所

発掘調査期間 平成3年8月1日～11月12日

調査対象面積 1,950㎡

発掘調査面積 1,950㎡

遺跡番号・略号 I F92-2121・MK91

調査担当者 藤村敏男・斎藤 實

協力機関 九戸村教育委員会



1 : 50,000 一戸

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

丸木橋遺跡は、国道340号沿い九戸村役場の北約7kmに位置し、瀬月内川の左岸に立地している。遺跡の標高は約220m前後である。調査区内は南にごく緩く傾斜しているが、南端の川岸部は1mほど低い。調査区の現況は、宅地及び畑地である。遺跡の南東約250mのところに葉ノ木沢遺跡があり、南約800mに菅波遺跡、約4kmには田代IV遺跡が、北東2kmには駒板遺跡がある。

2. 調査の概要

昨年度の調査区を挟んだ形で調査が行われた。北側の調査区には縄文時代早期の遺構が予想されたが、遺物が少量認められただけである。南側には昨年度検出された住居に続く古墳時代から奈良時代にかけての住居跡10棟が検出された。その他に近代の掘立柱の建物跡1棟が検出された。

〈竪穴住居跡〉

住居跡の平面形は方形である。うち1棟は2.5m四方で、地床炉を有しカマドを伴わないものである。大半の住居跡の平面形は四角形で規模は一辺3.5mのものが大半で、1棟だけが約6mと大きい。また大半は焼失家屋で床面に多量の炭化材と焼け土が検出された。これらの住居跡は北側にカマドを設置している。カマドは、袖の下半部が造り出して上半部は糠を芯にして構築している。煙道部は割り貫き式と思われるものが多いが、大部分は黒褐色土層に構築しているため、崩落して掘り込み式と識別し難いものが多い。埋土には十和田a火山灰がレンズ状に入り込んでいる。遺構内の出土土器で復元できるものは約40点である。土器の大半は甕であるが遺構によっては坏が多いところもある。

〈建物跡〉

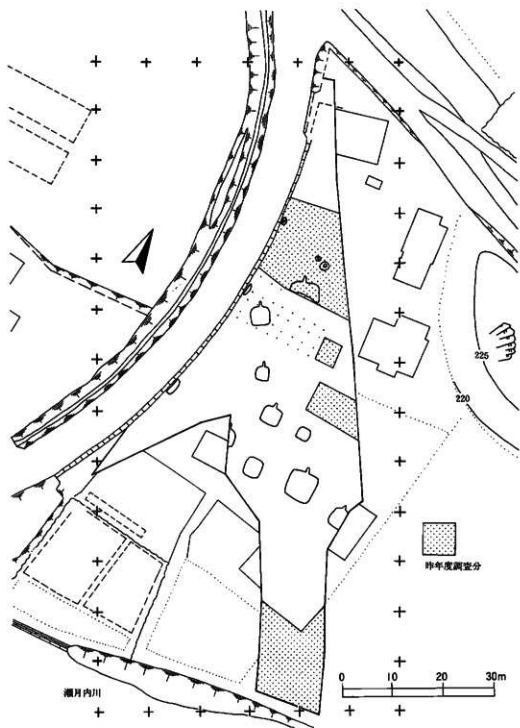
掘立柱建物跡は東西7間、南北2間で南庇を有するものである。この構築時期は明治初期のものである。この遺構の3分の1が現代の建物により破壊されている。

〈出土遺物〉

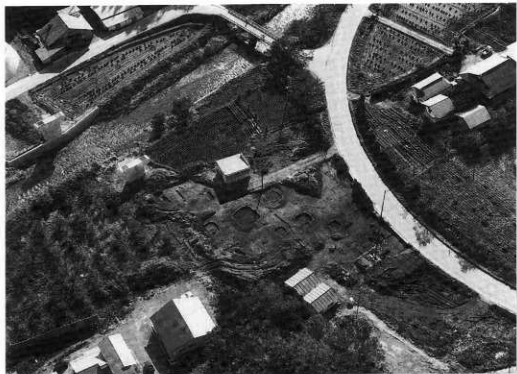
遺構内の遺物は前述の他に砥石・刀子がある。遺構外の遺物は縄文時代早期と中期・後期のもの若干と古墳～奈良時代のもの若干である。

3. まとめ

今回の調査によって、縄文時代早期からの縄文土器、および古墳時代から奈良時代にかけての住居跡と土師器が確認され、長い間人々の生活の場であったことが明らかになった。特に古代における集落は、調査地区の東西に広がるものと推定される。



丸本橋遺跡の調査範囲と遺構配置図



遺跡全景



石器



土師器



丸木橋遺跡 遺跡全景・出土遺物

(5) 川井館跡

所在地 九戸郡山形村川井第10地割字後口表63・87-2・87-3

委託者 岩手県土木部 久慈土木事務所

発掘調査期間 平成3年5月10日～11月21日

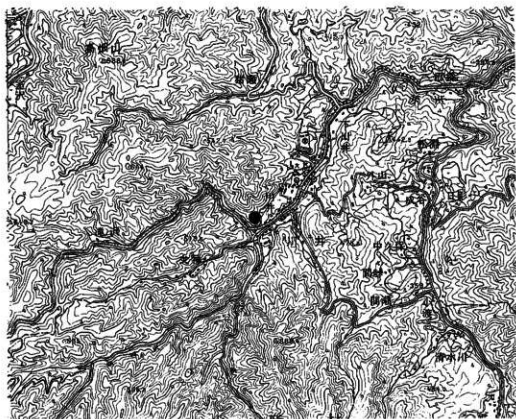
調査対象面積 6,360㎡

発掘調査面積 6,360㎡

遺跡番号・略号 LF57-0229・KD-91

調査担当者 高橋義介・花坂政博

協力機関 山形村教育委員会



1 : 50,000 陸中関

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

川井館跡は、山形村役場の西南西約950mに位置し、川井川左岸の山地に立地している。遺跡の標高は327～336mで、谷底平野との比高は44mほどである。調査区の現況は牧草地と山林である。

2. 遺跡の概要

川井館は二つの郭をもつ連郭式山城である。検出された遺構は、館跡に伴う平場、曲輪、堀跡2条、時期が不明な焼土3基、柱穴状土坑52基である。

〈平場〉

調査区である二郭の平場は楕円形を呈し、規模は南北35m×東西20mで緩やかに傾斜している。東と西側に腰曲輪を配し、南と北側に空堀が巡っている。また、主郭とは空堀によって区画されている。

〈曲輪〉

二郭の東と西側斜面の中段から検出されている。規模は長さ11～14m、幅3m前後である。

〈堀跡〉

二郭の北側から二重の空堀が検出されている。規模は上幅2～6m、下幅0.5～3.5m、深さ2～2.5m前後である。郭の西側に至って1条となり沢に続いている。

〈焼土〉

二郭の平場緩斜面上から3基検出されている。平面形は楕円形状を呈し、規模が径25～55cm前後、厚さ2～最大5cmである。いずれも現地性のものである。

〈柱穴状土坑〉

平場から52基検出されている。平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模が径20～80cm、深さ10～80cmと様々である。中には掘り方をもつものもあるが、掘立柱建物跡になるような規則性は認められない。時期や性格等は不明である。

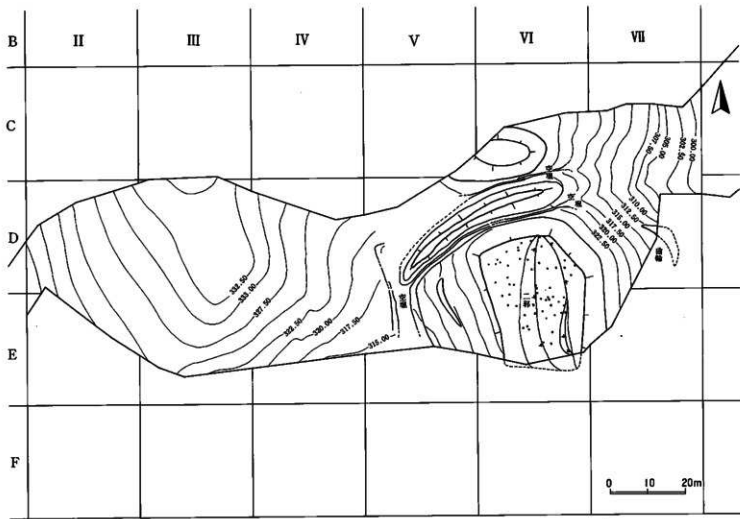
〈出土遺物〉

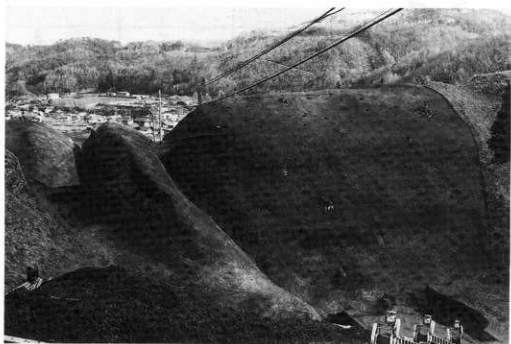
二郭の平場からは鉄滓、古銭(熙寧元寶)、遺構外からは縄文時代の土器・石器、弥生時代の土器、平安時代の土師器、ふいごの羽口、鉄滓、陶磁器等が僅かに出土している。

3. まとめ

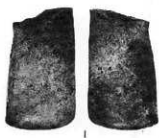
館跡の時期は、出土した古銭等から中世と推測できるものの、館主や沿革の詳細が不明である。主郭と二郭の平場は狭隘で、建物跡も確認されないことから平時は近辺の見張りを主とする館との説も十分に考えられる。

川井館跡遺構配置図





空堀跡と二郭(西側から)



- | | |
|-----|-----|
| 1 | 石 斧 |
| 2 | 石 匙 |
| 3 | 土師器 |
| 4・5 | 鉄 洋 |
| 6 | 古 銭 |
| 7・8 | 陶磁器 |

川井館跡 検出遺構・出土遺物

(6) 明^{あけ}通^{どおし}遺跡

所在地 九戸郡山形村大字川井第17地割字明神23番114

委託者 岩手県土木部 久慈土木事務所

発掘調査期間 平成3年4月11日～5月10日

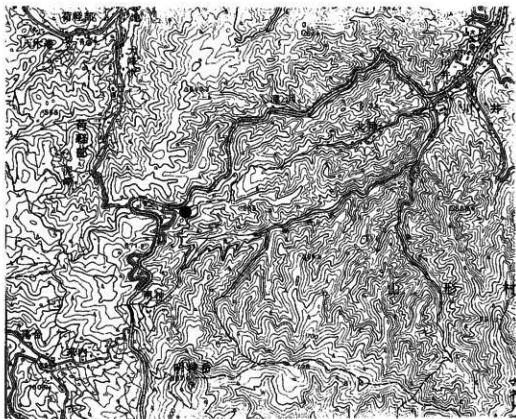
調査対象面積 930㎡

発掘調査面積 930㎡

遺跡番号・略号 J F45-2203・AD-91

調査担当者 花坂政博・高橋義介

協力機関 山形村教育委員会



1 : 50,000 陸中関

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

明通遺跡は、山形村役場の南西約4.6kmに位置し、川井川に注ぐ小さな沢によって開折を受けた狭隘な谷底平野と、それに接する小扇状地状の緩斜面上に立地している。調査区域の標高533～535m、現況は山林である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、焼土遺構4基である。出土遺物は、縄文土器、石器等で、いずれも遺構外からの出土である。

〈焼土〉

4基検出されているが、平面形はいずれも不整な円形、楕円形を呈する。規模は最大のものが径63×57cm、層厚11.5cmほどである。最小のものは34×26cm、層厚4cmである。

焼成部分はやわらかいものが多く、色は褐色系、炭化物が含まれている。

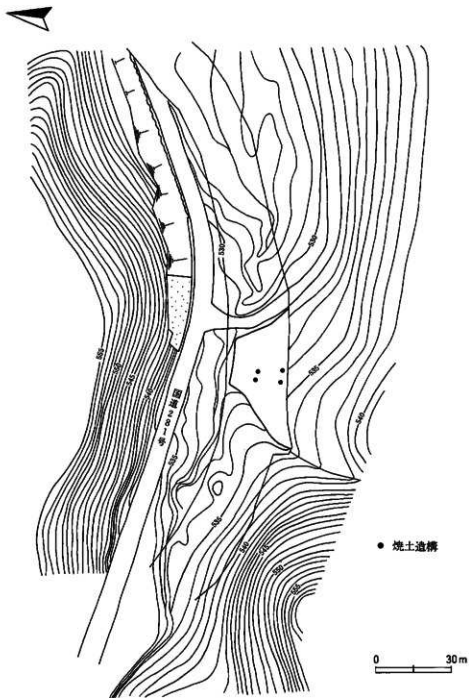
遺物を伴わない。

〈出土遺物〉

遺構外の出土土器は、縄文時代前期・後期のものであるが、いずれも少量である。その中で切断蓋付土器の上蓋が一点出土している。また、石斧等の石器も数点出土している。

3. まとめ

今回の調査の結果、4基の焼土遺構が検出され、縄文時代前後期の土器等が出土した。しかし遺構・遺物共に少なく、遺跡の性格を把握するまでには至らなかった。調査範囲に隣接した西側の部分からも土器が数点出土しており、地形等からみて、遺跡の主体部は調査区域外の南側にあるものと推定される。



明通遺跡調查区域圖



調査区透景



焼土遺構(平面)



土層断面



焼土遺構(断面)



縄文土器



切断蓋付土器



磨製石斧



砥石

明通遺跡 検出遺構・出土遺物

(7) ^{しも} ^{かわら} 下川原 II 遺跡

所在地 紫波郡紫波町南日詰字下川原121-3ほか
委託者 岩手県土木部 盛岡土木事務所
発掘調査期間 平成3年6月21日～11月29日
調査対象面積 10,460㎡
発掘調査面積 10,460㎡
遺跡番号・略号 LE77-2290・SKII-91
調査担当者 佐々木 弘・佐々木 務・遠藤 修・星 雅之・引屋 敦 学
協力機関 紫波町教育委員会



1 : 50,000 日詰・花巻

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

下川原Ⅱ遺跡は東日本旅客鉄道日詰駅の南々東約3kmの滝名川東岸に位置し、滝名川と北上川によって形成された河岸低地に立地している。遺跡の標高は88～90mで、調査前の状況は水田・畑地である。調査範囲は滝名川と北上川の合流点から北に約400m、東西幅20～40mである。

本遺跡の周辺には縄文時代の南日詰遺跡、西田遺跡、下川原Ⅰ遺跡、平安時代の伝書知鳥館跡などがある。

2. 調査の概要

今回の調査で発見された遺構は、平安時代の竪穴住居跡21棟、同時代のものを含む溝10条、縄文時代の陥し穴状遺構9基などである。その他、土坑7基、焼土遺構1基が検出されている。

〈陥し穴状遺構〉

陥し穴状遺構は、北側で4基、中央で4基、南側で1基検出されている。いずれも長さ3m前後、幅40～80cm、深さ50～130cmの溝状のものである。

〈竪穴住居跡〉

21棟すべて平安時代と考えられる。そのうちほぼ平面形が確認できたものは15棟で、規模は1辺が4m以上のもの8棟、3m位のもの5棟、2m位のもの2棟である。多くは四辺が概ね東西南北方向に面しており、1棟はほぼ45度ねじれた方向になっている。いずれも水田造成等による削平を受けており、遺存状況もさまざまである。

また、焼失した住居跡が多いのも一つの特徴で、21棟中10棟が焼失住居と思われる。

カマドは、東壁に設けられているもの12棟と、北壁に設けられているもの4棟である。前者のうち5棟が南寄り、4棟が北寄りに配置され、後者のうち2棟が東寄りに配置されている。その他に北東壁南東寄りに設けられているものが1棟ある。袖部は角礫を芯にして、暗褐色～黒褐色シルトをまいてつくられているものが多く、なかにはぶい黄褐色粘土を用いているものもある。煙道は削平のため確認できたものは少ないが、燃焼部から緩やかに上昇しながら煙出口につながるものが多いと思われる。そうした中で、削り置き式の煙道を持つものが1棟確認されている。柱穴の配置が確認されている住居跡は9棟で、そのうち4棟は南側、4棟は東側に寄った配置になっている。

〈溝跡〉

溝跡は調査区のほぼ全域から10条検出されている。北側から3条、南側から5条、中央部から2条検出されている。東西方向や南北方向に延びるものが多く、中には大きく湾曲するものもある。いずれも調査区外に続いており、全体の規模を把握できたものはない。調査区中央部で、調査区東端から滝名川に向かって東西に延びている溝跡は幅0.8～1.7m、深さ40～50cmで、

平安時代のもと思われる。その他の溝跡は同時代かそれ以降につくられたものと思われる。

〈その他〉

土坑7基のうち2基は直径80cm程の円形で、深さ30～40cmである。この2つは平安時代の住居跡に隣接し、埋土も同様であり、同時期のもと考えられる。他のものは時期不明である。

他に焼土遺構があるが、これは地面を掘り込んでつくられたカマド状のものである。

〈出土遺物〉

平安時代の土器がほとんどで、主に住居跡から土師器・須恵器が出土している。量的には土師器が多い。土師器は坏・甕がほとんどで、坏の底部の多くが回転糸切り無調整である。台付のものも少数ある。焼失した住居跡からは床面に直接乗る形で、炭化したススキが見つまっている。また住居跡からは管状土錘・鉄製紡錘車などが出土している。

他に、少量であるが縄文晩期～弥生の土器片や石鏃なども出土している。

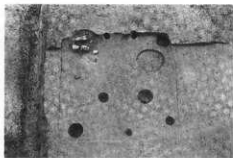
3. まとめ

今回の調査により、下川原II遺跡は平安時代の大規模な集落であることが判明した。今回の調査は滝名川寄りの一部分だけが対象であり、調査区東側に広がる遺跡全体を考えると相当数の住居跡が眠っていると思われる。しかし、今回発見された住居跡は規模やカマドの位置等に違いがみられ、同時期に存在していたかどうかは不明である。出土した土器もあわせて、今後検討する必要がある。

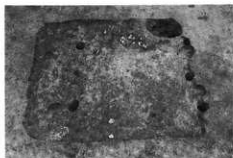
また、縄文時代のもと思われる陥し穴状遺構も検出されており、本遺跡は平安時代と縄文時代の複合遺跡としての性格を持っている。



平安時代の竪穴住居跡



平安時代の竪穴住居跡



平安時代の竪穴住居跡



縄文時代の陥し穴状遺構



1



2



3



4



5



6

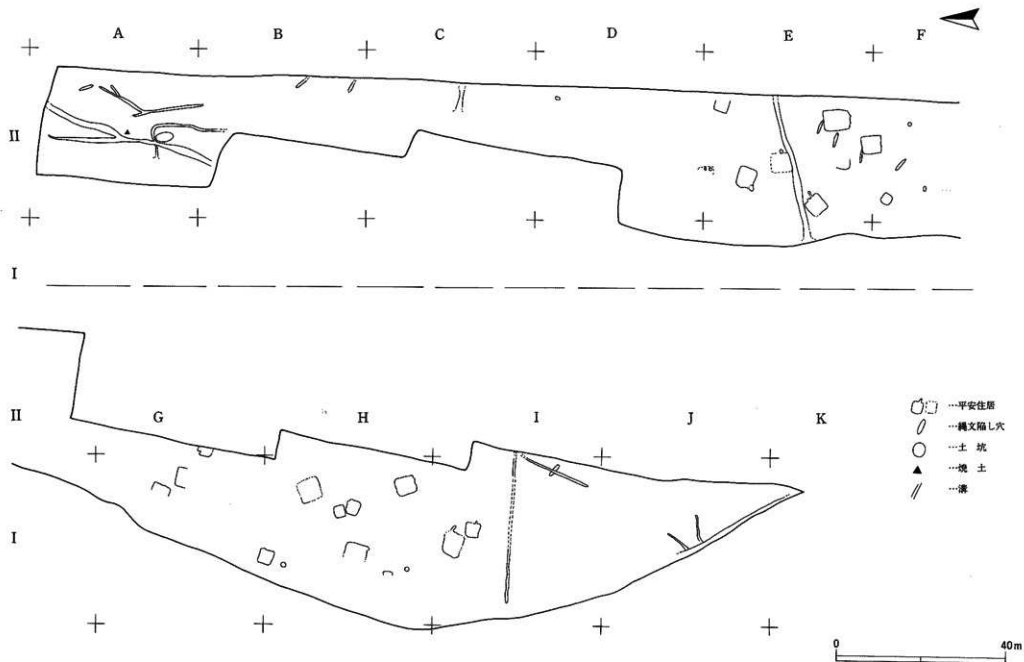


7



8

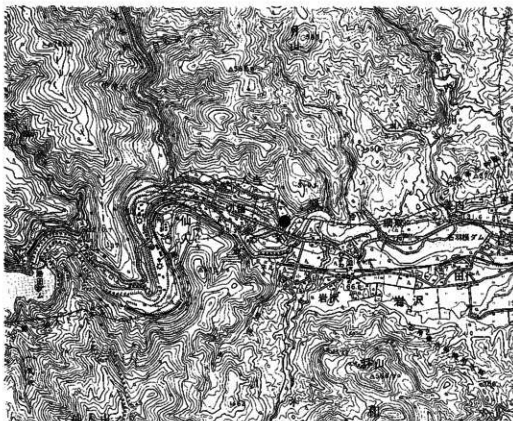
下川原Ⅱ遺跡 検出遺構・出土遺物



下川原Ⅱ遺跡遺構配置図

(8) ひとあて I 遺跡

所在地 北上市和賀町仙人9地割88、103-2、105-2
委託者 岩手県土木部 北本内ダム建設事務所
発掘調査期間 平成3年4月16日～5月10日
調査対象面積 400㎡
発掘調査面積 400㎡
遺跡番号・略号 ME51-2319・HA-91
調査担当者 中川重紀・千葉 悟
協力機関 北上市教育委員会、北上市埋蔵文化財センター



遺跡位置図

1. 遺跡の立地

本当1遺跡は東日本旅客鉄道北上線と和賀仙人駅の東1km同岩沢駅の北西1km、国道107号線の北側50mに位置し、和賀川が大きく蛇行する北側台地縁辺部分に立地している。標高は159m前後で、和賀川とは比高30mの急激な崖面で区切られる。現状は畑地、原野である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、縄文時代の土坑7基、新しい時期の方形土坑13基等である。

〈土坑〉

縄文時代の土坑は、調査区東側に5基、西側に2基検出され、断面形態からフラスコ状とビーカー状、皿状があり、内訳は東側でフラスコ状3基、ビーカー状2基、皿状2基、西側でフラスコ状2基が検出されている。

フラスコ状土坑は平面形が円形である。規模は開口部で94～130cm、頸部で90cm前後、底部で93～140cm前後、深さ62～106cmである。また、東側の1基には底部に東西、南北方向に溝が中央部で交差して検出され、中央部に上部幅22cm、深さ10cmの小穴がある。埋土は西側の2基が埋め戻され、東側の1基は埋め戻しと自然堆積である。

ビーカー状土坑は平面形が隅丸形状である。調査区の東側に検出されている。規模は開口部で長軸130～150、短軸119～130cm、底部で長軸107～131cm、短軸88～105cm、深さ45～78cmである。埋土は、自然堆積の様相を呈する。

皿状土坑は平面形が円形状で、規模は1基が開口部92×96cm、底面68×73cm、深さ31cmである。埋土は黒褐色土の単層である。他の1基は調査区外の大半にあり全体形は不明である。

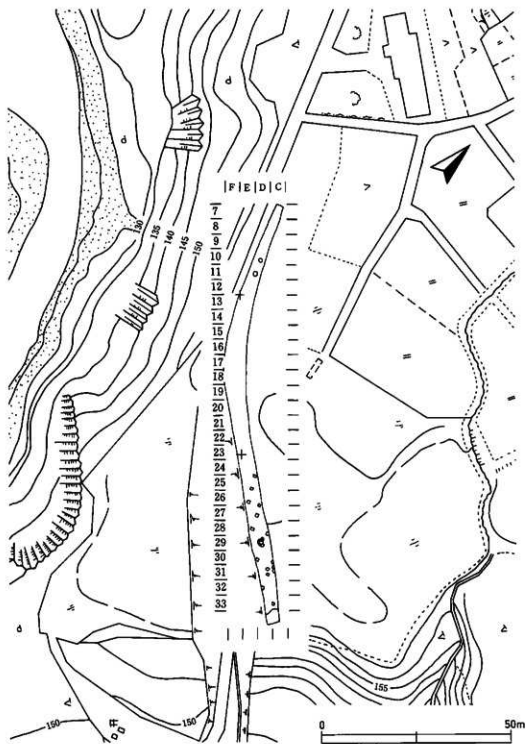
新しい時期の方形土坑は調査区の中程から東側に約3.5mの間隔で東西、南北に沿って13基検出された。規模は開口部で最大79×68cm、最小48×55cm、検出面からの深さ11～37cmである。埋土は黒褐色土の単層である。この土坑は精査状況から新しい時期の土坑と思われる。

〈出土遺物〉

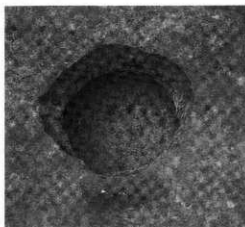
遺構内外から、量は多くないが土器、石器、石製品が出土した。土器は、縄文時代前期を中心として、早期、中期、晩期と弥生時代後期のものが出土している。石器は、石鏃、石匙、削器、石斧、磨石、石錐が出土している。石製品は耳飾り片が1点出土している。

3. まとめ

今回の調査で、縄文時代の土坑7基が調査区の東側と西側に分かれて検出され、遺跡は、調査区北側に広がるものと考えられる。また、出土遺物から縄文時代から人々の生活が営まれてきた場所であることが判明した。



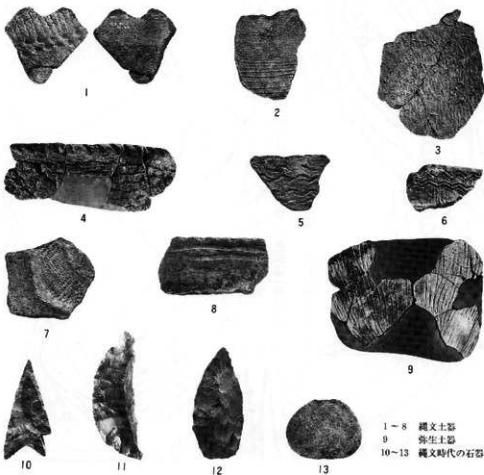
人当遺跡 周辺地形・遺構配置図



フラスコ状土坑



フラスコ状土坑



1-8 縄文土器
9 弥生土器
10-13 縄文時代の石器

人当遺跡 検出遺構・出土遺物

(9) 田代 IV 遺跡

所在地 九戸郡九戸村大字江刺家第3地割字久保頭48ほか

委託者 岩手県二戸地方振興局 二戸土地改良事業所

発掘調査期間 平成3年4月9日～5月8日

調査対象面積 1,000㎡

発掘調査面積 1,000㎡

遺跡番号・略号 JF12-0141・TSIV-91

調査担当者 斎藤 實・藤村敏男

協力機関 九戸村教育委員会



1 : 50,000 一戸

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

田代IV遺跡は、八戸自動車道九戸インターチェンジの南東約500m、国道340号の西側に位置し、瀬月内川によって形成された低位段丘上に立地する。標高は、調査区Ⅲ区が280～284m、Ⅳ区が295～302mである。現況は畑地と山林である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、調査区Ⅲ区から陥し穴状遺構1基、Ⅳ区から陥し穴状遺構3基・土坑1基である。

〈陥し穴状遺構〉

調査区Ⅲ区の西側で検出された陥し穴状遺構は、北側の一部が調査区域外に延びている。平面形は溝状、断面形はY字状を呈する。規模は、長さ約2.7m、幅約65～70cm、深さ約70～80cmである。Ⅳ区の北側で検出された陥し穴状遺構は、重複関係にあるもの2基、その内の1基は埋土上面に灰白色の火山灰が楕円状に広がり、平面形が不整の楕円形、断面形がU字状を呈する。規模は、長さ約2.85m、幅約1.3～1.5m、深さ約1.25～1.6mである。他の陥し穴状遺構2基は、平面形が溝状、断面形がY字状を呈する。規模は、長さ約3.2m、幅約60～110cm、深さ約1.2～1.3mである。時期は、検出面及び形状などから縄文時代のものと思われる。

〈土 坑〉

土坑は、調査区Ⅳ区の北側で検出された。埋土に焼土及び炭化材が多量に含まれ、壁面から底部に焼成を受けた痕跡が認められる。平面形は不整の隈丸方形、断面形は箱形を呈する。規模は、長さ約1.5×1.75m、深さ30cmである。時期は不明である。

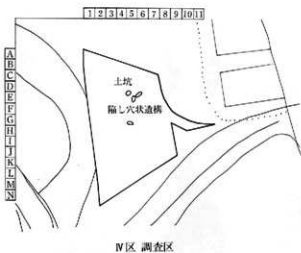
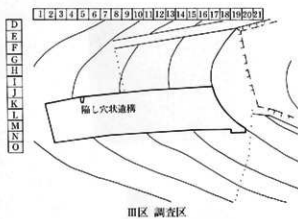
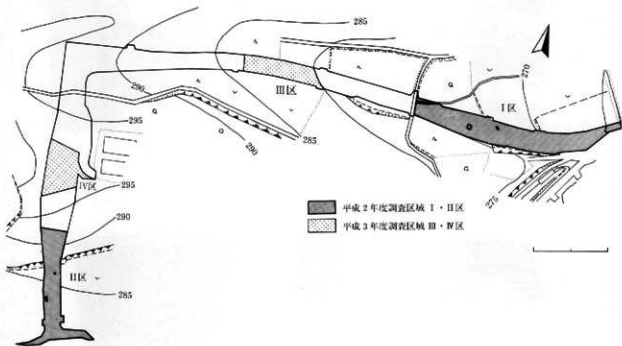
〈出土遺物〉

遺物は、Ⅲ区から縄文時代早期・前期・中期の土器が出土している。Ⅳ区からは縄文時代早期、弥生時代の土器が極めて少量出土している。石器は、Ⅲ区から石鎌・石匙・磨石・凹石などが少量出土している。

3. まとめ

遺跡は昨年度からの継続調査で、縄文時代早期より生活の場として利用されたことが確認された。今回の調査では、Ⅲ・Ⅳ区から陥し穴状遺構などが検出され、狩り場跡であることが明らかになった。昨年度の調査結果では、Ⅰ区から縄文時代中期後葉以降の配石遺構群が検出され、Ⅱ区から竪穴住居跡遺構が検出され、縄文時代早期の土器が出土している。

遺跡からは集落跡としての資料を得るまでに至らなかったが、検出された遺構と関連をもつ集落が近郊に存在していたものと推測される。



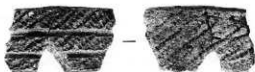
田代Ⅳ遺跡遺構配置図



Ⅳ区 陥し穴状遺構群



断面



1



2



4



5



3



6



7

1~3
縄文土器
4・5
石 鏃
6・7
石 匙

田代Ⅳ遺跡 検出遺構・出土遺物

(10) 上鷹生遺跡

所在地 大船渡市日頃市町字上代27-1他
委託者 岩手県土木部 鷹生ダム建設事務所
発掘調査期間 平成3年6月24日～10月31日
調査対象面積 1,300㎡
発掘調査面積 780㎡
遺跡番号・略号 NF18-2222・KT-91
調査担当者 酒井宗孝・伊東 格・金子昭彦
協力機関 大船渡市教育委員会



1 : 50,000 盛

遺跡位置図

1. 遺跡の位置と立地

上鷹生遺跡は、岩手開発鉄道日頃市駅の北東約2.5kmに位置し、鷹生川右岸に発達した小規模な扇状地に立地する。遺跡の載る扇状地は、南流する鷹生川によって開析され、地内では比較的広い平坦地である。

調査区は東側の扇側部にあたり、現地地形面は南向きの緩斜面を呈するが、山寄りの部分での旧地形は約25°の急斜面となっている。標高は156～152m、現河床からの比高は11～7 mで、現状は畑地と山林である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡3棟、墓墳7基、土坑類21基、焼土遺構8カ所、土器埋設遺構22基等である。本年度は、このうち竪穴住居跡1棟、墓墳6基、土坑類16基、土器埋設遺構16基、焼土遺構8カ所を精査した。これらの遺構は、検出面や出土遺物からいずれも縄文時代に位置づけられる。

〈竪穴住居跡〉

斜面部から平坦部へ移行する部分から検出された。黒色土中で、貼床及び炉跡が検出されたことによって住居跡と認定した。大半が調査区域外にかかることや、壁の立ち上がり把握できなかったことから、形状や規模の詳細は不明である。貼床の範囲から推定すると、直径3.5m前後の円形を基調とした住居と考えられる。

炉は、石囲炉で40×40cmの不正な六角形に構築され、炉の内部にも礫を敷いている。貼床は、粘土質の明褐色土を用いており、いくぶん凹凸はあるが全体に硬くしまる。

出土した土器片から、縄文時代後期～晩期の遺構と考えられる。

〈墓 墳〉

形状・形態から墓墳もしくはその可能性が強い遺構は6基で、いずれも平坦部分から検出された。平面形は楕円形(隈丸長方形)を基調とし、規模は長さ220～105cm、幅150～60cm、深さ42～5cmである。

これらの内の2基の内部には、整然としたものではないが30～10cmの礫による石組を持つ。また、1基には頭部を囲むように3個の礫が据えられていたほか、埋土の上部には自然石を利用した石皿が斜位に埋置されていた。なお、この遺構と石組が施されるものの1基には、赤色顔料が部分的に分布していた。

〈土 坑 類〉

斜面の下部と平坦部から検出された。形態には皿状を呈するものと柱穴状の小土坑がある。前者の多くは円形を基調とし、規模は径1 m以上のものと50cm以下の小型のものがある。この

内1基は径150cm、深さ21cmの規模をもち、底面に30cm内外の礫を4個と立石と考えられる長さ63cmの礫1個を伴う。また、入れ子の状態で縄文晩期の深鉢が2個出土している。その他、径50cmの小型の土坑にも礫を伴うものが1基ある。

これらの土坑は、前述の墓塚群とほぼ同じ分布状況を示し、一部は墓塚の可能性がある。

柱穴状の小土坑は、18基検出された。1基を除いて平坦部に分布する。規模は径17～26cm、深さ13～35cmである。埋土はほとんどのものが単層で、柱痕跡等は認められなかったが、埋土中に焼土を含むものが2基ある。なお、規則的な配置を示すものはない。

性格は不明であるが、分布を墓塚群と同じくすることから、墓に関わる遺構であろう。

〈土器埋設遺構〉

斜面部・平坦部のいずれからも検出されているが、斜面に分布するものが多い。大型の深鉢土器を用い、平坦部では正立、斜面部では斜位に埋置されている。数例を除いて黒色土層中に埋設されており、掘り方を把握できるものは少なかった。

土器の他に遺物を伴うものは1基のみで、内部から磨製石斧が2個出土している。時期的には、縄文時代晩期初頭～中葉の遺構である。

今回の調査では性格を判断できる遺物は出土しなかったが、他の遺跡の事例から推定して埋葬の一形態と考えられる。

〈出土遺物〉

大半が遺物包含層からの出土で土器、土製品、石器、石製品がある。

土器は約735kgが出土した。縄文土器が主体を占め、弥生土器と土師器・須恵器が僅かに出土している。時期的には、縄文時代晩期前葉～中葉のものが卓越しており、全体の約8割を占める。器種には深鉢、浅鉢、壺、皿、注口土器、香炉など多くの種類がある。

土製品は数は少ないが、円盤状土製品、土偶と土面の破片が出土している。石器・石製品では石鏃、石錐、搔器・削器類、石棒、石刀などが多く出土している。

3. まとめ

今回の調査で、上層遺跡は、縄文時代晩期を主体とした集落跡であることが判明した。検出された遺構の多くは、墓に関係するものであり、今回調査された部分は、集落内における墓域と考えられる。

土坑墓と埋設土器の分布を見ると、一部で重複するもののほぼ区域を異にしており、埋葬の形態別に場所を使い分けていることが窺われる。また、検出された埋設土器群には、型式的に時間差が見られ、時期を異にしても占地の傾向は受け継がれていたと考えられ、該期の葬制を考えるうえで好資料を追加することができた。



竪穴住居跡



墓 塚



石組をもつ墓塚



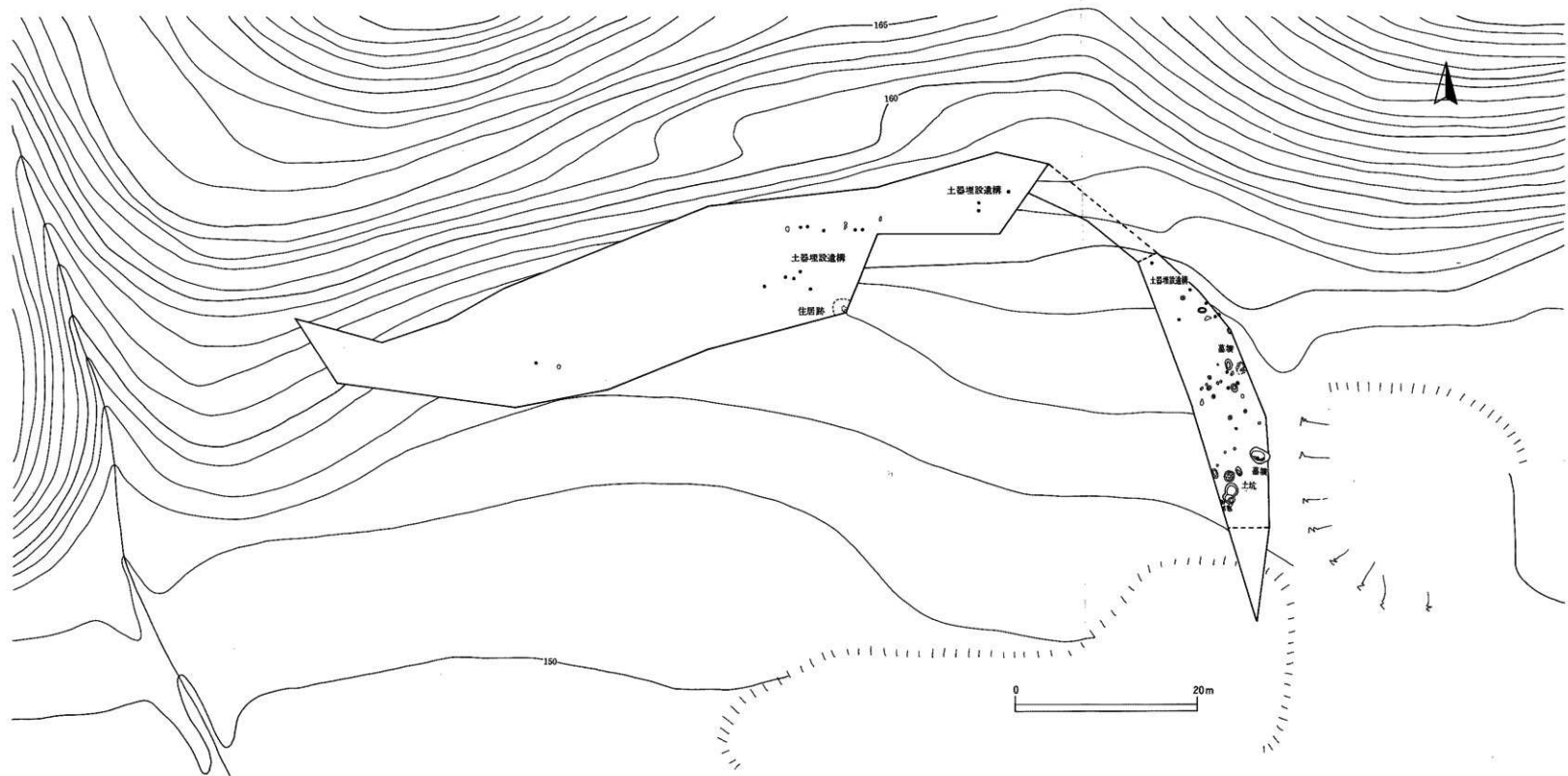
土 坑



石 棒

土 偶

上 厩 生 遺 跡 検 出 遺 構 ・ 出 土 遺 物



上層生遺跡遺構配置圖

(11) ^{かみやぎた}上八木田 I 遺跡

所在地 盛岡市新庄字上八木田33-1ほか
委託者 岩手県競馬組合
発掘調査期間 平成3年4月8日～11月15日
調査対象面積 22,400㎡
発掘調査面積 22,400㎡
遺跡番号・略号 LF18-1103・KYI-91
調査担当者 平井 達・酒井宗孝・笹平克子・佐瀬 隆・神 敏明
千葉孝雄・浜田 宏・金子昭彦・山口博英・八重座のり子
協力機関 盛岡市教育委員会



1 : 50,000 盛岡

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

上八木田 I 遺跡は、盛岡市役所の東約 5 km、網取りダム堰堤の南約 2.5 km に位置し、北上山地の西縁部に所在する。遺跡の標高は 260～275 m である。本遺跡は中津川に注ぐ八木田沢が開折した幅の狭い谷底平野と、そこに向かって張り出す 2 つの尾根の裾野に立地する。現況は山林、畑地、民家跡等である。

2. 調査の概要

発見された縄文時代の遺構は竪穴住居跡 162 棟、土坑 84 基、炉跡及び焼土遺構 39 か所である。遺物は弥生土器も含めて、土器・土製品が中型のコンテナ 170 箱、石器・石製品は 107 箱が出土した。平安時代の遺構は竪穴住居跡 4 棟、土坑 1 基、廃棄された焼土遺構 1 か所である。近世以降の遺構としては土坑 1 基、墓壇 4 基、炭窯 6 基、時期不明の焼土は 4 基である。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、金属器、および現代の陶磁器等が出土した。

〈住居跡〉

縄文時代の住居跡 162 棟のうち前期が 156 棟、中期末葉 6 棟である。住居跡は全て竪穴式であり掘立柱式のものはない。

前期の住居跡は主として尾根の南斜面に集中する。住居跡は非常に重複をしており、本来のプランを完全な形で遺存しているのは少ない。また極めて掘り込みが浅く、すでに流失や削平、攪乱等を受けているものも多い。

平面形は長方形や小判形のもが主である。規模は大型のものは少なく、概ね径が 2×3 m 程度のもが多い。最大の住居跡は 4.7×10 m である。小規模のものは長軸で 2 m 前後のもがあり、これが 20 棟を超える。柱穴を有する住居は概ね 4 m を越える比較的大型のものにのみ検出され、小型のものには見られない。炉を有する住居跡は約半数で、石囲炉はわずかに 2 棟、他は地床炉である。周溝が回るものは平面形や規模の違い等による差はないが、時期によるものがあるのかどうかは今後の整理に待つことになる。共存遺物を有する住居跡は 3 分の 1 程度である。出土状況において幾つかの特徴ある出方をしているものがある。フレークを一括出土させているもの、石鏃を一括出土させたもの、ひと抱えほどの偏平な台石を壁際に配置しているもの等である。

中期末葉の住居は極めて特異な状況を示す。6 棟のうち 1 棟は遺存状況が悪く不明な点が多いが、他の 5 棟はほぼ一直線に並ぶ。炉はほぼ中央に粘土を貼り、土器を斜位に埋設する。1 棟を除き全てから石棒が出土した。石棒はいずれも破片であるが、一つは他の住居から出土した石棒と接合した。これらの住居跡は 1 m 内外で接しており、同時存在とは考えられないが、

土器形式による時期差は無い。

平安時代の住居跡は4棟である。2棟ずつ対となって沢沿いに検出された。しかも、1棟はいずれも遺存状態が悪く、廃棄されたと思われる。1辺が約4mの方形で、検出面からの掘り込みは最大30cmである。柱穴はなく、カマド脇に土坑がある。1棟は板敷き住居である。カマドは斜面の上方向かって設置される。位置は北東隅に寄る。煙道は削り貫き式と掘り込み式である。

〈土 坑〉

土坑は84基検出された。平面形が円形、開口部の径が1m内外の中・小規模のものと、小判形で規模が80cm×1.2mも見られる。

〈陥し穴状遺構〉

溝状のものが6基、円筒状3基が検出されている。これらの特徴は連続して作られていないこと、溝状タイプのものは底部幅が40cmほどの幅広タイプのものが多いこと等である。

〈炉跡・焼土〉

炉跡及び焼土遺構は45カ所検出された。炉跡は石囲炉2基である。他は所謂焼土遺構としたが、遺物の出土状況からみると地床炉だったものも含まれている。焼成は比較的良好で焼土の厚さが5cmを越えるものと、淡く厚さ1～2cmのものに分けられる。

〈出土遺物〉

縄文土器は早期から晩期まで出土しているが、大木4式から大木6～7a式が卓越する。しかし、S字状連鎖沈線文、縄文を施文する尖底土器等も出土していることから前期前葉の土器も若干見込まれ、前期の遺構の変遷と遺物の系統的な把握が可能となるかもしれない。また、若干の円筒土器下層式も見られる。

土器器は回転糸切り無調整の坏、ロクロ整形の甕とロクロ不使用の甕である。石器は剥片石器が多く、なかでもスクレーパー類、石匙が卓越する。礫石器では磨石類、礫石錘、磨製石斧等が多い。

これらの遺物は表層から20～30cmまでの中に混然となって包含されており、層的に分離できない。しかし、出土地点がある程度まとまりを持っていることから、遺構と遺物が有機的な関連を持って把握することが可能となるかもしれない。

3. まとめ

本遺跡の特徴は縄文時代前期の集落にあり、その占地と住居跡の時期別形態や変遷過程等に多くの資料を提供してくれるものと思われる。

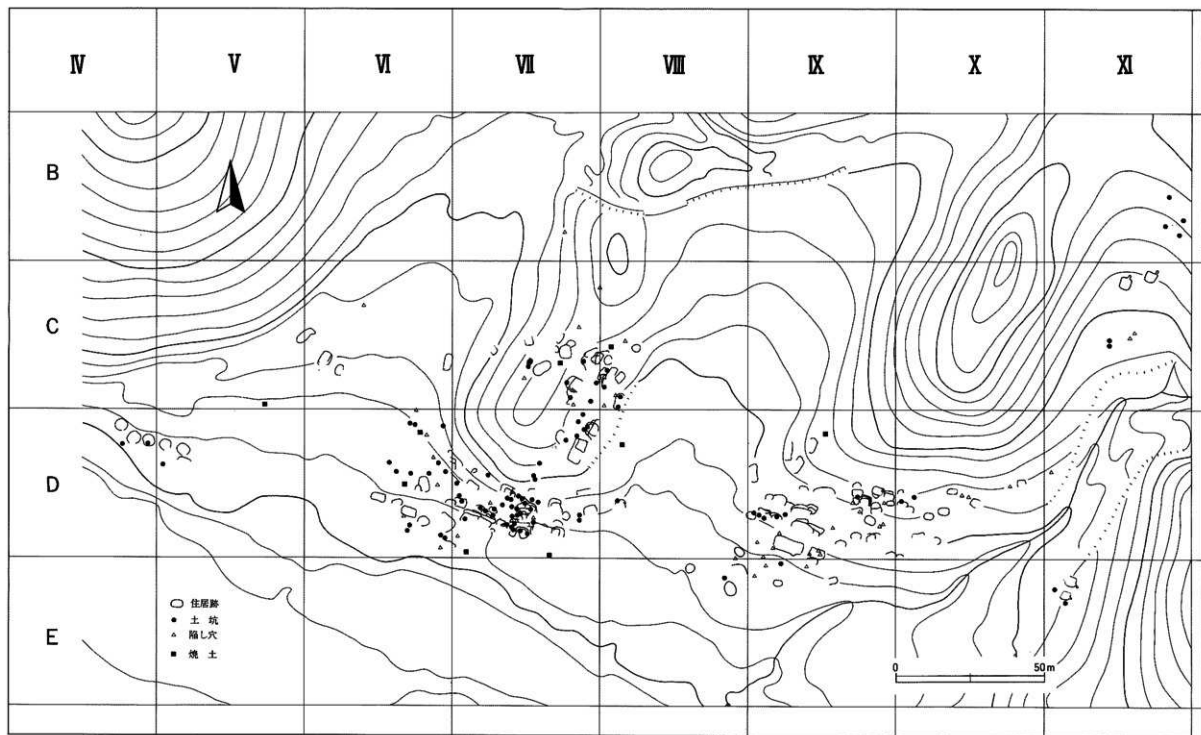


上八木田 I 遺跡主要部



- 1-3 石器
4 耳飾り
5-9 縄文土器
10 土師器

上八木田 I 遺跡 空中写真・出土遺物



上八木田 I 遺構配置図

(12) ^{かみやぎた}上八木田II遺跡

所在地 盛岡市新庄字上八木田33-1ほか
委託者 岩手県競馬組合
発掘調査期間 平成3年4月8日～6月19日
調査対象面積 6,000㎡
発掘調査面積 6,000㎡
遺跡番号・略号 LF18-1121・KYII-91
調査担当者 佐瀬 隆・佐々木 弘・神 敏明
協力機関 盛岡市教育委員会



1 : 50,000 盛岡

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

上八木田Ⅱ遺跡は、盛岡市役所の東約5km、綱取ダム堰堤の南約2kmに位置し、北上山地の西縁部に所在する。遺跡の立地する地形は、山地縁辺部の緩斜面で、その標高は260～270mにある。現況は山林および畑地である。

2. 調査の概要

発見された遺構は、平安時代の竪穴住居跡2棟、陥し穴状遺構5基、土坑5基、焼土遺構4基および近世以降の住居跡状遺構1棟である。

〈竪穴住居跡〉

いずれも平安時代のもので、4m四方と4×3.5mの規模である。前者のカマドは南西壁の南寄りに、後者のそれは南東壁の南寄りに粘板岩を芯材にして構築され、いずれも掘込式の煙道部をもつ。

〈土 坑〉

2基はフラスコ状、3基は皿状のものである。既存の資料からフラスコ状のものは、縄文時代に所属すると考えられる。

〈陥し穴状遺構〉

5基のうち1基は溝状を呈し、残りは長方形の平面形を示す。後者では3基において埋土最上部に十和田a降下火山灰を伴う。所属時期は既存の資料から溝状のものは縄文時代、長方形のものはそれよりも新しいと考えられる。

〈焼 土〉

いずれも現地性のものであるが所属時期は不明である。

〈住居跡状遺構〉

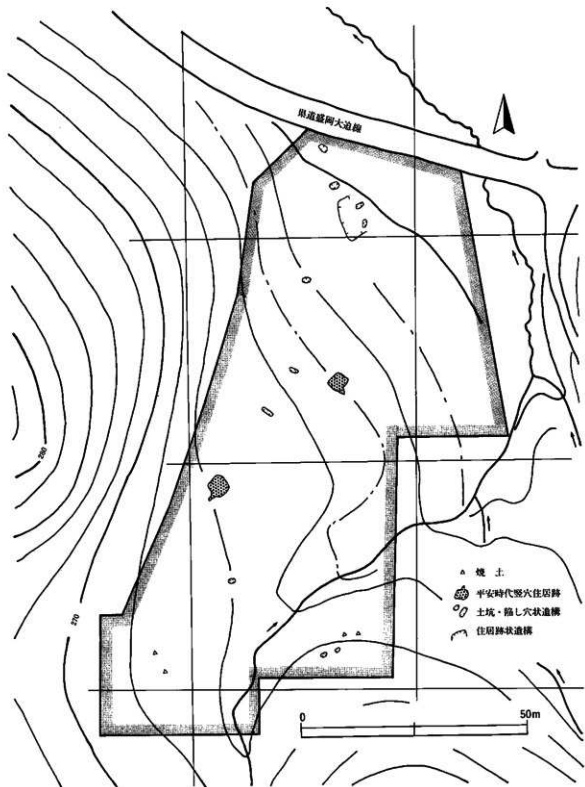
コの字状にめぐる壁を有し、その内側にそって浅い溝が認められるものである。埋土下部から煙管の吹口が出土していることから、その時期は近世以降と考えられる。

〈出土遺物〉

遺物量は、遺物収納大コンテナ2箱である。その大部分は、縄文時代早期から晩期までの土器と平安時代の土師器からなる。縄文時代の遺物の大半は前期に帰属され、平安時代のものは竪穴住居跡内その隣接地から出土している。石器は少なく剥片石器など30点ほどである。

3. まとめ

今回の調査により上八木田Ⅱ遺跡は、縄文時代以降、狩り場や木の実等の貯蔵の場として、また平安時代には集落として利用されたことが判明した。



上八木田 II 遺跡遺構配置図



平安時代竪穴住居跡



陥し穴状遺構



陥し穴状遺構



平安時代竪穴住居跡



土坑



平安時代土師器



縄文時代早期土器



縄文時代晚期土器



磨製石斧

上八木田Ⅱ遺跡 検出遺構・出土遺物

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第178集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成3年度分)

平成4年3月20日 印刷

平成4年3月25日 発行

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡南村下飯岡11字高屋敷185

電話 (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社 吉田印刷

〒020 盛岡市名瀬川町23-27

電話 (0196) 25-2323
